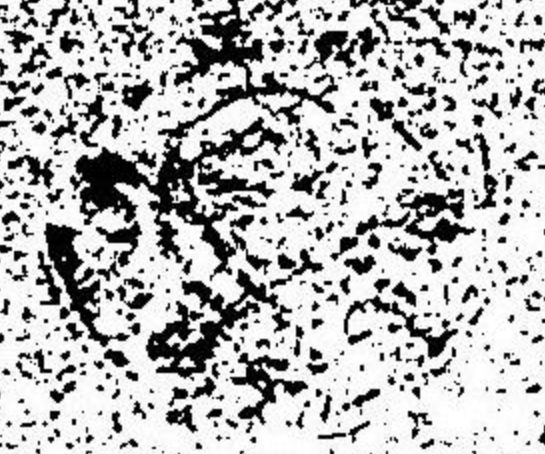


大審院判決錄





C2  
2114  
03

# 大審院判決錄

## 凡 例

- 一 本書ハ大審院民刑各部ノ判決ヲ輯録ス
- 一 本書ハ毎月發兌シ前月ノ判決ヲ登錄ス
- 一 本書編次ノ體裁ハ民刑ヲ區分シテ二卷トシ其輯録ノ順序ハ宣告日付ノ前後ニ依ル
- 一 目錄ヲ分テ總目錄、事件目錄、いろは索引、法文表、月日目錄、及ヒ人名音字目錄ト爲ス
- 一 件名ノ次ニ判決ノ要旨ヲ摘録ス事件異ナルモ其判旨同一ナルモノハ前例ヲ參照シテ特ニ重録セズ
- 一 上告ノ論點ト判決ノ説明トノ間ニ○ヲ施シ區劃ヲ明ニシ亦タ判決要旨ニ適合スヘキ説明ニハ、ハ、ハ、ハ、ヲ施シ閱覽ニ便ス
- 一 丁數ノ上ニハ關係ノ事項ヲ掲ク
- 一 年度末ニ至リ全部ニ通スル諸目錄ヲ作成シ搜索ニ便ス

例 凡



總目録

民法

戸主死亡ニ家族中他ニ相続人ナキトキハ遺妻ニ於テ相続スルノ權アリ  
トノ事.....三二

他人ノ權利ヲ目的トセル賣買契約ヲ全然無効ナリトセル判決ハ不當ナ  
リトノ事.....三五

債權者ハ自己ノ債權保全ノ爲メ債務者ニ代リ代位訴訟ヲ提起シ得ヘキ  
コトハ一般法理ノ認ムル所ナリトノ事.....三二

地所ノ買主カ賣主ニ代リ買戻權行使ノ爲メ代位訴訟ヲ提起スル資格ナ  
キ場合ノ事.....三六

民事訴訟法

原判決正本寫ヲ控訴狀ノ末尾ニ添付シタルトキ判決表示ノ効力アル場  
合ノ事.....一



第一審訴訟委任狀ニ不完全ノ廉アルモ第二審ニ於テ完全ナル委任狀ヲ提出セルトキハ疑キノ委任欠缺ハ之ヲ追認シタルモノト認メ得ヘキモノナリトノ事.....五

自己ノ申立ニ符合セル判決ヲ受ケタル者ハ其裁判ニ不法ノ廉アルモ之ヲ理由トシテ上訴ヲ爲スヲ得ストノ事.....八

水利組合ノ議決ニ基ク新堰修繕工事ハ行政上ノ處分行爲ニシテ上級行政廳ノ監督ニ屬スヘキモノナルニ依リ該工事施行ニ因リ私權ヲ害セラレ、コトアルモ司法裁判所ニ出訴スヘキモノニアラストノ事.....二一

故障申立書中闕席判決言渡ノ日附ニ誤記アルモ其他ノ要件具備セルトキハ闕席判決ノ表示ヲ欠キタルモノト云フヲ得サル場合ノ事.....二五

證人ノ陳述ヲ豫想シ之ヲ信用スルニ足ラサルコトヲ定メ其申請ノ當否ヲ判定スルハ不法ニアラストノ事.....二八

證人カ過去ノ事ヲ陳フルハ自己ノ見聞セル事實ヲ記憶ニ因リ陳述スレハ足ルトノ事.....三六

會社解散ノ申請ヲ棄却セル裁判ニ付テハ法律上規定ナキヲ以テ之ニ對シテ抗告ヲ爲スヲ得ストノ事.....三九

婚姻事件養子縁組事件及ヒ禁治産事件

ニ關スル訴訟規則

養子縁組ノ訴訟ヲ養父ノ住所ニアラサル地ノ裁判所ニ於テ受理審判シタルハ違法ナリトノ事.....八

明治十六年内務省番外達

明治十九年司法省訓令第三十九號

明治十六年内務省番外達及同十九年司法省第三十九號訓令中所謂親族ノ意義ノ事.....三三

明治十六年内務省番外達中親族連署トアル語句ノ解釋ノ事.....三三



事件目錄

事 件	關係事項	判決 月日	番 號	訴訟關係人	丁 數
計算譯立請求ノ件	原判決ノ表示	十一月 十二日	三十年 四二五號	上告人 中谷 半七外一名 被上告人 坂東六次郎	一
小作地引揚請求ノ件	第一審ノ委任欠缺	十一月 十七日	三十年 四三一號	上告人 佐藤道太郎 被上告人 衣田善九郎	五
養子離別復籍請求ノ件	養子離縁ノ訴訟、上訴ノ理由	十一月 十八日	三十年 二六二號	上告人 山本 藤助 被上告人 藤村源一郎	八
墮留妨害排除ノ件	水利組合ノ訴訟	十一月 十九日	三十年 四四一號	上告人 三上才太郎 被上告人 坂田 助	二
預金請求ノ件	關席判決ノ表示	十一月 二十日	三十年 告四二號	抗告人 佐羽吉右衛門	五
貸金請求ノ件	證人訊問ノ申請	十一月 二十日	三十年 三七九號	上告人 木村忠四郎 被上告人 續田太一郎	六
地所書入登記取消請求ノ件	明治十六年內務省管外邊、同十九年司法省勅令第三十九號	十一月 廿一日	三十年 二五九號	上告人 山田 五平 被上告人 山田 五平	三
不法行為差止並損害賠償請求ノ件	證人ノ陳述	十一月 廿一日	六 號	上告人 藤清安兵衛 被上告人 藤清安兵衛	三
合資會社明解申請ノ件	會社解散ノ申請棄却ノ抗告	十一月 廿四日	抗告三號	抗告人 山田 良利 被上告人 山田 良利	元
養子入籍届並家督相続取消請求ノ件	遺棄ノ相續權	十一月 廿五日	三十年 一七九號	上告人 井上源太郎 被上告人 井上源太郎	三

事件目錄



事件目録

契約維持並立木引渡請求ノ件  
地所賣戻契約履行請求ノ件

他人ノ權利ヲ目的トスル賣買  
代位訴訟提起ノ資格、買戻  
權ノ主張

一月廿六日  
一月廿八日

三十年  
二六六號  
三十年  
二五七號

上告人 龜本長平  
被上告人 遠山義知  
上告人 栗元彌藏  
被上告人 栗元勝太郎

三元

いろは索引

此索引ハ専ラ法律上ノ用語ニ依リ其頭音ヲ取テいろはノ順ニ從テ排列編纂ス止ムヲ得サルニ非サレハ形容詞若クハ普通名詞ヲ用ヒス○頭音ハ必スシモ字音ノ假名遣ニ拘ハラズ人ノ通常言フ所ノ音聲ニ據ル例之ハいろはニ入ルカ如シ

[シ]

遺妻ノ相続權

戸主死亡シテ家族中他ニ相續人ナキトキハ戸主ノ遺妻ニ於テ相續スルノ權利アリ而シテ遺妻カ其相續ヲ拋棄シタルトキ始メテ親族會ノ議決ニ依リ他家ヨリ相續人ヲ選定スルコトヲ得ルハ本邦慣習ノ認ムル所ナリ

賣買契約

(他人ノ權利ヲ目的トスル賣買)參看

法律ノ規定

(会社解散ノ申請棄却ノ抗告)參看

慣習

(遺妻ノ相続權)參看

買戻權ノ主張

地所ノ賣主ニ於テ其地所ニ付キ第三者ニ對シ買戻權ヲ有スルトキ買主カ其地所ヲ買戻シ自ラ其地所ノ所有主タラントノ目的ヲ以テ賣主ニ代リ第三者ニ對シ買戻權ヲ主張スル者ハ賣買契約上ノ買主權ニ因リテ動作いろは索引

丁數  
三

元 三 元 五

[よ]

養子離縁ノ訴訟

スルモノニシテ共同擔保權ヲ原因トスル所ノ債權者ノ地位ニ立ツモノニアラス故ニ法理上代位訴訟ヲ提起スルノ資格ナシ

第一審ノ委任欠缺

第一審ノ委任狀不完全ナル第二審ニ於テ完全ナル委任狀ヲ提出セルトキハ第一審ノ委任欠缺ハ委任者本人ニ於テ追認シタルモノト認メ得ヘキニ依リ雖キモ委任欠缺ハ上告ノ理由トナラス

達

(明治十六年内務省番外達)參看

他人ノ權利ヲ目的トスル賣買

他人ノ權利ヲ目的トスル賣買ニ付テハ買主

八

五

三 三



いろは索引

ハ其權利ヲ取得シ之ヲ買主ニ移轉セシムルノ義務ヲ負フモノナルニ依リ他人ノ權利ヲ目的トシタル買買ハ其成立上全然無効ノ契約トシテ認メタル判決ハ不當ナリ

代位訴訟提起ノ資格

債務者ノ總財産ハ各債權者ノ共同擔保ニシテ債務者ノ債權ノ如キモ亦其財産ノ一部ナレバ債務者カ自ラ其權利ノ行爲ヲ拒ミ若クハ之ヲ怠リ爲メニ其財産ニ減少ヲ來シ各債權者ノ共同擔保權ヲ害セントスル恐アル場合ニ於テハ債權者ハ自己ノ債權保全ノ爲メ債務者ニ代リ代位訴訟ヲ提起シ得ヘキコトハ一般法理ノ認ムル所ナリ

相續權

(遺妻ノ相續權)參看  
相續人ノ選定  
(遺妻ノ相續權)參看

追認

(第一審ノ委任欠缺)參看

訓命

(明治十九年司法省訓令第三十九號同十六年內務省番外達)參看

元

三

三

五

三

〔ひ〕

會社解散ノ申請棄却ノ抗告

會社解散ノ申請ヲ棄却シタル裁判ニ對シテハ抗告ヲ爲シ得ヘキ法律ノ規定ナキニ依リ其裁判如何ニ不當ノ事アルモノニ對シ抗告ヲ爲スノ權ナシ

原判決ノ表示

控訴狀申原判決表示ノ部ニ別紙判決ノ全部ヲ記載スト掲ケ末尾ニ原判決正本寫ヲ添付シ其後目ニ控訴人自ラ契印ヲ爲シタルトキハ該正本寫ハ控訴狀ト分離セル別紙ニアラスシテ其實控訴狀ノ一部ヲ成セルモノナルニ依リ第一審判決ハ適法ニ表示セラレタルモノトス

闕席判決ノ表示

故障申立書申闕席判決言渡ノ日付ニ誤記アルモ其他ノ要件記載アリテ毫モ他ノ事件ト混同スヘキモノニアラサルトキハ民事訴訟法第二百五十六條第一號ノ表示ヲ欠キタルモノト云フヲ得ス

控訴狀

(原判決ノ表示)參看

故障申立書

元

一

五

五

一

〔そ〕

相續人ノ選定

(遺妻ノ相續權)參看

追認

(第一審ノ委任欠缺)參看

訓命

(明治十九年司法省訓令第三十九號同十六年內務省番外達)參看

〔つ〕

〔く〕

(闕席判決ノ表示)參看

抗告

(會社解散ノ申請棄却ノ抗告)參看

戸主ノ死亡

(遺妻ノ相續權)參看

債務者ノ總財産

(代位訴訟提起ノ資格)參看

債務者ノ債權

(代位訴訟提起ノ資格)參看

行政上ノ處分行爲

(永利組合ノ訴訟)參看

共同擔保權

(代位訴訟提起ノ資格)參看

明治二十三年法律第百四號

(養子離縁ノ訴訟)參看

明治十六年內務省番外達

明治十六年內務省番外達及同十九年司法省第三十九號訓令中所謂親族ノ語辭中ニハ其親縁ノ遠近ヲ問ハス苟モ血族姻族タルノ關係アリテ普通親族又ハ親類ト稱スルモノハ總ヘテ之ヲ包含スルモノト解釋スルモノヲ相當トス

いろは索引

元

三

六

六

二

元

八

三

〔し〕

明治十九年司法省訓令第三十九號

(明治十六年內務省番外達)參看

親族

(明治十六年內務省番外達)參看

親族連署

明治十六年內務省番外達ニハ單ニ「親族連署」トアリテ其人員ヲ指定セサルニ依リ親族一名ノ連署ハ以テ該達ノ規定ニ適合セルモノト見做スヲ當然ノ解釋ナリトス

證人ノ陳述

證人カ過去ノ事ヲ陳フルニ付テハ自己ノ見聞セル事實ヲ記憶ニ依リ陳述スレハ足ル故ニ證人ノ其現況ニ付キ再調査ヲ爲シタルモノニアラサレハ證言トシテ信憑力ヲ有セストノ主旨ニテ之ヲ排斥シタル裁判ハ不法ナリ

信憑力

(證人ノ陳述)參看

上訴ノ理由

上訴ハ之ヲ提起スル者ノ申立ノ全部又ハ一分ヲ排斥スル裁判ニ對シ不服ヲ申立ツル方

三

三

三

三

三

三

三

三

三

八



いろは索引

法ナルヲ以テ全然其申立ト符合スル裁判アリタル場合ハ假令其裁判ニ不法ノ廉アルモ之ヲ上訴ノ理由ト爲シ不服ヲ唱フルコトヲ得ス

證人訊問ノ申請

證人ノ陳述スヘキ事情ヲ豫想シ其豫想通り證人ヲ申出タル者ニ利益ナル證言ヲ爲スモノトスルモ之ヲ信用スルニ足ラサルコトヲ定メ以テ其申請ノ當否ヲ判定スルハ不法ニアラサルモノトス

申立ト符合セル裁判

(上訴ノ理由)參看

〔す〕

水利組合ノ訴訟

水利組合會ノ議決ニ基ク訴堰工事ハ水利組合條例ノ規定ニ依リ組合管理者ノ處分ニ出テタル行政上ノ處分行爲ニシテ即チ上級行政廳ノ監督ニ屬スヘキモノタリ故ニ其工事ノ施行ニ因リ私權ヲ害セラルルコトアルモ之ヲ排除ヲ請求センニハ水利組合條例ノ規定ニ從フヘキモノニシテ司法裁判所ニ出訴スヘキモノニアラス

一八

八

二

法 文 表

民事訴訟法

丁數

二五六條一號

一五

婚姻事件養子縁組事件及ヒ

禁治産ニ關スル訴訟規則

一條二項

八

明治十六年内務省番外達

三

明治十九年司法省訓令第三十九號

三



月日目錄

判決月日

一月十二日  
一月十七日  
一月十八日  
一月十九日  
一月二十日  
一月二十日  
一月二十一日  
一月二十一日  
一月二十四日  
一月二十五日  
一月二十六日  
一月二十八日

番號

三十年 四二五號  
三十年 四三一號  
三十年 二六二號  
三十年 四四一號  
三十年 抗告四二號  
三十年 三七九號  
三十年 二五九號  
六號  
三十年 坑告三號  
三十年 一七九號  
三十年 二六六號  
三十年 二五七號

判決結果

棄却  
棄却  
破毀  
棄却  
廢棄  
棄却  
棄却  
破毀  
破毀  
破毀  
棄却  
破毀

原控訴院

大阪  
東京  
大阪  
函館  
東京  
東京  
名古屋  
長崎  
大阪  
東京  
長崎  
大阪

丁數

五  
一  
八  
二  
五  
八  
三  
三  
三  
二  
三  
三  
三  
五  
六

月日目錄



棄却……………五件  
 破毀……………六件  
 廢棄……………一件  
 總計十二件

人名音字目錄

人名	番號	原控訴院	丁數
〔い〕 伊藤 祐 貞外一名對山口 良利……………抗告三號		大阪……………	二九
〔は〕 坂東大次郎 <small>被告上</small> ……………			一
〔と〕 遠山 義知 <small>被告上</small> ……………	三十年		三五
〔か〕 加藤 久平對山田リエ……………	二五九號	名古屋……………	三三
龜本長平對遠山 義知……………	三十年 二六六號	長崎……………	三五
〔よ〕 依田善九郎 <small>被告上</small> ……………	三十年		五
中谷半七外一名對坂東大次郎……………	四二五號	大阪……………	一
〔な〕 成田 助 <small>被告上</small> ……………			三
〔ろ〕 植田太一郎 <small>被告上</small> ……………	三十年		八
井上ロク外二名對井上源太郎……………	一七九號	東京……………	三三
井上源太郎 <small>被告上</small> ……………	三十年		三三
〔く〕 栗元 彌藏對栗元勝太郎……………	二五七號	大阪……………	三九

人名音字目錄



[や]	栗元勝太郎 <small>被告上</small> .....	三十年	二六二號	大阪	三九
	山本藤助對藤村源一郎.....	三十年	二六二號	大阪	三九
	山田リ <small>被告上</small> .....				三三
	山口良 <small>被告上</small> .....				三三
[ふ]	藤村源一 <small>被告上</small> .....				三九
	淵上彌吉對森清安兵衛.....	六	號	長崎	三九
[さ]	佐藤道太郎對依田善九郎.....	三十年	四三二號	東京	三七
	佐羽吉右衛門.....	三十年	抗告二四號	東京	三五
[き]	木村忠四郎對植田太一郎.....	三十年	二七九號	東京	三八
[み]	三上才太郎對外四十九名對成田助.....	三十年	四四一號	函館	三三
[も]	森清安兵衛 <small>被告上</small> .....				三七

# 大審院民事判決録

## 第四輯 第一卷

### ○計算譯立請求ノ件

明治三十年第四百二十五號  
明治三十一年一月十二日第二民事部判決

#### ○判決要旨

一 控訴狀中原判決表示ノ部ニ別紙判決ノ全部ヲ記載スト掲ケ末尾ニ原判決正本  
寫ヲ添付シ其綴目ニ控訴人自ラ契印ヲ爲シタルトキハ該正本寫ハ控訴狀ト分  
離セル別紙ニアラスシテ其實控訴狀ノ一部ヲ成セルモノナルニ依リ第一審判  
決ハ適法ニ表示セラレタルモノトス(判旨第一點)

第一審 京都地方裁判所 第二審 大阪控訴院

上告人 中谷半七 訴訟代理人 小林豊太郎

被上告人 坂東大次郎

原判決ノ表示



原判決ノ表示

右當事者間ノ計算譯立請求事件ニ付大阪控訴院カ明治三十年五月二十七日言渡シタル判決ニ對シ上告代理人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告第一論旨ハ被上告人カ原院ニ差出シタル控訴狀中第一審判決表示ノ部ニハ判決ノ全部ヲ記載ストアルノミニシテ判決全部ハ勿論主文ヲモ記載ナシ故ニ後段ニ判決言渡及ヒ送達ノ日付ヲ掲ケ該判決ニ對シ控訴ヲ爲ス旨ノ陳述アリト雖モ其所謂判決トハ如何ナル判決ナルヤ前段ニ於テ判決ノ表示ヲ欠キタルカ故ニ之ヲ知ルニ由ナシ尤モ附屬書ニ判決正本ノ寫書アリト雖モ控訴狀中ニ之ヲ引用スル旨ノ記載ナキカ故ニ是亦判決ノ表示アリト云フヲ得ス果シテ然ラハ該控訴ハ民事訴訟法第四百一條第二項第一號ノ要件ヲ缺キタル控訴狀ヲ差出シテ提起シタル不合法ノモノナルカ故ニ民事訴訟法第四百二條ニ依リ之ヲ却下スヘキモノナリ然ルニ事茲ニ出サリシハ原裁判所ニ於テ不合法ノ控訴ヲ受理裁判シタル違法アリト云フニ在リ○依テ一件記録ヲ査閱スルニ控訴狀ニハ第一審判決ハ表示別紙判決ハ全部ヲ記載不明明治三十年三月三日京都地方裁判所ニ於テ判決言渡ヲ受ケ四月三日判決正本送達ヲ受ケタリ云々トアルハミナレハ判決ハ表示トシテ體裁上其宜シキヲ得タリト云フヲ得サルモ既ニ判決ハ全部ヲ記載ストアル上ハ別紙ハ二字ヲ冠シハ正本寫カ控訴狀ハ末尾ニ添付シアル關係ヲ示シ且少控訴狀

判旨第一點

ト判決正本寫ハ綴目ニハ控訴人自ラ契印ヲ爲シアルニ依リ其寫ハ控訴狀ト分離セル別紙ニアラスシテ其實控訴狀ハ一部ヲ作セルモハト云ハサル可ラス而シテ判決表示ハ位置ハ如何ハ其表示タル効力ニ毫モ影響ヲ及ホスヘキモノニ非サレハ第一審判決ハ控訴狀中適當ニ表示セラレタルモノトス故ニ原裁判所カ該控訴狀ヲ採用シタルハ相當ニシテ上告所論ハ如キ不合法アルモノニアラス○同第二論旨ハ原判決ハ不確定ノ申立ニ基キ之ト同一ナル判決ヲ與ヘタル違法アリ即チ控訴狀ニ於ケル被上告人一定ノ申立ハ上告人極秀次郎ハ金參百五十圓二錢五厘申谷半七ハ金參百四拾壹圓ヲ被上告人ニ支拂フヘキ負擔額ノ生スル計算譯立ヲ爲スヘシト云フニアリシカ其後之ヲ變更シテ若山木炭製造組合計算譯立ヲ爲スヘシト申立タル處原院ハ之ヲ採リテ判決ヲ與ヘタルカ故ニ其目的ハ如何ナル計算ニシテ如何ナル譯立ナルヤ之ヲ知ルニ由ナシ上告人ノ抗辯ハ絶對的ニ計算譯立ヲ拒絕スルモノナレハ其抗辯申立タスルモ上告人カ義務トシテ執行スヘキ目的ヲ明示セサル可カラス若シ上告人カ取扱ヒタル事柄ニ付キ計算譯立ヲ爲スヘシト云フニアラハ道ハ既ニ甲第二號乃至十號證(八號ヲ除ク)ノ明示スルカ如ク計算終了シアリテ此以外ニ控訴人ノ爲スヘキモノナシ若シ又被上告人ノ取扱フタル事柄ニ迄立入り計算譯立ヲ爲スヘシト云フニアレハ道ハ明ニ責任ナク又能力以外ノ事項ノ執行ヲ責ムルモノニシテ不法ナリト云ハサル可ラス故ニ原判決ハ目的不定ニシテ違法ナリト云ハサル可ラスト云フニアルモ○一件記録ニ徵スルニ被上告人ハ若山木炭製造組合計算譯立ヲ請求シ上告人ハ其組合契約ハ履行スルニ至ラヌシテ解約シタリト爭フタルモ結局原裁判所ハ其履行アリタル

原判決ノ表示



モノト認メ之レカ計算譯立ヲ命シタルモノナレハ其譯立ノ範圍ハ固トヨリ當事者組合事業ニ  
 限ルヘキコト明カナリ左スレハ特ニ其計算譯立ノ方法ヲ指摘シテ請求セサルモ他日之レカ執  
 行ヲ爲スニ差支アルヘキ理ナキニ依リ原判決ハ上告所論ノ如キ違法ナシ同第三論旨ハ原判決  
 ニ甲第一號證組合契約面ニ依レハ控訴人ハ木炭製造ニ從事シ其木炭ヲ被控訴人ニ送附シ被控  
 訴人ハ之ヲ賣捌キ該費用ヲ控除セシ殘代金ヲ控訴人ヘ渡ス可キ契約ナルヲ以テ乙第一號證ニ  
 被控訴人兩名金四百圓ヲ前金ニテ控訴人ニ渡シタル旨記載アルハ即組合契約ノ木炭賣捌代金  
 ヲ前渡シタルモノト看認メ得ヘクシテ云々トアレントモ乙第一號證ノ金四百圓ニ付テハ上告人  
 ニ於テ甲第一號證ニ關係ナク別口ノ前金ニ渡シ資金ニ受取リタリト主張シ被上告人ニ於テハ  
 組合ノ資金ニ受取リタリト主張スルモノニシテ組合ノ木炭賣捌代金ノ前渡金ナリトハ當事者  
 ニ於テ主張シタル事ナシ故ニ契約ノ木炭賣捌代金ノ前渡トシテ乙第一號證ノ金四百圓ヲ授受  
 シタリトノ事ハ當事者ヨリ提出セサル事實ナルニ原院ハ之ヲ根據トシテ組合契約以外ニ委託  
 販賣ノ契約アリシヲ看認ムルニ足ラスト判決サレタルハ當事者ノ申立サル事實ヲ根據トシ  
 テ判決ヲ與ヘタル違法アルモノナリト云フニアルモ○原裁判所ハ本件當事者間ニハ委託販賣  
 ノ事實ナク全ク組合契約ヲ履行シタルモノト認メタルコトハ原判決文ニ照ラシ明カナリ左ス  
 レハ原判文理由中「組合契約ノ木炭賣捌代金ヲ前渡シタルモノト看認メ得ヘク」云々ト説明シタ  
 ルハ其用語適切ナラストスルモ結局組合ノ資金ニ給付シタルモノト認メタルト同一ニ歸スル  
 事明瞭ナリ而シテ其資金トシテ授受シタル事實ノ有無ハ當事者間爭ヒアリタルコトハ原院口

頭辯論調書ニ依ルモ明カナルニ依リ原判決ハ上告所論ノ如キ違法ナシ  
 上文辯明ノ如ク本件上告ハ一モ適法ノ理由ナキニ依リ民事訴訟法第四百三十九條第一項ニ從  
 ヒ棄却スヘキモノトス

○小作地引揚請求ノ件

明治三十年第四百三十一號  
明治三十一年一月十七日第二民事部判決

○判決要旨

一 第一審ノ訴訟委任狀不完全ナルモ第二審ニ於テ完全ナル委任狀ヲ提出セルト  
 キハ第一審ノ委任欠缺ハ委任者本人ニ於テ追認シタルモノト認メ得ヘキニ依  
 リ曩キノ委任欠缺ハ上告ノ理由トナラス(判旨第二點)(第三輯第三卷所載明治二十  
 第九卷所載明治二十九年  
 第五百二十五號判決參看)

第一審 長野地方裁判所 上田支部 第二審 東京控訴院

上告人 佐藤道太郎 訴訟代理人 木内傳之助

被上告人 依田善九郎

第一審ノ委任欠缺



第一審ノ委任欠缺

右當事者間ノ小作地引揚請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十年七月十日言渡シタル判決ニ對シ上告代理人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告第一點ハ判決理由ノ前段ニ於テ「假令五ヶ年ノ期限中ト雖モ入用又ハ賣却ノ節ハ控訴人ノ申込ニヨリ速ニ返地スヘキ契約ナリト」說示シ即チ甲第二號證ノ但書ハ被上告人ヨリ明渡スヘキコトヲ申込ミ始メテ上告人ニ其返地ノ義務發生スルモノニシテ隨テ上告人カ此申込ニ應セサル時訴權ノ生スル條件ナルトヲ認メラレタルモノナリ然ルニ其後段ニ至リ控訴人ハ入用ヲ生シ返地ヲ請求スルモノナレハ控訴人之ヲ拒ムハ不當タリト斷定セラレタリ今此理由ニ依ル時ハ被上告人ニ入用ヲ生シ返地ノ訴訟ヲ提起セラルト時ハ上告人ハ直チニ其請求ニ應セサル可カラズ換言セハ訴權ノ未タ生セサルニモ拘ハラヌ出訴ノ一事ヲ以テ上告人ハ忽チ返地セサル可カラサル不幸ヲ見ルニ至ル是レ前後理由ノ齟齬ヲ免レサル不法ノ裁判ナリト云フニ在レトモ○原判決ノ援用セル第一審事實ノ部ニ掲載セラレタル如ク起訴者タル被上告人ニ於テハ第一審以來二男松之助ヲ分家セシメ本訴ノ地所ヲ宅地ト爲シ茲ニ家屋ヲ建築スル必要ヲ生シタルヲ以テ甲第二號證ノ約旨ニ基キ屢々上告人ニ對シ其明渡ヲ請求スルモ應セサルニ付止ムヲ得ヌ本訴ヲ提起セシ旨主張シ而シテ上告人ニ在リテハ他ノ點ニ付數多ノ防禦方法ヲ提出セ

判旨第二點

シト雖モ此被上告人ノ主張セシ事實ニ對シ抗爭セシ事跡ノ審モ見ルヘキモノナシ故ニ原裁判所カ此當事者間ニ爭ナキ事實ト甲第二號證但書ノ約旨トニ基キ判斷ヲ下シタルモノニシテ即チ上告人ノ所謂原判決理由ノ前段ハ專ラ甲第二號證但書ノ約旨ニ付其解釋ヲ下シ其後段ノ理由ハ本件被上告人ノ請求權已ニ發生シタルヲ以テ上告人ハ其請求ヲ拒ムコトヲ得サル旨說示セシニ外ナラサルナリ而シテ此判斷タルハ原裁判所カ本件當事者間ニ爭ナキ前記ノ事實ニ基キ下シタルモノナルカ故ニ上告人ノ所謂訴權未生ノ攻撃ヲ容ル、餘地ナシ換言セハ原判決ノ旨趣ニ副ハサル論告ニシテ原判決ハ決シテ其理由ニ齟齬アルコトナシ  
同第二點ハ第一審ノ原告タル被上告人ノ訴訟代理ノ委任狀ニ缺欠アリテ其代理權ナキ者カ訴訟行為ヲ爲シタルモノナルニ第二審ニ於テ此職權上調査スヘキ事項ヲ看過セラレタリ今其委任狀ヲ見ルニ被告佐藤道太郎ニ對シ小作地引上請求ヲ管轄裁判所ニ提起スルコトトアルノミナルカ故ニ其代理人ハ單ニ訴訟ヲ提起スルノ權限ヲ有スルニ過キヌ即チ訴狀ヲ裁判所ヘ呈出スルニ止マリ其以後ノ訴訟行為ハ總テ委任權外ノ事項ニ屬ス然ルニ右代理人カ訴訟提起以後ニ係ル總テノ訴訟行為ヲ爲シテ判決ヲ受ケタルモノナレハ即チ民事訴訟法第七十條ニ依リ代理人ナキモノト見做サルヘカラスト云フニ在リ○依テ第一審及第二審ニ於ケル被上告人ハ委任狀ヲ調査スルニ第一審ノ委任狀ハ上告人所論ノ如ク尙不完全ハ嫌ナキニアラサルモ第二審ニ至テハ完全ナル委任狀ヲ提出シアリテ被上告人カ第一審ハ委任ハ欠缺ヲ追認シタルハト認メ得ヘキニ依リ本論告モ亦其理由ナシ

第一審ノ委任欠缺



上來説明ノ如ク本件上告ハ一モ適法ノ理由ナキヲ以テ民事訴訟法第四百三十九條第一項ニ依リ之ヲ棄却スヘキモノトス

○養子離縁復籍請求ノ件

明治三十年第二百六十二號  
明治三十一年一月十八日第一民事部判決

○判決要旨

一 養子離縁ヲ目的トスル訴訟ヲ養父ノ住所ニアラサル地ノ裁判所ニ於テ受理審判シタルハ明治二十三年法律第四百四號ノ規定ニ違反セル不法アリ

(參照) 縁組ノ無効又ハ離縁ヲ目的トスル訴訟ハ養子ヲ爲シタル者カ普通裁判籍ヲ有スル地ノ地方裁判所ニ專屬ス(明治二十三年法律第四百四號婚姻事件第一條第二項) 一 上訴ハ之ヲ提起スル者ノ申立ノ全部又ハ一分ヲ排斥スル裁判ニ對シ不服ヲ申立ツル方法ナルヲ以テ全然其申立ト符合スル裁判アリタル場合ハ假令其裁判ニ不法ノ廉アルモ之ヲ上訴ノ理由ト爲シ不服ヲ唱フルコトヲ得ス

第一審 奈良地方裁判所五條支部 第二審 大阪控訴院

上告人 山本藤助 訴訟代理人 三宅碩夫

被上告人 藤村源一郎 訴訟代理人 東 良三郎

右當事者間ノ養子離縁復籍請求事件ニ付大阪控訴院カ明治三十年四月二十三日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立及附帶上告ヲ爲シ上告人ハ附帶上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決

原判決ヲ破毀シ本院ニ於テ判決スルコト左ノ如シ

第一審判決ヲ廢棄シ本件ノ訴ヲ却下ス

附帶上告ハ之ヲ棄却ス

訴訟費用ハ附帶上告ニ係ル分ヲ除クノ外總テ上告人ノ負擔トス

理由

上告論旨ハ本件ハ明治二十三年法律第四百四號婚姻事件及ヒ養子縁組事件ノ訴訟手續第一條ノ第二項ニ據リ上告人ノ普通裁判籍ヲ有スル大阪地方裁判所ハ專屬裁判所ナレハ奈良地方裁判所五條支部ノ第一審判決ハ管轄違ニテ無効ニ歸スルモノナリ原院ハ其無効ノ第一審判決ニ對シ本案ニ付第二審ノ判決ヲ爲シタルハ不法ナリト云フニ在リ○按スルニ離縁ヲ目的トスル訴訟ハ婚姻事件縁組事件及ヒ禁治產事件ニ關スル訴訟規則第一條第二項ニ依リ養子ヲ爲シタル者カ普通裁判籍ヲ有スル地ノ地方裁判所ハ管轄ニ專屬スルヲ以テ本訴ハ養父タル上告人



か普通裁判籍ヲ有スル地方裁判所ノ管轄ニ屬スルハ論ヲ俟カサル所ナリ依テ該裁判籍ヲ調査スルニ上告人カ大阪市ニ於テ住所ヲ有スルコトハ當事者間ニ争ナキ事實ナレハ本件ニ付テハ大阪地方裁判所ノ外他ニ管轄裁判所ノアルコトナシ然レハ本訴ヲ受ケタル奈良地方裁判所五條支部ハ管轄違ナルヲ以テ訴ヲ却下ス可キモノニシテ事件ニ付キ審理判決ヲ爲ス權限ヲ有スルモノニ非ス故ニ原院ハ同支部ノ判決ヲ廢棄シ訴ヲ却下スル裁判ヲ爲ス可キ管ナルニ原判決茲ニ出テス第一審判決ヲ認可シ控訴ヲ棄却シタルハ該規則ニ違背スル不法ノ裁判ニシテ破毀ヲ免カレサルモノトス

附帶上告論旨ハ本件ハ上告人ニ於テ被上告人ニ對シ養子ノ離別ヲ求メ併セテ戶籍ノ復舊ヲ求ムルニ在リ其訴訟タル明治二十三年法律第四百四號第一條ニ該當シ上告人ノ普通裁判籍大阪地方裁判所ニ於テ專屬管轄權ヲ有スルニ拘ラス本件第一二審裁判所ニ於テ職權ニ依リ其調査ヲ爲サス進シテ本案ノ判決ヲ爲シタルハ不法ナリト云フニ在リ○按スルニ上訴ナルモノハ之ヲ提起スル者ハ申立ハ全部又ハ一分ヲ排斥スル裁判ニ對スル不服ヲ申立ツル方法ナルヲ以テ全然申立ト符合スル裁判ハアリタル場合ニハ假令其裁判ニ不法ハ厭アルモ其者ハ之ヲ上訴ハ理由ト爲シ以テ不服ヲ唱フルコトヲ得サルモノトス而シテ原院ハ本件ニ付キ全然附帶上告人ノ申立ツル如ク相手方ノ請求ヲ全然却下スル裁判ヲ爲シタルモノナレハ此判決ニ對シテハ附帶上告ニ依リ不服ヲ唱フルコトヲ得サルモノトス

以上説明ノ如クナルヲ以テ民事訴訟法第四百四十七條第一項ニ從ヒ原判決ヲ破毀シ同法第四百五十一條第二號ニ依リ本院ニ於テ直チニ第一審判決ヲ廢棄シ本件ノ訴ヲ却下スルヲ相當トシ且又同法第四百五十三條ニ依リ附帶上告ヲ棄却ス而シテ本訴ハ結局上告人ノ敗訴ニ歸シタルヲ以テ訴訟費用ハ同法第七十二條第一項ニ從ヒ附帶上告ニ依リ生シタル分ヲ除クノ外總テ上告人ニ於テ負擔ス可キモノトス

○堰留妨害排除ノ件

明治三十年第四百四十一號  
明治三十一年一月十九日第二民事部判決

○判決要旨

一 水利組合會ノ議決ニ基ク新堰修繕工事ハ水利組合條例ノ規定ニ依リ組合管理  
者ノ處分ニ出タル行政上ノ處分行爲ニシテ即チ上級行政廳ノ監督ニ屬スヘキ  
モノナリ故ニ其工事ノ施行ニ因リ私權ヲ害セラルコトアルモ之カ排除ヲ請  
求セシムルハ水利組合條例ノ規定ニ從フヘキモノニシテ司法裁判所ニ出訴スヘ



キモノニアラス(判旨第一點)

第一審 青森地方裁判所弘前支部 第二審 函館控訴院

上告人 三上才太郎 訴訟代理人 花井卓藏 川口榮之進

外四十九名

新堰普通水利組合管理  
者 被上告人 成田 助

右當事者間ノ堰留妨害排除事件ニ付函館控訴院カ明治三十年七月九日言渡シタル判決ニ對シ  
上告代理人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判 決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理 由

上告論旨第一點ハ本訴ノ目的物タル堰留ハ上告人等ノ特ニ設置シタルモノニシテ其營造費用  
ノ如キハ凡テ上告人等ノ負擔セル所ナリ即チ該堰留ハ上告人等ノ所有權ニ屬シ被上告人組合  
會ニ屬スルモノニアラストハ上告人カ第一審以來主張スル所ナリ凡ソ私權ヲ害セラレ又ハ害  
セラレントスル場合ニ於テ救濟ヲ司法裁判所ニ仰クハ當然ノ順序ナリ而シテ本訴ハ被上告人  
ニ於テ組合外ノ堰留ヲ取除カントスルモノナレハ取り直サス上告人ノ私權ヲ害セントスル  
行爲ナルヲ以テ司法裁判所ニ出訴シタル案件ナリ然レニ原院ハ是ヲ以テ水利組合會ノ議決ヲ  
減否スルモノナリトシ行政裁判所ノ裁定ニ屬スヘキモノト判斷シタルハ法則ヲ不當ニ適用シ

判旨第一點

タル不法アルモノト云フニ在リ○依テ案スルニ本件ハ新堰修繕工事ハ原判決ハ認ムル所ニ依  
リハ普通水利組合會議決ハ執行タルコトハ爭ハキ事實ナリ果シテ然ラハ該工事ハ水利組合條  
例ハ規定ニ依リ組合管理者ハ處分ニ出テタル行政上ハ處分行爲ニシテ即チ上級行政廳ノ監督  
ニ屬スヘキモノナリ故ニ其工事ハ施行ニ因リ縱令私權ヲ害セラルハモハトスルハ公法上  
私權ハ制限ナルヲ以テ之カ排除ヲ求メニハ水利組合條例ハ規定ニ從ハサルヲ得サル筈合ニ  
シテ固ヨリ司法裁判所ハ管轄ニ屬スヘキモノナラス是ヲ以テ原判決ニ於テ其處分ノ排除ヲ求  
メント欲スレハ必ス水利組合條例第四十六條ニ依リ云々ト判定シ上告人ノ訴求ヲ排斥シタル  
ハ相當ニシテ原判決ハ上告人所論ノ如キ不法ナル點ナシ

其第二點ハ水利組合條例第四十六條ハ組合員ニシテ管理ノ處分ニ不服アルモノハ其組合所在  
地ノ郡參事會ニ訴願スヘキコトヲ規定シタルモノナリ而シテ本訴ハ第三者ノ資格ヲ以テスル  
所有權ノ妨害排除ヲ求ムル訴ニシテ組合員ノ資格ヲ以テスル議決執行ノ當否即チ處分ノ不服  
ヲ爭フ訴ニ非ス左スレハ當然司法裁判所ノ管轄ニ屬スヘキモノニシテ右條例第四十六條ノ支  
配ニ屬スヘキモノニアラサルコト明ナリ然レニ原院ハ之ヲ以テ恰モ處分ノ當否ヲ爭フモノト  
如ク論斷シ以テ行政上ノ裁定ニ屬スヘキモノト判定シタルハ處分ノ爭ト所有權ノ爭トヲ混同  
シタルモノニシテ給局法則ノ適用ヲ誤リタル不法ノ裁決ナリト云フニアレトモ○第一點ノ論  
旨ニ對シ説明スル如ク本件工事ハ既ニ水利組合會議決ノ執行トシテ其管理者ノ處分ニ出テタ  
ル行政上ノ處分行爲ニ係リ上級行政廳ノ監督ニ屬スルモノナル上ハ其組合員タルト組合員外

水利組合ノ訴訟



▲ルトチ問ハス又ハ其争點ノ如何ヲ論セス其處分行爲ヲ排除セシメントスル要求ハ司法裁判所ノ管轄ニ屬セス然ルニ原判決理由中ニ普通水利組合會ノ議決ナレハ組合員タル控訴人ニ於テ異議ヲ唱フヘキモノニアラスト云フ説明ヲ附加セシ故ニ其反對ヨリ觀察スレハ組合員ニ非サル者ハ其處分ニ對シ司法裁判所ニ訴求シ得ヘキモノ、如キ感ヲ生スルノ嫌アリ依テ此説明ハ稍允當ナラサルモ結局司法裁判所ノ管轄ニ屬セサルコトハ同一ニ歸スルチ以テ是亦上告ノ理由ナキモノトス

其第三點ハ原判決中ニ必ス水利組合條例第四十六條ニ依リ行政裁判所ノ裁定ヲ乞ハサルヲ得サル筋合ナリトアリ然ルニ該條項中ニ本訴ノ如キ場合ヲ以テ行政裁判所ノ裁定ニ屬スヘキモノトシタル明文アルチ見ス即チ原判決ハ爰點ニ於テ法則ノ適用ヲ誤リタル不法アリト云フニアレトモ○原判決ノ趣旨ハ水利組合條例第四十六條ノ規定ニ依リ訴願ヲ爲シ其末行政裁判所ノ裁定ヲ乞ハサルヲ得サル筋合ナリト云フノ意義ニシテ要スルニ原判決ハ本件工事排除ノ要求ハ司法裁判所ノ管轄ニ屬セスト云フノ判旨ニ歸スルチ以テ結局不法ニアラサルモノトス以上説明ノ如ク本件上告ハ適法ノ理由ナキチ以テ民事訴訟法第四百三十九條第一項ノ規定ニ依リ之ヲ棄却スルモノナリ

○預金請求ノ件

明治三十年抗告第四十二號  
明治三十一年一月二十日第一民事部決定

○決定要旨

一 故障申立書中關席判決言渡ノ日付ニ誤記アルモ其他ノ要件記載アリテ毫モ他ノ事件ト混同スヘキモノニアラサルトキハ民事訴訟法第二百五十六條第一號ノ表示ヲ欠キタルモノト云フヲ得ス

(參照) 故障申立ハ關席判決ヲ爲シタル裁判所ニ書面ヲ差出シテ之ヲ爲ス

此書面ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一故障ヲ申立テラレタル關席判決ノ表示

第二其判決ニ對スル故障ノ申立

此書面ニハ本案ニ付テノ口頭辯論準備ノ爲ニ必要ナル事項アルトキモ亦之ヲ掲クベシ(民事訴訟法第二百五十六條)

原 審 東京控訴院

抗 告 人 佐羽 吉右衛門 訴訟代理人 津田 善治

右抗告人ト茂木 幾太郎間ノ預金請求事件ニ付明治三十年十二月十四日東京控訴院民事第二部裁判長カ與ヘタル故障却下ノ命令ニ對シ抗告ヲ爲シタリ

決 定

關席判決ノ表示



東京控訴院裁判長ノ命令ハ之ヲ廢却ス

理由

抗告諭旨ノ要領ハ關席判決ニ對スル故障申立書ニ明治三十年十一月十九日ノ言渡ヲ十七日ト誤記シタルニ該故障申立書ニ明記シタル當事者間ニ於ケル預金請求ノ控訴事件ハ同年十一月十九日言渡二十六日送達ノ關席判決アルノミナレハ其判決ヲ表示シタルト明カナリ民事訴訟法第二百五十六條ノ要件ニモ判決言渡日ノ明文ナク單ニ判決ノ表示トアルニ過キサレハ特ニ言渡日ヲ獨ケサルモ他ニ表示シ得ヘキ事項ヲ獨ケルヲ以テ足ルカ故ニ本件ノ故障申立書ハ全ク判決ノ表示ナキモノト同視スヘカラス況ンヤ本件ノ故障申立書ハ判決言渡日ヲ全ク脱漏シタルニアラス明カナリ書換ニテ獨ケアルニ於テチヤ既ニ東京控訴院ニ於ケル二十八年〇第八十五號上告事件ニ就テノ明治二十八年十一月九日ノ判決又大審院ノ明治二十六年四百六十六號上告事件ニ就テノ明治二十七年四月二十六日ノ判決及ヒ明治二十七年第五百號上告事件ニ就テノ明治二十八年五月二日ノ判決ニ依ルモ關席判決ノ表示ノ要件ヲ具備スルニハ他ノ關席判決ト混同スルノ虞ナクシテ容易ニ識別シ得ヘキ様ニ指示スルヲ以テ足レリトモ尤モ本件ハ一個ノ數字ヲ書換セル事實アレトモ其書換ノ爲メニ他ノ判決ト混同シテ識別シ難キモノニハアラス然ルチ東京控訴院裁判長ヨリ右故障申立書ニハ云々關席判決ヲ表示シタルモノト認ムルコトヲ得ストノ理由ヲ以テ故障却下ノ命令アリタレトモ抗告人ハ之ニ服從スル能ハサルヲ以テ右命令ノ全部取消ス様裁判ヲ求ムト云フニ在リ

○依テ本案抗告ニ關スル訴訟記録ヲ

查閱スルニ抗告人佐羽吉右衛門ト茂木幾太郎トノ間ニ於ケル東京控訴院ノ明治三十年子第百六十七號預金請求ノ控訴事件ニ就キ明治三十年十一月十七日ノ口頭辯論期日ニ控訴人カ關席シタルヲ以テ被控訴訟代理人ノ關席判決ノ申立ニ依リ東京控訴院ニ於テ同月十九日關席判決ヲ言渡シ之ヲ同月二十六日ニ於テ控訴人即チ抗告人ニ送達シアルト明瞭ニシテ抗告人ノ故障申立書ニ明治三十年十一月十七日言渡ト記載シタルハ全ク十九日言渡ト記載スヘキヲ誤リタルコトヲ知リ得ヘシ然レ而シテ該故障申立書ニハ尙ホ訴訟ノ當事者訴名關席判決送達ノ月日之ニ對スル故障ハ申立及ヒ故障ハ申立ヲ受クル裁判所ヲ記載シアリテ悉モ他ノ事件ト混同スヘキニアラス故ニ民事訴訟法第二百五十六條第一號ハ表示ヲ缺キタルモノト言フヲ得サルモハナリ然ルチ裁判長カ本件故障申立ハ其要件ヲ缺キタルモノトシ明治三年十二月十四日本件故障ハ之ヲ却下スト命令シタルハ不當ナリトス

右ノ理由ナルヲ以テ民事訴訟法第四百六十四條ニ照ラシ主文ノ如ク裁判スル所以ナリ



○貸金請求ノ件

明治三十年第三百七十九號  
明治三十一年一月二十日第一民事部判決

○判決要旨

一 證人ノ陳述スヘキ事柄ヲ豫想シ其豫想通り證人ヲ申出タル者ニ利益ナル證言  
ヲ爲スモノトスルモ之ヲ信用スルニ足ラサルコトヲ定メ以テ其申請ノ當否ヲ  
判定スルハ不法ニアラサルモノトス(判旨第二點)

第一審 水戸地方裁判所土浦支部 第二審 東京控訴院

上告人 木村忠四郎 訴訟代理人 ト部喜太郎

被上告人 植田太一郎

右當事者間ノ貸金請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十年七月九日言渡シタル判決ニ對シ上告  
人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告第一點ハ原院ハ甲第三號證ノ標題署名肩書等ノ字形運筆位置墨色カ總テ乙第十三號證ト  
其趣チ同フスルトノコトト井ニ押印ノ體裁紙片ノ性質モ亦同一ナルカ如ク相見ユルトノコト及  
證人高田元重カ乙第十三號證ハ明治二十五年八月中植田吉之助ノ刑事被告事件ニ關シ被上告

人ヨリ吉之助實父忠次郎ニ交付シタルモノナル旨ノ陳述トニ基キ明治二十三年六月二十日ニ  
成立シタル甲第三號證ヲ以テ明治二十五年八月中ニ成立シタル乙第十三號證ト同時ニ同一ノ  
目的ニ使用スル爲メニ成立シタルモノト判定シタルトモ甲第三號證ト乙第十三號證トハ共ニ  
同一ノ人カ作製シタル委任狀ニシテ其標題署名肩書モ亦同一ノ筆蹟ナルコトハ當事者間ニ爭  
ナキ所ナレハ偶其標題署名肩書等ノ字形運筆位置墨色等ノ趣チ同フシ押印ノ體裁紙片ノ性質  
亦同一ナルカ如ク見ユルハ當然ナリ而シテ同一ノ人カ作製シタル數通ノ證書ハ同一ノ目的ニ  
使用スル爲メニ同日時ニ作製シタルモノニアラサレハ其證書ニ記シタル字形運筆位置墨色等  
ノ趣チ同フスルモノニアラサレハ其證書ニ記シタル字形運筆位置墨色等ノ趣チ同フスルモノ  
トノ條理アルコトナケレハ原院判決カ甲第三號證カ乙第十三號證ト其標題署名肩書等ノ字形  
運筆位置墨色等チ同フスルコトト井ニ押印ノ體裁紙片ノ性質モ亦同一ナルカ如ク相見ユルトノ  
コトト以テ甲第三號證ハ乙第十三號證ト同時ニ同一ノ目的ニ使用スル爲メニ作製シタルモノ  
ト判定シタルハ理由不備ノ判決ナリ又被上告人ハ原院ニ於テ甲第三號證ハ乙第十三號證ト  
同時ニ同一ノ目的ニ使用スル爲メニ作製シタルトノ點ニ關シ何等ノ立證ヲ爲サレハ原院カ  
右ノ事實ヲ認定シタルハ即チ架空ノ事實ヲ認定シタル不法アルヲ免レス乙第十三號證ハ明治  
二十五年八月中植田吉之助ノ刑事被告事件ニ關シ被告人ヨリ吉之助實父忠次郎ニ交付シタル  
モノナリト高田元重ノ證言ハ單ニ乙第十三號證製成立ニ對スル陳述ニシテ甲第三號證ニ毫  
末ノ關係ナシ乙第十三號證カ右證言ノ通りノ成立ナレハ何故ニ甲第三號證モ亦同一ノ成立ニ



係ルカ此點ニ關シテ原院カ其理由ヲ示サ、ルハ是亦理由不備ノ判決ナリト云フニ在レトモ○  
 同時ニ作製シタル委任狀ナルニ於テハ其字形運筆位置墨色ノ其趣ヲ同フスヘキハ普通ノ事ナ  
 レハ原院カ此普通ノ事柄ニ基キ甲第三號證ト乙第十三號證トチ同時ニ同一ノ目的ニ使用スル  
 爲メ作製シタルモノナリト認定シタルハ決シテ不當ニアラス從テ此點ニ對スル論旨ハ事實ノ  
 認定ヲ批難スルニ外ナラス又原院ハ乙第十三號證及高田元重ノ陳述等ニ依リ右ノ判斷ヲ爲シ  
 タルモノナレハ決シテ架空ニ事實ヲ認定シタルモノニアラス又原院ハ甲第三號證ト乙第十三  
 號證トハ其字形運筆墨色等ノ相同シキ所ヨリ同時ニ作製シタルモノナリト認定シタルハ判斷  
 ノ理由ヲ缺キタルモノト云フヲ得ス

同第二點ハ上告人ハ原院ニ於テ被上告人ノ代人トシテ甲第三號證ヲ行使シタル植田吉之助ヲ  
 證人トシテ訊問スルコトヲ申請シタルニ原院カ同人ノ證言ハ信ヲ措キ難ク且ツ同人ノ證言ヲ  
 以テ對抗シ得サルノ確證現存スルトノ理由ヲ以テ申請ヲ却下シタルハ不法ナリ證言ノ信否并  
 ニ其實證證明ノ効力ハ證人ヲ訊問シテ其陳述ヲ聽キタル上ニ定マルヘキコトハ論ヲ俟タズ未  
 タ證人ヲ訊問セス從テ如何ナル陳述ヲ爲スヤ知ル可ラサルニ早ク既ニ其證言ハ信ヲ措キ難シ  
 ト云ヒ其證言ヲ以テ對抗シ得サル確證現存スルト云フハ即チ法廷ニ現ハレサル證言ノ信否并  
 ニ効力ヲ判定シタル不法アルモノト信ス又植田吉之助ノ證言ヲ以テ對抗シ得サル確證現存ス  
 ルト云フモ原判決ハ其所謂確證トハ何レノ證據ヲ指シタルカヲ示サ、ル不法アルノミナラス  
 植田吉之助ノ證言ヲ以テ對抗シ得サル確證存スト云フハ即チ植田吉之助ノ證言ト原判決ニ所

判旨第二點

謂確證トカ共ニ法廷ニ現ハレタル場合ニ在リテ其兩者ヲ比較シテ初メテ決スヘキ事項ニ屬ス  
 原判決カ未タ植田吉之助ノ證言ヲ得スシテ同人ノ證言ヲ以テ對抗シ得サル確證存スト云フハ  
 理由齟齬ノ判定ナリト云フニ在リ○按スルニ證人カ如何ナル陳述ヲ爲スヤ分明ナラサル場合  
 ニ在テハ其陳述ヲ聽キタル上ニアラサレハ其信用スルニ足ルヤ否ヤヲ定メ得ヘカラサルコト  
 ハ上告論旨ノ如クナルモ本件ニ於テハ原院ハ上告人ノ申請ニ係ル證人植田吉之助カ出廷ハ上  
 告人所論ノ如キ陳述ヲ爲スモ之ヲ信用シ能ハスト云フニ在リ換言スレハ證人ハ陳述スヘキ  
 事柄ヲ豫想シ其豫想通リ上告人ニ利益ナル證言ヲ爲スモハトスルモ之ニ信ヲ措キ難シト云フ  
 ニ在リ此ノ如ク證人ハ陳述ヲ豫想シ其信用スルニ足ラサルコトヲ定メ以テ證人訊問申請ハ當  
 否ヲ判定スルハ決シテ不法ニアラス又原院カ確證云々ト説明シタルハ穩當ナラサルカ如クナ  
 ルモ附加ノ理由ニ過キサレハ探テ以テ破毀ノ理由トスルニ足ラス

同第三點ハ民事訴訟法第二百四條及ヒ第三百四十七條ニ規定シタル場合ニ於テ對手人ノ申  
 立ニ依リ證據方法若クハ證據取寄ノ申請ヲ却下シ得ル規定アルノ外訴訟手續上證據ノ提出ヲ  
 抑制シ得ルコトノ規定ナシ又證據ノ有無ハ訴訟ノ勝敗ノ際ル所ナルヲ以テ擅ニ之ヲ抑止ス可  
 カラサルコト勿論ナリ然レハ原院ニ於テ上告人カ申請シタル證人植田吉之助ノ訊問ヲ許容セサ  
 ルハ上告人ヲシテ立證方法ヲ盡サシメスシテ上告人ニ不利益ナル判定ヲ與ヘタル不法アル者  
 ト信ス植田吉之助ノ證言カ本訴ノ勝敗ニ關スルコトハ植田吉之助ハ被上告人ノ代人トナリ甲第  
 三號證ヲ行使シテ甲第一號證甲第二號證ノ通リ本訴請求ノ金圓ヲ上告人ヨリ借入レタル者ナ



ルニヨリテ明白ナリト云フニ在リ○按スルニ原院ハ相當ノ理由ナクシテ證據ノ提出ヲ抑制スルノ職權ナキハ是亦上告論旨ノ如クナルモ植田吉之助ノ訊問ヲ許容セザリシ理由ハ第二點ノ論旨ニ對スル辯明ノ通りニシテ毫モ不法ノ廉ナケレハ本論旨モ亦上告ノ理由トナラス  
以上説明ノ如ク本件上告ハ一モ適法ノ理由ナキヲ以テ民事訴訟法第四百三十九條第一項ニ從ヒ主文ノ判決ヲ爲ス

○地所書入登記取消請求ノ件

明治三十年第二百五十九號  
明治三十一年一月二十一日第二民事部判決

○判決要旨

- 一 明治十六年内務省番外達及ヒ同十九年司法省第三十九號訓令中所謂親族ノ語辭中ニハ其親族ノ遠近ヲ問ハス苟クモ血族姻族タルノ關係アリテ普通親族又ハ親類ト稱スルモノハ總ヘテ包含スルモノト解釋スルヲ相當トス
- 一 明治十六年内務省番外達ニハ單ニ親族連署トアリテ其人員ヲ指定セサルニ依

リ親族一名ノ連署ハ以テ該達ノ規定ニ適合セルモノト見做スヲ當然ノ解釋ナリトス

(參照) 後見人職務權限ノ儀ニ付何「後見人規則發布ノ義ハ目下急施ヲ要スル事項ニ付客年四月十三日上稟シタル旨趣モ有之就テハ伺出ノ府縣へ追テ一般ノ法律制定相成マテ地方從來ノ慣習ニ依リ可取扱旨指命及ヒ來候處爾後々見職務ノ權限伺出ル府縣夥多有之抑後見人ハ當初親族ニ於テ選任シタルモノナレトモ常ニ監察スヘキ方法モ無之ニ付規則御制定マテ不動産賣買讓渡質書入等ニ限リ其證書又ハ願書ニ親族連署ノ上ナラテハ戶長ニ於テ公證ヲ與ヘサル様相定メ其旨指命及ヒ度右ハ未タ成規モ無之此段相伺候也伺之趣聞届候事(明治十六年七月十日内務省番外達)

來ル明治二十年二月一日以後登記法施行ニ付後見人ヨリ地所建物船舶ノ登記ヲ請フトキハ明治十六年七月十八日内務省達ノ通り其證書又ハ願書ニ親屬連署ノ上ナラテハ登記ヲ爲サル儀ト心得ヘシ(明治十九年司法省訓令第三十九號)

第一審 名古屋地方裁判所 第二審 名古屋控訴院

上告人 加藤久平 訴訟代理人 有賀武雄  
被上告人 山田リエ 訴訟代理人 高木益太郎 友松芳範

右當事者間ノ地所書入登記取消請求事件ニ付名古屋控訴院カ明治三十年五月六日言渡シタル

明治十六年内務省番外達○同十九年司法省訓令第三十九號



判決ニ對シ上告代理人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告代理人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

立會檢事岩田武儀ハ意見ヲ陳述シタリ

判決

原判決ヲ破毀シ本院ニ於テ直ニ判決ヲ爲ス左ノ如シ  
本件控訴ハ之ヲ棄却ス

訴訟費用ハ總テ被上告人ノ負擔タルヘシ

理由

上告第一論旨ハ原裁判所カ其判決理由ニ於テ(前署然リト雖モ乙第一號證ニ親族トシテ連署スル二名ハ果シテ親族ナリト稱スヘキモノナルヤ否ヤヲ案スルニ渥美源太郎ハ幼者山田得造ノ從兄弟ノ配偶者ナレハ親族ト稱スル者ノ中ニ包含スルヲ得ヘシトスルモ永井文平ノ如キハ從兄弟ノ配偶者ノ父ニシテ姻族ノ關係上頗ル薄縁ノモノニ係リ通例親族ト稱スルモノニアラサレハ文平カ親族トシテノ連署ハ其効ナキ者トスト判示シタルハ法則ヲ適用セサル不法ノ裁判ナリ抑實體法ニ付テ親族ノ規定ナキ今日ニ於テハ親縁ノ厚薄ヲ以テ親族ト非親族トナ劃定スヘキモノニアラス苟モ當事者ヨリ相當ノ續キ柄ヲ有スルモノナレハ名稱ノ如何ニ拘ハラヌ親族タルヲ妨ケス右永井文平ハ原裁判所ニ於テ認ムル如ク幼者得造ノ從兄弟ノ配偶者ノ父ナレハ之ヲ親族トナスヘキ條理ナルニ薄縁ナルカ故ニ親族ニアラストシ其連署ヲ無効ナリト判決

シタルハ違法ノ判決ナリト云ヒ同第二論旨ハ原裁判所ノ判決理由中(前署)左スレハ源太郎ノ連署ノミチ以テ登記ヲ受クル上ニ於テ妨ケナシトセンカ親族ノ連署ヲ必要トスル基因タル彼ノ達訓令等ニ於テ其人員ヲ指示セサントモ(中署)二名以上親族ノ連署ヲ緊要トスヘキハ條理ノ然ラシムル處ナリト判示シタルハ法則ヲ不當ニ適用シタルモノナリ蓋シ明治十六年内務省番外達ニ所謂連署ノ文字ハ讀テ字ノ如ク唯後見人ノ外ニ親族ノ連署ヲ要スルトノコトニ止マリ二名以上ノ連署ヲ緊要スルモノニアラス凡ソ法律ニ明文アラサル場合ニ於テ裁判法ニ付テハ狹義ニ解スヘク廣義ニ解スヘキモノニアラス今該達ニ於テ人員ヲ指定セサルニ之ヲ二名以上ナリト解スルハ法律ノ解釋ニアラスシテ寧ロ法律ヲ作りタル違法ノ判決ナリト云フニ在リ○依テ案スルニ我邦現行ノ法律中民法上ニ於ル親族ノ資格ヲ規定セルモノナキニ依リ其親族ナルモノノ範圍ハ親縁タル關係上如何ナル程度ニマテ及ホスヘキモノナリヤ裁判上安リニ規定シ得ヘキモノニアラス故ニ明治十六年内務省番外達及ヒ明治十九年司法省第三十九號訓令中所謂親族ハ語辭中ニハ其親縁ノ遠近ヲ問ハス苟クモ血族姻族タルハ關係アリテ普通親族又ハ親類ト稱スル者ハ總テ之ヲ包含スルモノト解釋スルヲ相當ナリトス然リ而シテ該内務省達ニハ(前署)不動産賣買讓渡質書入等ニ限リ其證書又ハ願書ニ親族連署ハ上ナラテハ戸長ニ於テ公證ヲ與エサル様相定メ云々トアリ單ニ親族連署ト云ヒ其人員ヲ指定セサルニ依リ親族一名ハ連署ヲ以テ該達ノ規定ニ適合セルモノト爲スハ解釋上當然ノコトニシテ本件ハ如キ場合必ス二名以上親族ハ連署ヲ緊要ナリトスル條理又ハ慣例ハ存スルコトナシ然ルニ原裁判所カ被上告



人山田得造從兄弟ノ配偶者タル瀝美源太郎ヲ親族ト認メナカラ從兄弟ノ配偶者ノ父タル永井文平ヲ親族ニ非スト判示シ又親族一名ノ連署ヲ以テ受ケタル本件登記ヲ無効ナリト説明シ從テ本按ノ登記ヲ取消サシムルヲ相當ナリトスト判決シタルハ法則ヲ不當ニ適用シタル違法アルヲ免カレス既ニ是等ノ點ニ於テ原判決ノ全部破毀スヘキモノナルニ依リ爾餘ノ論告ニ對シテハ別ニ辯明ヲ與ヘス即チ民事訴訟法第四百四十七條第一項ニ從ヒ原判決ノ全部ヲ破毀シ尙ホ本件ノ事實ハ既ニ確定シ裁判ヲ爲スニ熟スルモノト認ムルニ依リ同法第四百五十一條ニ從ヒ本院ニ於テ事件ニ付キ直ニ裁判ヲ爲スヲ相當ナリトス是レ主文ノ如ク判決スル所以ナリ

○不法行為差留並ニ損害賠償請求ノ件

明治三十一年一月二十一日第二民事部判決

○判決要旨

一 證人カ過去ノ事ヲ陳フルコ付テハ自己ノ見聞セル事實ヲ記憶ニ依リ陳述スレハ足ル故ニ證人カ其現況ニ付キ再調査ヲ爲シタルモノニアラサレハ證言トシ

テ信憑力ヲ有セストノ主旨ニテ之ヲ排斥シタル裁判ハ不法ナリ(判旨第二點)

第一審 福岡地方裁判所 第二審 長崎控訴院

上告人 淵上彌吉 訴訟代理人 原嘉道

被上告人 森清安兵衛 訴訟代理人 田中圭三

右當事者間ノ不法行為差留并ニ損害賠償請求事件ニ付長崎控訴院カ明治二十九年十月十日言渡シタル判決ニ對シ上告代理人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告代理人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決

原判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ長崎控訴院ニ差戻ス

理由

上告第二論旨ハ證人カ既往ノ事實ニ付キ訊問セラルルニ當リテハ既往ニ於テ實視シタル景況ヲ陳述スヘキハ當然ニシテ更ニ證言當時ニ於テ再調査ヲ爲シタルト否トニ因リ信憑力ニ輕重ヲ生スヘキノ理ナキハ明カナリ本件ニ於テ證人トシテ訊問セラレタル白土勝三郎ノ證言中「舊曆十一月十五日頃自分測量シタル圖面ノ線路西北丈堀リテアヤマシタ」トノ申立ハ則チ明治二十七年舊十一月十五日頃證人カ實地目撃シタル事實ヲ陳述シタルモノナレハ此陳述ハ證人カ法廷ニ於テ他人調製ノ圖面ヲ見ルニ當リ述ヘタルト否トニ拘ハラズ證言當時再實測ヲ爲シ



タルモノニ非ストノ理由ニテ排斥シ得ヘキニアラス何トナレハ既往ノ事實ヲ述フルニ現在ノ事實ヲ調査スルノ必要アル答ナケレハナリ然ルニ原裁判所ハ此見易キノ條理ヲ誤リ白土勝三郎ノ證言ヲ採用セザリシハ正當ノ理由ナクシテ重要ノ證據ヲ排斥シタル不法ノ判決ナリト云フニ在リ○依テ按スルニ原裁判所ハ專ラ乙號各圖面ニ依リ本按ノ爭點タル甲ノ箇所ノ侵堀時期ヲ判定シタルコト原判文ニ照シ明カナルニ依リ該圖面ヲ調製セル白土勝三郎ナル者カ本件坑區ノ測量ニ關シ第一審廷ニ於テ爲シタル證言ハ本按ヲ斷スルニ當リ殊ニ原裁判所カ其判決理由中ノ一ノ案件トシテ掲ケタル乙號圖面ヲ古野與太郎調製ノ圖面中甲ノ箇所ト相比シテ其廣狹如何ヲ斷スルニ付テハ最モ重要ナル關係ヲ有セシヤ自ラ明カナリ今原記録中證人白土勝三郎ノ訊問調書ヲ閱スルニ「問古野與太郎ノ測量シタル圖面ノ甲所ハ證人カ側量シタルトキ探堀シアリタルヤ否」此時與太郎カ製圖ヲ證人ニ示ス」答悉十一月十五日頃自分カ測量セシ圖面ノ線路ノ西北丈堀テリマシタトアリ證人ハ古野與太郎ノ測量シタル圖面ヲ一見シタル上自己ノ實驗シタル事實ヲ陳述シタルモノナルコト亦々疑ヲ容レズ元來證人カ過去ノ事ヲ述フルニ付テハ其自ラ見聞シタルコトヲ記憶ニ依リ陳述スレハ足り必スシモ其現況ニ付キ再ヒ調査ヲ爲スニ非レハ證言トシテ信憑カチ有セストハ道理ハ存セサルニ依リ證人カ證言ヲ爲ス當時再實測ヲ爲シタルモノニ非ストハ一事ハ未タ以テ直ニ證言ヲ斥ケルハ理由ト爲スニ足ラス然ルニ原裁判所ハ「個ハ唯與太郎ノ圖面ヲ一見シテ陳述シタルニ止マリ證言ノ當時再實測ヲ爲シタルモノニ非レハ其陳述ハ未タ以テ正確ニシテ動カス可ラサルモノト爲スニ足ラス」ト判示シタル

判旨第二

ルハ探證ニ關スル法則ヲ不當ニ適用シタル違法アルヲ免カレズ既ニ此違法アリ原判決ノ全部破毀スヘキモノナルニ依リ第一上告論旨ニ對シテハ別ニ辯明ヲ與ヘス  
上文辯明ノ如ク本件上告ハ其理由アルニ依リ民事訴訟法第四百四十七條第一項ニ從ヒ原判決ノ全部ヲ破毀シ尙ホ同法第四百四十八條第一項ニ從ヒ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ長崎控訴院ニ差戻スナ相當ナリトス

○合資會社開誘社解散申請ノ件

明治三十一年十一月二十三日第三號  
明治三十一年一月二十四日第二民事部決定

○決定要旨

一 會社解散ノ申請ヲ棄却シタル裁判ニ對シテハ抗告ヲ爲シ得ヘキ法律ノ規定ナキニ依リ其裁判如何ニ不當ノ廉アルモ之ニ對シ抗告ヲ爲スノ權ナシ

原審 大阪控訴院

抗告人 伊藤祐貞

合資會社開誘社  
外一名

訴訟代理人 河野大一郎

被抗告人 山口良利

合資會社開誘社  
外一名

會社解散ノ申請棄却ノ抗告



右抗告人伊藤祐貞等ハ合資會社開誘社解散申請事件ニ付明治三十年十二月二十八日大阪控訴院ニ於テ與ヘタル抗告ノ決定ニ對シ抗告ヲ爲シタリ

決定

本件ノ抗告ハ之ヲ棄却ス

理由

抗告ノ要旨ハ被抗告人ハ合資會社開誘社ノ社員(外ニ二人)ニシテ該會社ハ明治二十八年十二月ノ創立ニ係リ引續キ營業シ來リシカ該會社ニハ第一利益ナシ第二社員ニ專横ノ處置ヲ爲スモノアリ第三社員ニシテ契約ノ出資ヲ差出サ、ルモノアリ以上ノ事實ニシテ會社創立ノ目的ヲ達スル能ハス又維持スル能ハサルヲ以テ社員多數ノ同意ヲ得テ神戸地方裁判所ニ申請シテ解散ノ命令ヲ受ケタル處被抗告人ヨリ抗告ヲ爲シ原院ニ於テ會社解散命令申請棄却ノ裁判ヲ與ヘラレタリ

抑モ合資會社ハ最モ社ノ親和ヲ要シ結社ノ目的ヲ達スルニ從事セサルヘカラス而シテ本會社ニハ前記ノ事實アリテ會社ヲ維持シ結社ノ目的ヲ達スル能ハサルモノトスルトキハ維持ノナラサルモノヲ維持セヨト命スルモノニシテ所謂難キヲ命スルモノニシテ爲シ能ハサル處ナリ之レ本抗告ヲ爲ス所以ナリト云ニアリ ○按スルニ本件ハ會社解散ノ申請ヲ抗告人ヨリ神戸地方裁判所ニ提出シ同裁判所ハ之ヲ聽許シ會社解散ノ命令ヲ付與シタルニ被抗告人ニ於テ之ニ服セス原抗告裁判所ニ抗告ヲ爲タル結果神戸地方裁判所ノ與ヘタル命令ヲ取消シ抗告人ノ申

請ヲ棄却ストノ決定ヲ爲シタルモノナレハ普通訴訟手續ニ關スル抗告ノ場合ナランニハ無論新ナル獨立ノ抗告理由ヲ生スヘシト雖モ本件ニ付テハ抗告人ハ元來抗告ノ權利ヲ有セサルモノニ付亦理由ノ有無如何ニ拘ハラズ抗告シテ以テ原決定ハ改正ヲ求ムルコト能ハサルモノトス如何トナレハ商法第二百二十七條ニ第六十七條ニ掲ケタル場合ハ外會社其目的ヲ達スルコト能ハス又ハ會社ノ地位ヲ維持スルコト能ハサルノ理由ヲ以テ一人又ハ數人ノ社員ヨリ會社ハ解散ヲ申立ルトキハ裁判所ノ命令ヲ以テ之ヲ解散スルコトヲ得(中略)前二項ニ掲ケタル命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得トアルハ外解散ノ申立ヲ棄却シタル場合ニモ猶抗告スルコトヲ得ヘキ旨ハ規定アルコトナケレハ抗告裁判所ハ裁判上如何ニ不當ノ廉アレハトテ之カ爲メ本來有セサル權利ハ新ニ發生スヘキ條理ナキヲ以テナリ要スルニ本抗告ハ許スヘカラサルモノナルヲ以テ不合法トシテ之ヲ棄却スルヲ相當トス是主文ノ如ク決定スル所以ナリ

○養子入籍届並家督相續届取消請求ノ件

明治三十年第四百七十九號  
明治三十一年一月二十五日第一民事部判決

○判決要旨

一 戸主死亡シ家族中他ニ相續人ナキトキハ戸主ノ遺妻ニ於テ相續スルノ權利ア

遺妻ノ相續權



リ而シテ遺妻カ其相続ヲ拋棄シタルトキ始メテ親族會ノ議決ニ依リ他家ヨリ  
相続人ヲ選定スルコトヲ得ルハ本邦慣習ノ認ムル所ナリ(判旨第一二點)

第一審 東京地方裁判所 第二審 東京控訴院

上告人 井上ロク

外二名

訴訟代理人

三好退藏  
北田正董  
手塚有重  
長島鷲太郎

被告八 井上源太郎

訴訟代理人

國崎清

右當事者間ノ養子入籍届非家督相續届取消請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十年四月五日言  
渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被告上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲  
シタリ

立會檢事安居修藏ハ意見ヲ陳述シタリ

判決

原判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ裁判ヲナサシムル爲メ本件ヲ東京控訴院ニ差戻ス

理由

上告論旨第一點ハ明治二十九年七月二十九日被上告人等カ淺草區役所ニ差出シタル養子入籍  
届及家督相續届ニハ井上「ロク」ノ署名アルモ「ロク」ハ之ニ署名シタルコトナク又之ヲ甘諾シタル  
コトナシ要スルニ該届出ハ被告上告人等ノ不法行爲ニ成リタルヲ以テ該届出ノ取消ヲ求ムルト  
ハ上告人等カ第一審以來請求ノ原因トシテ主張スルトコロナリ(第一審訴狀及第二審事實供述

ノ部參照然ルニ原院ハ控訴人井上源太郎ハ井上家族會議ノ決議ニ因リ亡音次郎ノ死後養子ト  
シテ井上家ヲ相續シタルモノト認ムルヲ以テ被控訴人ノ請求ハ其當ヲ得スト判斷セラレタリ  
然レトモ家督相續届ナルモノハ法律ノ規定ニ基キ親族ノ連署ヲ要スルモノナレハ親族會議ノ  
決議アルヲ以テ直チニ家督相續届ニ於ケル違法ノ連署ヲ妨ケストノ理由ヲ生スヘキ筈ナシ殊  
ニ該届出ニ於ケル連署ノ眞否ハ上告人等カ請求ノ原因トシテ極力争フトコロナレハ原院ハ須  
ラカ此ノ點ニ付キ判斷ヲ下サトルヘカラス然ルニ原院ハ被告上告人井上源太郎カ親族會議ノ決  
議ニ因ルト判斷シタルモノニシテ家督相續届出ニアル「ロク」ノ署名ハ果シテ「ロク」カ甘諾シテ爲  
シタルモノナルヤ又親族會議ノ決議アル以上ハ違法ノ届出ヲ妨ケサルヤノ點ニ付キ毫モ裁判  
スルトコロアラズ是裁判ニ適當ノ理由ヲ付セサルモノニシテ又主要ナル争點ニ付キ裁判ヲ下  
サトリシモノナリト云ヒ其第二點ハ井上家ニハ上告人井上「ロク」ノ外ニ家族ナキコトハ當事者  
間争ナキトコロナレハ上告人「ロク」カ其夫音次郎ノ死後正當ノ相続權ヲ有スルハ我國慣習ノ認  
ムルトコロナリ今原院判決ヲ見ルニ被告上告人源太郎ハ井上家親族會ノ決議ニ因リ亡音次郎ノ  
死後養子トシテ井上家ヲ相續シタルモノト認ムト說示セラレタルモ親族會議ノ決議ナルモノ  
ハ正當相續者カ家族中ニ存セサル場合若クハ正當相續者カ其決議ニ服從シタル場合若クハ自  
ラ其權利ヲ拋棄シタル場合ニ於テ有効ナルヘクシテ異議アル正當相續者ノ權利ヲ抑壓シ得ヘ  
キモノニアラサレハ原院カ單ニ井上家親族會ノ決議ニ因リ亡音次郎ノ死後養子トシテ井上家  
ヲ相續シタルモノト認ムルトノ理由ヲ以テ上告人「ロク」ノ主張ヲ排斥シタルハ相續權ニ關スル



判旨第一節

法則ヲ不當ニ適用シタルモノナリト云フニ在リ  
 依テ審按スルニ凡ソノ戸主死亡シ家族中絶テ相續人ナキトキハ戸主ノ遺棄ニ於テ相續スルハ權  
 利アリ而シテ若シ遺棄ニ於テ其權利ヲ拋棄シタルトキ始メテ親族會ハ議決ニ依リ他家ヨリ相  
 續人ヲ撰定スルコトヲ得ルハ是レ本邦慣習ハ認ムル所ナリ今本訴井上家ニハ戸主ノ遺棄ナル  
 上告人ノ外他ニ家族ナキコトハ被上告人等ノ爭ハサル所ナレハ本訴ノ相續權ハ「ロク」ニ屬セサ  
 ルヘカラス而シテ上告人「ロク」カ自己ノ權利ヲ拋棄シテ被上告人源太郎ノ相族ヲ甘諾シタルコ  
 ト曾テ之レナシトハ上告人等ノ原院ニ於テ主張セシ所ニシテ原院ノ口頭辯論調書中之チ明記  
 セリ然ルニ原院ハ井上家ノ親族會ニ於テ被上告人源太郎ヲ相續人ニ撰定シタルニヨリ上告人  
 等ノ請求ハ其當ヲ得サル旨判定シ而シテ原院カ親族會ノ決議ノ理由ナリト認ムル所ハ「ロク」ハ  
 戸主ノ妻タリシコト日極メテ淺ク且ツ其身井上家ト血統ノ關係ナキヲ以テ戸主ノ最近親族ナ  
 ル源太郎ヲ撰定シタルト云フニ止マリテ「ロク」カ源太郎ノ相續ヲ甘諾シタルトノ理由ヲ認メタ  
 ルニアラス而シテ此點ニ付テハ前願ノ如ク上告人等ノ論争アリシニ拘ハラヌ原院文中何等ノ  
 判斷アルコトナシ之ニ因リテ觀レハ原院ハ親族會ナルモノハ相續ニ關シ絕對無限ノ議決權ヲ  
 有シ相續權アル者ト雖モ其議決ニ服從セサルヘカラサルカ如ク判定シ以テ上告人等ノ請求ヲ  
 排斥シタルモノニシテ即チ相續ニ關スル法則ニ違背シタルモノタルヲ免カレス因リテ原院決  
 ハ之ヲ破毀スヘキモノトス既ニ此點ニ於テ原院決ヲ破毀スヘキモノト爲ス要スルニ上告論旨  
 第一第二點ハ共ニ其理由アルニヨリ自餘ノ各論旨ニ付一々說明ヲ與ヘス

以上ノ理由ニ基キ民事訴訟法第四百四十七條及ヒ第四百四十八條ニ從ヒ主文ノ如ク判決スル  
 モノナリ

○契約維持並立木引渡請求ノ件

明治三十年 第二百六十六號  
 明治三十一年一月二十六日第二民事部判決

○判決要旨

一 他人ノ權利ヲ目的トスル賣買ニ付テハ賣主ハ其權利ヲ取得シ之ヲ買主ニ移轉  
 セシムルノ義務ヲ負フモノナルニ依リ他人ノ權利ヲ目的トナシタル賣買ハ其  
 成立上全然無効ノ契約ナリト認メタル判決ハ不當ナリ(判旨第一點)

第一審 熊本地方裁判所 第二審 長崎控訴院  
 上告人 龜本長平 訴訟代理人 佐々木直綱  
 被上告人 遠山和夫 訴訟代理人 上原鹿造

右當事者間ノ契約維持並立木引渡請求事件ニ付長崎控訴院カ明治三十年四月五日言渡シタル  
 判決ニ對シ上告代理人ハ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告代理人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シ  
 他人ノ權利ヲ目的トスル賣買



立會檢事安居修職ハ意見ヲ陳述シタリ

判決

原判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ長崎控訴院ニ差戻ス

理由

上告論旨第一點ハ他人ノ物ヲ以テ賣買ノ目的ト爲ス契約ハ無効ナリト現行法ニ於テ特ニ禁シアラサルヲ以テ其契約ハ有効ナルコト論テ俟タサル所ニシテ修正民法ハ未タ實施セラレサルモ同法ノ第五百六十條ハ(他人ノ權利ヲ以テ賣買ノ目的ト爲シタルトキハ賣主ハ其權利ヲ取得シテ之ヲ買主ニ移轉スル義務ヲ負フ)ト又同法ノ第五百六十二條ニ賣主カ契約ノ當時其賣却シタル權利ノ自己ニ屬セサルコトヲ知ラザリシ場ニ於テ其權利ヲ取得シテ之ヲ買主ニ移轉スルコト能ハサルトキハ賣主ハ損害ヲ賠償シテ契約ノ解除ヲ爲スコトヲ得トノ規定ハ法理當然ノ規定ナリト思考ス然ルニ原院ハ(甲第一號證ハ明カニ他人ノ物ヲ賣買シタルモノナルカ故ニ全然無効ノ契約ナリトス(中略)甲第一號證契約ハ元來無効ノモノナリ然ルニ後日被控訴人カ契約ノ目的物ヲ取得スルモ之カ爲メ無効ノ契約ヲシテ有効ニ變セシムルノ理アルヘキ答ナキニ依リ云々)ト說明シ甲第一號證ノ契約ヲ無効ナリト判決シタルハ不法ノ判決ナリト云フニ在リ○依テ原判決ヲ審査スルニ其斷案ノ初頭ニ於テ云々然ラハ則チ被控訴人カ控訴人ニ對シニ重賣買爲シタル爲メノ責任ヲ有スルヲ否ハ暫ク措キ甲第一號證ハ明ニ他人ノ物ヲ賣買シタルモノ

判旨第一點

ナルカ故ニ全部無効ノ契約ナリト說明シ尙ホ其後段ニ於テ(假令今日所有シ居ルモノトスルモ甲第一號契約ハ元來無効ノモノナリ然ルニ後日被控訴人カ契約ノ目的物ヲ取得スルモ之レカ爲メ無効ノ契約ヲシテ有効ニ變セシムルノ理アルヘキ答ナシ)ト說明シタルヲ觀レハ其判旨ハ他人ノ權利ヲ目的ト爲シタル賣買ハ此成立上全然無効ノ契約ト認メタルニ在リ原判決ハ他人ノ物ヲ賣買スル契約ハ何故ニ無効タルヘキヤノ理由ヲ明示セサルモ蓋シ特定物ノ賣買ハ即時所有權ヲ賣買スルコトハ不能ナリトノ理由ニ基キシモノナルヘシ凡ソ特定物ノ賣買ハ契約ト同時ニ其所有權ヲ移轉スルヲ以テ普通ノトスルモ之ヲ以テ特定物賣買ハ要件ト爲シ不可キモハニアラス何トナレハ即時ニ所有權ヲ移轉スルト否トハ契約者ノ意思ニ從フ可キモノニ即時ニ移轉スルヲ得サレハトテ之レカ爲メ契約ノ自由ヲ制限スル理由ナケレハナリ故ニ此場合他人ノ權利ヲ目的トスル賣買ニ付テハ賣主ハ其權利ヲ取得シ以テ買主ニ之ヲ移轉セシムル義務ヲ負フモノトシ若シ賣主ニ於テ之ヲ取得スルヲ得ズ到底賣買ノ履行ヲ爲シ能ハサルニ至リタルハ買主ニ對シ解除ヲ求ハルモノト爲シ不可キハ法理ニ適スルモノトス依テ原判決ハ賣買ニ關スル法則ヲ不當ニ適用シタルモノトシ其全部ヲ破毀ス可キモノトス既ニ本點ニ於ケル論旨ヲ採用シテ原判決ヲ破毀スル以上ハ他ノ上告點ニ對シ更ニ說明ヲ爲サス  
上來說明ノ如ク本件上告ハ適法ノ理由アルヲ以テ民事訴訟法第四百四十七條第一項ニ依リ原判決ヲ破毀シ尙ホ民事訴訟法第四百四十八條第一項ノ規定ニ從ヒ長崎控訴院ニ差戻スヲ相當ナリトス是レ主文ノ如ク判決スル所以ナリ

他人ノ權利ヲ目的トスル賣買



○地所賣戻契約履行請求ノ件

明治三十年第二百五十七號  
明治三十一年一月二十八日第二民事部判決

○判決要旨

一 債務者ノ總財産ハ各債權者ノ共同擔保ニシテ債務者ノ債權ノ如キモ亦其財産ノ一部ナレハ債務者カ自ラ其權利ノ行使ヲ拒ミ若シハ之ヲ怠リ爲メニ其財産ニ減少ヲ來シ各債權者ノ共同擔保權ヲ害セントスル恐アル場合ニ於テハ債權者ハ自己ノ債權保全ノ爲メ債務者ニ代リ代位訴訟ヲ提起シ得ヘキコトハ一般法理ノ認ムル所ナリ

一 地所ノ賣主ニ於テ其他所ニ付キ第三者ニ對シ買戻權ヲ有スルトキ買主カ其地所ヲ買戻シ自ラ其地所ノ所有主タラシコトノ目的ヲ以テ賣主ニ代リ第三者ニ對シ買戻權ヲ主張スル者ハ賣買契約上ノ買主權ニ因リテ動作スルモノニシテ共同擔保權ヲ原因トスル所ノ債權者ノ地位ニ立ツモノニアラス故ニ法理上代

位訴訟ヲ提起スルノ資格ナシ

第一審 岡山地方裁判所高梁支部 第二審 大阪控訴院

上告人 栗元彌藏 訴訟代理人 收野充安

被上告人 栗元勝太郎 訴訟代理人 守屋此助

右當事者間ノ地所賣戻契約履行請求事件ニ付大阪控訴院カ明治三十年四月二十一日言渡シタル判決ニ對シ上告代理人ハ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告代理人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決

原判決ヲ破毀シ本院ニ於テ判決スル左ノ如シ

第一審判決ヲ廢毀ス

被上告人ノ訴ハ之ヲ却下ス訴訟費用ハ總テ被上告人ノ負擔トス

理由

上告第一點ハ原裁判所ニ於テ本件被上告人カ訴外人富部利太郎ニ代位シ本訴ノ請求ヲ爲スノ權能アリト判定シタルハ法則ノ適用ヲ誤リタルモノナリ其理由ハ(一)代位訴訟ノ手續ハ我邦ノ現行法律ニ於テ認許シタルコトナシ而シテ代位訴訟ナルモノハ法律ニ於テ認許スルニ非サレハ單ニ債權者ノ權能トシテ當然ニ存スルモノニアラサルナリ(三)本件被上告人カ履行ヲ請求スル地所賣戻契約ハ訴外人富部利太郎ト上告人間ニ存スルモノニシテ契約上ノ債務者タル上告

代位訴訟提起ノ資格○買戻權ノ主張

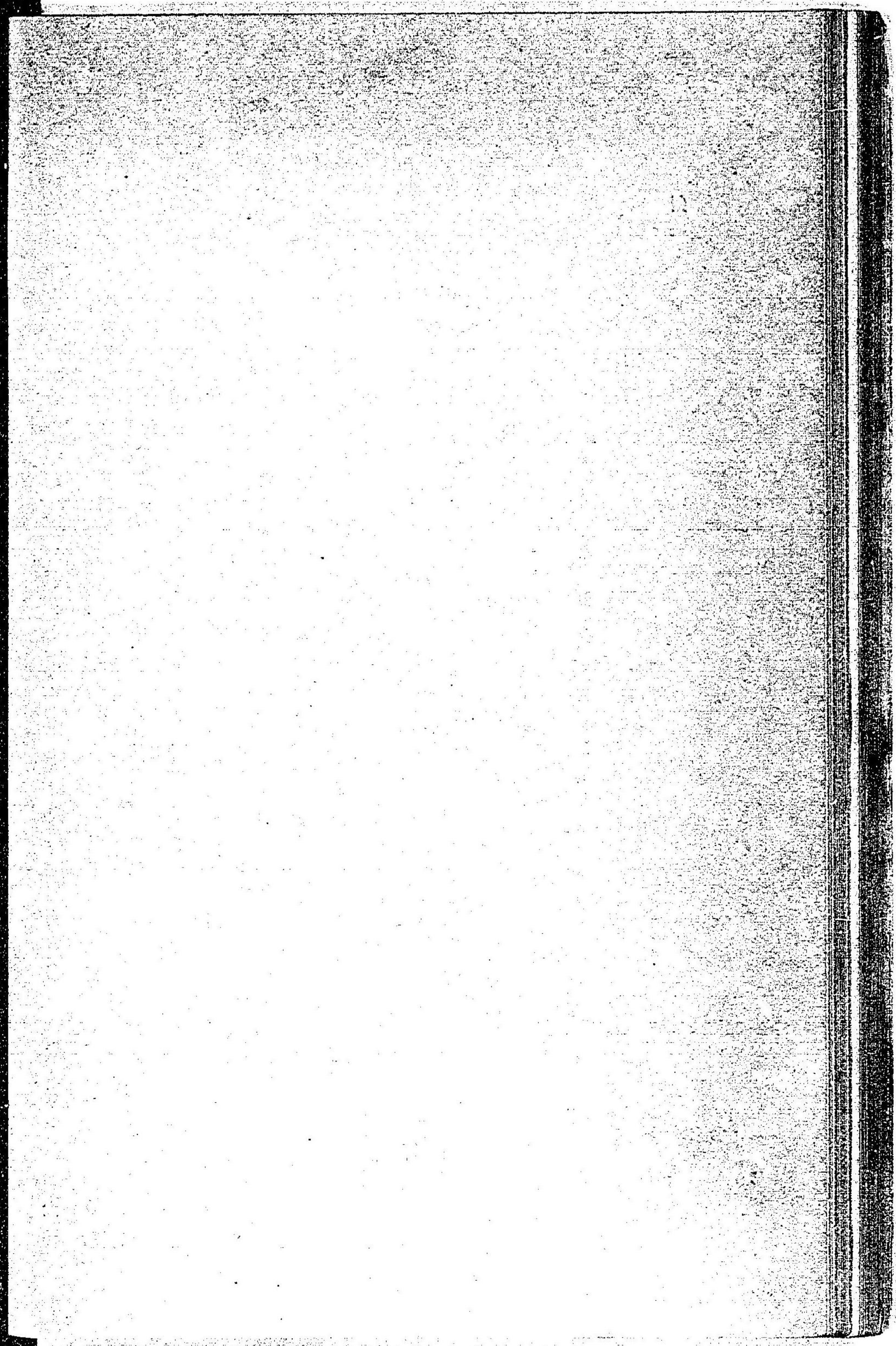
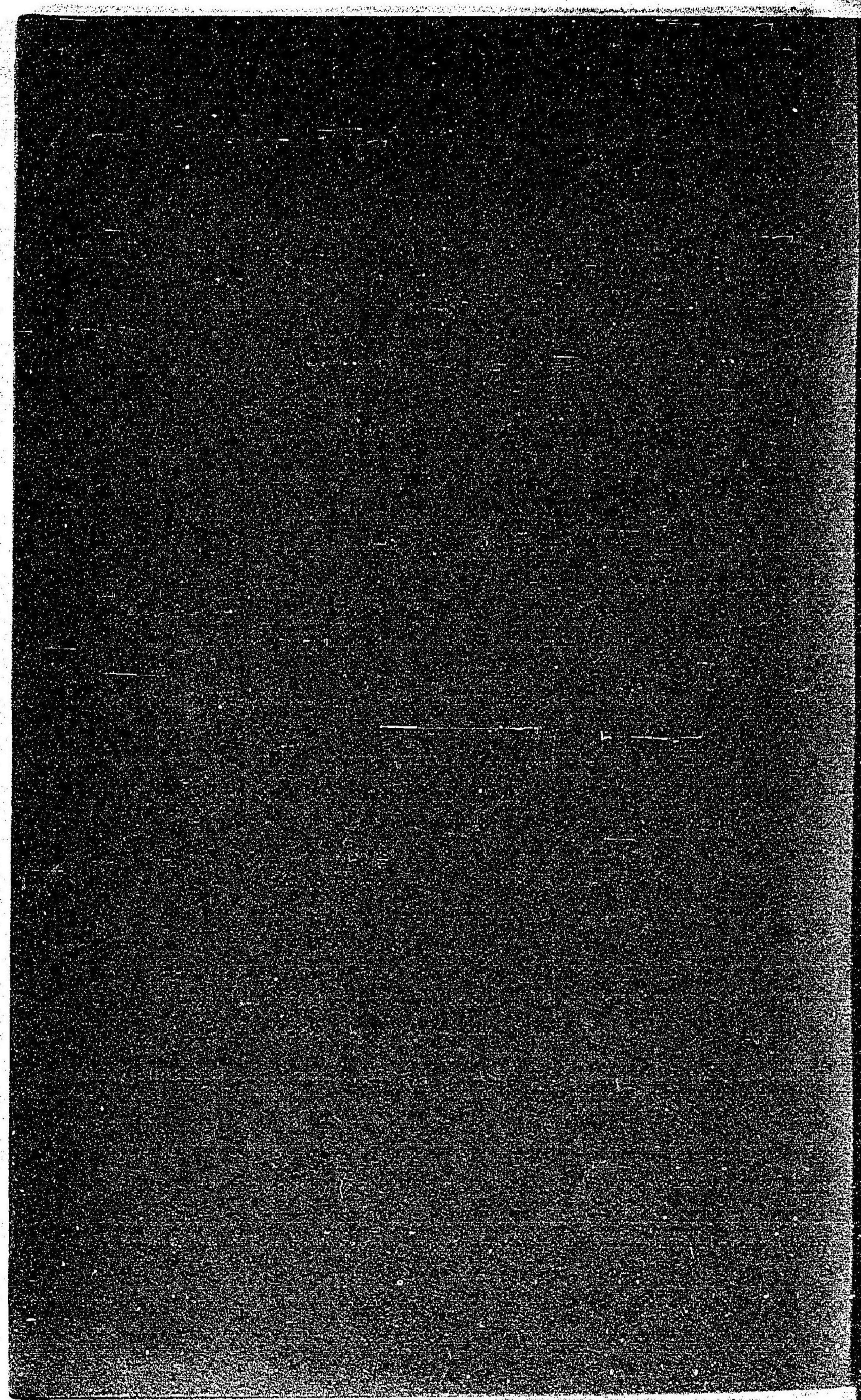


人ハ契約ノ當事者ニアラサル被上告人ヨリ履行ヲ強要セラルト、債務名義ナク將タ富部利太郎ハ上告人ニ對スル權能ヲ自ラ行使セス且ツ自ラ行使スルヲ禁止セラレタルコトナシ換言セハ上告人ト富部利太郎間ノ法律關係ハ第三者ノ爲メニ行動ヲ制限驅束セラレタルコトナシ將タ被上告人ハ此法律關係ニ何等ノ債權名義ヲ有セサルナリ然ルニ被上告人カ上告人ニ對シ履行ヲ強要シ得ルノ筋合ハアラサルナリ(三)原裁判所ハ本件ノ如キ手續ヲ以テスルニ非サレハ被上告人カ富部利太郎ニ對スル債權ノ執行ヲ完フスル能ハサルモノ、如ク説明シタリト雖モ民事訴訟法第七百三十二條ノ規定アリテ之ニ據レハ被上告人ハ債務者タル富部利太郎ニ對スル強制執行ノ方法トシテ富部利太郎カ上告人ニ對スル債權ノ轉付ヲ受クルヲ得ヘキナリ蓋シ債權轉付ナルモノハ債權者カ債務者ト第三者トノ法律關係ニ權利ヲ主張スル正當ノ方法タルモノナリ然レ被上告人カ此手續ニ依據セスシテ本訴ヲ提起シタルハ不當ナリ要スルニ本件被上告人ハ債權者カ債務者ニ屬スル訴訟權ヲ行使スルニ就テ法律ニ於テ認許セラレタルコトナク又本裁判上ノ命令ヲ得タルコトナキヲ以テ本訴請求ノ權ナキモノナリト云フニ在リ

按スルニ債務者ノ總財產ハ各債權者ノ共同擔保ニシテ而シテ債務者ハ債權ノ如キハ固ヨリ其財產ハ一部ナルニ依リ債務者カ自ラ其權利ヲ行使スルコトヲ拒ミ若クハ之ヲ怠リ爲メニ其財產ニ減少ヲ來シ各債權者ノ共同擔保權ヲ害セントスルハ處レアル場合ニ於テハ債權者ハ自己ハ債權保全ノ爲メ債務者ニ代リ其權利ヲ行フコト即チ代位訴訟ヲ提起シ得ヘキコトハ一般法理ハ認ムル處ナリ然レトモ本訴ハ其起訴者被上告人ニ於テ自己ニ對スル賣主富部利太郎ナル者ニ代リ代位訴訟ヲ提起シ上告人對利太郎間ノ地所賣戻シ契約ニ基キ上告人チシテ利太郎ニ地所ヲ賣戻サシメ自己ト利太郎トノ間ニテ取替ヒタル賣戻契約ヲ實行シ躬親ヲ其地所ノ所有主トラントノ目的ヲ以テ特定ノ地所ニ對シ買主權ヲ主張スルモノニシテ債務者ノ總財產ニ對スル各債權者ノ共同擔保權ニ因リ其權利ヲ主張スルモノニアラス左レハ被上告人ハ賣主利太郎ノ還約ニヨリ賣戻契約ヲ解除シ已ニ交付シタル内金ノ取戻シ及ヒ損害賠償等ノ爲メ他日或ハ利太郎ノ總財產ニ對スル各債權者ノ共同擔保權ニ因リ利太郎ノ債權者トシテ其債務者ニ對シ代位訴訟ヲ提起シ得ヘキ場合アルヘキモ本訴ニ於テハ上文ノ如ク賣戻契約上ハ買主權ニ因リテ動作スルモノニシテ共同擔保權ヲ原因トスル所ハ債權者ノ地位ニ立ツモノニアラザルニ付キ法理上代位訴訟ヲ提起スル資格ナキモノトス是故ニ原裁判所ハ代位訴訟ヲ允許シタル第一審判決ヲ廢棄シ被上告人ノ訴ヲ却下スヘキ答ナルニ事此ニ出テス反テ上告人ノ控訴ヲ棄却シ不法ナル第一審判決ヲ認可シタルハ上告所論ノ如ク法則ヲ不當ニ適用シタル違法アルモノトス既ニ此點ニ於テ原判決ニ違法アリト評決スル以上爾餘ノ上告論旨ニ對シ別ニ說明ヲ與フル要ナシ

上文聲明ノ如ク本上告ハ其理由アルヲ以テ民事訴訟法第四百四十七條第一項ニ依リ原判決ヲ廢毀シ且ツ本案ハ同法第四百五十一條第一號ニ該當スルヲ以テ直チニ事件ニ付キ主文ノ如ク判決スル所以ナリ







總目録  
刑法

手形ニ類似スル證券ノ性質ノ事……………一  
種油預證ノ性質ノ事……………一  
容器ニ鎖鑰又ハ封印ヲ施シタル寄託品ヲ取出シタル所爲ノ事……………四  
容器ニ封印セタル寄託品ヲ取出シタル所爲ノ事……………四  
蠶種検査所ノ印章ノ性質ノ事……………六  
買取ノ意思ヲ以テ物品ヲ買受ケ代金ヲ支拂ハサル所爲ノ事……………二四  
郵便局ノ雇員ニシテ郵便不足税ヲ徴取シタル所爲ノ事……………二六  
郵便局ノ雇員ニシテ不足税又ハ未納税ヲ徴收シ之ヲ費消シタル所爲ノ事……………二六  
親屬共犯ノ詐欺取財ノ刑責ノ事……………二六  
一部偽造ノ證書ニ對シ全部沒收ノ言渡キ爲シタル裁判ノ事……………三二  
郵便切手ヲ剝取シタル所爲ノ事……………三三



餘罪後發例(刑法第二百二條)ヲ適用セサル裁判ノ事.....四九

刑事訴訟法

氏名不詳ノ被告人ニ對スル公訴ノ提起ノ事.....一五

私訴判決ノ理由ヲ畧記シテ公訴判決ニ譲リタル裁判ノ事.....二〇

再度ノ闕席判決ニ對シ故障ノ申立ヲ許サ、ル法則(刑事訴訟法第二百

三十三條第二項)ノ意義ノ事.....二二

一部偽造ノ證書ニ對シ全部沒收ノ言渡ヲ爲シタル裁判ノ事.....三三

非現行犯事ニ付司法警察官ノ爲シタル押収處分並ニ其調書ノ効力ノ事.....三六

非現行犯人ヲ逮捕告發シタル巡査ノ不法處分ハ本案判決ニ關係ナ有セサル事.....四〇

關係人ノ署名捺印ナキ家宅搜索調書ノ効力ノ事.....四七

餘罪後發例(刑法第二百二條)ヲ適用セサル判決ノ事.....四九

商法

詐欺破産ノ行爲ヲ幫助シタル雇人ノ所爲ノ事.....二一

郵便條例

郵便物ヲ受取人ニアラサル者ニ交付シタル所爲ノ事.....二七

郵便集配人自ラ郵便物ヲ配達セス他人ニ委託シタル所爲ノ事.....二七



事件目錄

事 件

竊盜及私印盜用等ノ件  
 竊盜ノ件  
 商品押用官印偽造ノ件  
 詐欺破産ノ件  
 竊盜ノ件  
 郵便條例違反ノ件  
 毆打創傷附帶私訴ノ件  
 官林冒認附帶私訴ノ件  
 詐欺取財ノ件  
 詐欺取財ノ件  
 詐欺取財ノ件

事件目錄

判決日	番 號	訴訟關係人	丁數
十一月十八日	二二六號	被告 岡野松之助	一
十一月十八日	二二八號	被告 楠見コサキ	四
十一月二十日	二七三號	被告 松岡喜六	六
十一月二十日	二九九號	被告 矢頭秀太	二
十一月廿一日	二三八號	被告 男 一人	五
十一月廿一日	二 號	被告 黒田喜市	七
十一月廿四日	二八八號	被告 吉田長左衛門 <small>私訴上告人</small>	三
十一月廿五日	二二七號	被告 鈴木本木 <small>私訴上告人</small>	三
十一月廿五日	二二三號	被告 志賀本木 <small>私訴上告人</small>	三
十一月廿五日	二二三號	被告 石井平賀 <small>私訴上告人</small>	三
十一月廿五日	二二三號	被告 野上垣榮次郎 <small>私訴上告人</small>	三
十一月廿五日	六 號	被告 藤井外造	一



事件目録

私印盗用等ノ件  
私印偽造等詐欺取財ノ件  
監守盗ノ件  
詐欺取財ノ件  
竊盗ノ件  
贓物寄藏ノ件  
監視規則違反ノ件

親屬共犯ノ詐欺  
偽造證書ノ一部没収  
司法警察官ノ押收處分  
非現行犯人ノ逮捕  
郵便切手ノ剝取  
家宅捜索調査ノ供述  
餘罪後發例ノ適用

日	月	年	被告
廿八	月	二七	被告 片山光藏
廿八	月	二七	被告 片山光藏
廿八	月	二八	被告 川瀨安丸
廿八	月	二六	被告 石川頼松
廿一	月	二九	被告 石原龍太郎
廿一	月	二二	被告 根岸竹次郎
廿一	月	二二	被告 福井寅一郎
廿一	月	二三	被告 平田半次郎

いろは索引

此索引ハ専ラ法律上ノ用語ニ依リ其頭字ヲ取テいろはノ順ニ從テ排列編纂ス止ムヲ得サルニ非サレハ形容詞若クハ普通名詞ヲ用ヒス○頭音ハ必スシモ字音ノ假名遣ニ拘ハラズ人ノ通常言フ所ノ音聲ニ據ル例之ほうチほうニ入ルトカ如シ

〔ス〕

委託物費清算ノ構成

(封印ナキ委託品。郵便不足税ノ關取。郵便切手ノ剝取。參看)

印章

(竊取検査ノ印章。參看)

一部偽造ノ證書

(偽造證書ノ一部没収。參看)

破産ノ幫助

(詐欺破産ノ幫助。參看)

配達ノ委託

(郵便集配人ニシテ郵便物ヲ自ラ配達セス他人ニ委託シテ送致シタル所爲ハ法律上罪トナス)

判決ノ理由

(私訴判決ノ理由。參看)

判決確定後ノ餘罪

(餘罪後發例ノ適用。參看)

いろは索引

丁數

〔ニ〕

人相ニ依ル起訴

(氏名不詳被告人ノ起訴。參看)

〔ほ〕

没収

(偽造證書ノ一部没収。參看)

〔を〕

押收處分

(司法警察官ノ押收處分。參看)

〔か〕

監守罪途ノ構成

(郵便不足税ノ關取。參看)

家宅捜索調査ノ供述

(家宅捜索調査ニ關係人ノ供述アルトキハ其罪者ヲ指シテ供述スルニ拘ハラズ其供述ハ證據力アリ)

關係人ノ供述

(家宅捜索調査ノ供述。參看)

〔よ〕

餘罪後發例ノ適用

(甲罪ニ對スル判決確定シタル後ニ至リ甲罪ニ對スル判決以前ノ乙罪ヲ裁判スルニ該)



いろは索引

餘額後發例(刑法第百二條)ヲ適用セサル判  
決ハ不法ナリ

〔九〕 種油預證ノ性質

種油預證ト雖モ裏書ヲ以テ賣買讓渡ヲナシ  
得ヘキ以上ハ刑法第百九條ニ所謂手形ナ  
リ

代金不拂ノ所爲

當初ヨリ買取ノ意思ヲ以テ賣買契約ヲ締結  
シ物件ノ交付ヲ受タル後詐言ヲ構ヘテ代金  
ヲ支拂ハサル所爲ハ詐欺取財罪ヲ構成ス

逮捕告發ノ不法

(非現行犯人ノ逮捕。參看)

裏書讓渡ノ證書

(種油預證ノ性質。參看)

「受取人ニアラサル者ニ交付」ノ意  
義

(郵便物ノ交付。參看)

雇人ノ破産幫助

(詐欺破産ノ幫助。參看)

刑法ノ手形

(手形類似ノ證券。參看)

關席判決

〔五〕

(再度ノ關席判決。參看)

封印アル寄託品

(鎖鑰及封印ノ寄託品。參看)

封印ナキ寄託品

封印ノミ包巾ノ委託物件ヲ取出シタル所爲  
ハ委託物毀損罪ヲ構成ス

不足ノ郵便税ノ騙取

(郵便不足税ノ騙取。參看)

公示送達

(氏名不詳被告入ノ起訴。參看)

交付ノ意義

(郵便物ノ交付。參看)

公訴私訴ノ關係

(私訴判決ノ理由。參看)

故障申立人ノ關席

(再度ノ關席判決。參看)

手形類似ノ證券

刑法第百九條ノ手形ニハ商法ニ規定スル  
手形並ニ其性質効用ニシテ相類似スル證券  
ハ凡テ包含ス

預證ノ性質

(種油預證ノ性質。參看)

〔九〕

代金不拂ノ所爲

當初ヨリ買取ノ意思ヲ以テ賣買契約ヲ締結  
シ物件ノ交付ヲ受タル後詐言ヲ構ヘテ代金  
ヲ支拂ハサル所爲ハ詐欺取財罪ヲ構成ス

逮捕告發ノ不法

(非現行犯人ノ逮捕。參看)

裏書讓渡ノ證書

(種油預證ノ性質。參看)

「受取人ニアラサル者ニ交付」ノ意  
義

(郵便物ノ交付。參看)

雇人ノ破産幫助

(詐欺破産ノ幫助。參看)

刑法ノ手形

(手形類似ノ證券。參看)

關席判決

〔八〕

〔七〕

〔六〕

〔五〕

鎖鑰及封印ノ寄託品

容器ニ鎖鑰又ハ封印ヲ施シタル物件ヲ寄託  
セラレ之ヲ破棄シテ物件ヲ取出シタル所爲  
ハ竊盜罪ヲ構成ス

蠶種検査ノ印章

蠶種検査所ニ於テ蠶種検査ニ使用スル印章  
ハ刑法第百九十六條第一項ニ所謂產物商標  
等ニ押用スル官ノ印章ナリ

詐欺破産ノ幫助

破産者ノ雇人ナルト否トハ問ハス苟モ詐欺  
破産ノ行爲ニ幫助シタル者ハ詐欺破産ノ制  
裁(民法第百五十五條)ニ免レトテ得ス

再度ノ關席判決

再度ノ關席判決ニ對シ故障ノ申立ヲ許サ  
ル法則(刑事訴訟法第百三十三條第二項)  
ハ故障ノ申立ヲ受理シ更ニ通常ノ規定ニ從  
ヒ裁判ヲ爲スヘキ場合ニ於テ未ダ本案ノ辯  
論ヲ開始セサル前故障申立人ノ關席シタル  
トキニ限ル

詐欺取財罪ノ構成

(代金不拂ノ所爲。郵便不足税ノ騙取)

詐欺ノ賣買契約

いろは索引

〔五〕

(代金不拂ノ所爲。參看)

詐欺取財ノ親屬共犯

(親屬共犯ノ詐欺。參看)

寄託物ノ竊取

(鎖鑰及封印ノ寄託品。參看)

共犯ノ親屬

(親屬共犯ノ詐欺。參看)

偽造證書ノ一部沒收

一部ノ偽造ニ係ル證書ニ對シ全部沒收ノ言  
渡ヲナシタル裁判ハ法律錯誤ノ不法アリ

切手ノ剝取

(郵便切手ノ剝取。參看)

郵便物ノ交付

郵便條例第百三十四條ニ所謂「之ヲ受取  
人ニアラサル者ニ交付シ」トナルハ受取人  
ニ交付セサル意思ヲ以テ第百三十三條ニ交  
付シタル場合ヲ云フ

郵便配達ノ委託

(配達ノ委託。參看)

郵便不足税ノ不取

郵便局ノ雇員不足税未納税ノ郵便物アルニ  
當リ郵便切手ヲ貼付セスシテ其金額ヲ騙取



いろは索引

シタル所爲ハ詐欺取財罪ヲ構成ス若シ其不足税未納税ヲ徴收シタル後悪意ヲ生シ費消シタルトキハ委託金費消罪又ハ監守盗罪ヲ構成ス

郵便切手ノ剽取

郵便切手貼用ノ郵便物ヲ寄託セラレタル場合ニ於テ其切手ヲ剽取タル所爲ハ委託物費消罪ヲ構成ス

未納郵便税ノ差取

(郵便不足税ノ騙取。参看)

商法ノ手形

(手形類似ノ證券。参看)

商品押用ノ官印

(種類検査ノ印章。参看)

氏名不詳被告人ノ起訴

被告人ノ住所氏名不詳ナルモ人相特徴ニ依リ其誰タルコトヲ知リ得ヘキトキハ適法ナル公訴ヲ提起スルコトヲ得ヘシ而シテ此寫合ニ於テ通常ノ送達ヲ爲スコト能ハザルトキハ公示送達ヲ爲スヘキモノトス

私訴判決ノ理由

公訴私訴ハ相牽聯スヘキモノナルヲ以テ私

訴判決ノ理由ヲ畧記シテ公訴判決ニ應ルモ不法ニアラス

親屬共犯ノ詐欺

詐欺取財事件ニ付共犯者ノ一人被害者ト親屬ノ關係ヲ有スル爲メ不論罪トナルモ他ノ共犯者ハ其刑責ヲ免ルトヲ得ス

司法警察官ノ押收處分

司法警察官ハ非現行犯事件ニ付押收處分ヲ爲スコトヲ得ルモ從テ其處分ヲ爲スニ當リ作成シタル文書ハ無効ナリ

巡查ノ不法處分

(非現行犯人ノ逮捕。参看)

被告人ノ人相ニ依ル起訴

(氏名不詳被告人ノ起訴。参看)

非現行犯事件ノ押收處分

(司法警察官ノ押收處分。参看)

非現行犯人ノ逮捕

巡查カ非現行犯人ヲ逮捕管發セシハ不法ノ處分ナリトスルモ其處分ハ本案判決ニ對シ何等ノ關係ヲ有セス

竊盜罪ノ構成收

(鎖鑰及封印ノ寄託品。参看)

法 文 表

刑法

一〇二條……………四九

一九六條一項……………六

二〇九條……………一

刑事訴訟法

二二三條二項……………二

商法

一〇五〇條……………二

郵便條例

二三四條……………一七

丁數

〔み〕

〔し〕

〔ひ〕

〔せ〕



月日目錄

宣告月日	番號	判決結果	原裁判所	丁數
一月十八日	一一一六號	棄却	大阪	一
一月十八日	一一三八號	一部破毀	大阪	四
一月二十日	一一七二號	棄却	長崎	六
一月二十日	一一九五號	棄却	長崎	二
一月二十一日	一二二八號	破毀	大阪	五
一月二十一日	二號	無罪	松山地方 裁判所 和島支部	七
一月二十四日	一一八八號	棄却	東京	〇
一月二十五日	一一三七號	破毀	宮城	二
一月二十五日	一二一三號	一部破毀	大阪	二
一月二十五日	六號	破毀	大阪	二
一月二十八日	一一七一號	棄却	廣島	六
一月二十八日	一一七六號	一部破毀	宮城	三
一月二十八日	一一八四號	破毀	名古屋	三

月日目錄

丁數



月日目錄

一月二十八日	二六號	棄却	宮城	四
一月三十一日	一一九一號	棄却	東京	四
一月三十一日	れ二二號	破毀	長崎	四
一月三十一日	れ三三號	破毀	東京	四

總計十七件

棄却	七件
全部破毀	六件
一部破毀	三件
無罪	一件

人名音字目錄

人名	番號	原裁判所	丁數
[カ]			
川瀬安丸 <small>告被</small>	一一八四號	名古屋	三
[わ]			
片山光藏 <small>告被</small>	一一七一號	廣島	三
渡邊長左衛門 <small>私訴被 上告人</small>	一一八八號	東京	三
及川芳藏 <small>私訴被 上告人</small>	一一七六號	宮城	三
及川喜惣右衛門 <small>公訴上 告人</small>	一一七六號	宮城	三
男一 <small>人被告</small>	一二二八號	大阪	一
[を]			
岡野松之助 <small>告被</small>	一一一六號	大阪	一
戸板暁文 <small>外一名公訴私訴 上告人</small>	一一七六號	宮城	三
石原龍太郎 <small>外一名被告</small>	一一九一號	東京	四
石川頼松 <small>告被</small>	二六號	宮城	四
[シ]			
井平芳太郎 <small>外四名私訴被 上告人</small>	一一三七號	宮城	三
石田宗貞 <small>外四名私訴被 上告人</small>	一一三七號	宮城	三

人名音字目錄



人名音字目録

〔よ〕	吉田 權 平私訴上 告人	.....	一一八八號	東京	二
〔ね〕	根岸竹次郎外一名被 告	.....	一一九一號	東京	三
〔う〕	上田榮次郎外一名被 告	.....	一二一三號	大阪	四
〔の〕	野垣楠之助外一名被 告	.....	一二一三號	大阪	四
〔く〕	楠見 コサキ 被 告	.....	一二三八號	大阪	四
〔や〕	黒田 喜 市外一名被 告	.....	二	松山地方 裁判所 和島支部	七
〔ま〕	矢頭 秀 太 被 告	.....	一一九九號	長崎	二
〔ま〕	松岡 喜 六 被 告	.....	一一七二號	長崎	二
〔ふ〕	松本文 内外四名私訴上 告人	.....	一一三七號	宮城	六
〔ふ〕	藤井 外 造 被 告	.....	六	大阪	二
〔き〕	福井寅一 郎 被 告	.....	れ二二號	長崎	六
〔し〕	木下 久 吉外一名被 告	.....	二	長崎	七
〔し〕	志賀定之進外四名私訴上 告人	.....	一一三七號	松山地方 裁判所 和島支部	七
〔ひ〕	平田半次郎 被 告	.....	れ三三號	宮城	七
〔す〕	鈴木 馨私訴上 告人	.....	一二三七號	東京	三

菅 勝太郎外四名私訴上  
告人.....一一三七號

宮城

三

人名音字目録



# 大審院刑事判決錄

## 第四輯

### 第一卷

#### ○竊盜及私印盜用等ノ件

明治三十年第一一六號  
明治三十一年一月十八日宣告

#### ○判決要旨

刑法第二百九條ノ手形ニハ商法ニ規定スル手形並ニ其性質効用ニシテ相類似  
スル證券ハ凡テ之ヲ包含ス  
種油預證ト雖モ裏書ヲ以テ賣買讓渡ヲ爲シ得ヘキ以上ハ刑法第二百九條ニ所  
謂手形ナリ

(參照) 爲替手形其他裏書ヲ以テ賣買スヘキ證券若クハ金額ト交換スヘキ約定手形ヲ  
偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス(刑法第二項)  
手形類似ノ證券○種油預證ノ性質



第一審 大阪地方裁判所 第二審 大阪控訴院

被告人 岡野松之助 辯護人 磯部四郎

右竊盜私印盗用私書偽造行使詐欺取財被告事件ニ付キ明治三十年十月三十日大阪控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ被告ハ上告ヲ爲シタリ

大審院ニ於テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ審判ナルコト左ノ如シ

上告趣旨ハ判決ニハ法律ニ依リ其理由ヲ明示ス可キハ刑事訴訟法第二百三條ノ命スル所ナルニ刑法第二百八條及ヒ第百條ノ第一項ナルヲ第二項ナルヲ之ヲ明示セサルハ違法ナリト云フニ在レトモ○原判文ヲ査閱スルニ私印盗用ノ所爲ハ云々トアリテ刑法第二百八條ヲ適用シアル上ハ特ニ其何項ナルコトヲ明示セサルモ違法ト認ムルコトヲ得ス又本件ハ數罪俱發ニ係ルヲ以テ刑法第百條ニ依リ一ノ重キニ從テ處斷シタル上ハ特ニ其何項ナルコトヲ明示スルヲ要セス故ニ本論旨ハ適法ノ理由ナキモノトス

辯護人磯部四郎ノ擴張論旨第一點ハ原院ニ於テ偽造行使ト認定シタル第一第二第三及ヒ第七ノ所爲ハ其判文ニ明示スル如ク種油ノ預證書ニシテ商法第六百九十九條乃至第八百二十三條中ノ規定ニ支配セラレ可キ裏書ヲ以テ賣買ス可キ證書若クハ金額ト交換ス可キ約定手形ト全ク其性質ヲ異ニシ假令原院ノ認ムル如ク二三ノ銀行若クハ其他ノ商店トノ間ニ裏書ヲ以テ擔保ニ供スルコトヲ得タルモノナリト雖モ是レ其當事者雙互間ノ特別合意ニ基因スルモノナル可クシテ法律上認許シタル一般ノ賣買證券ニアラス殊ニ原院ノ認定シタル事實ニ照スモ被告

カ偽造預證ニ裏書シテ之ヲ賣買シ若クハ金額ト交換シタル事跡ノ見ル可キモノナシ單ニ米穀賣買ノ證據金ニ代用シ又ハ其預證ヲ抵當トシテ金借シタルニ過キス然ラハ則チ刑法第二百九條ヲ以テ論スヘキ重罪ヲ構成セサルモノトス故ニ種油預證書ハ單純ナル私署證書ナルヲ以テ刑法第二百十條ニ同フハ格別同法第二百九條ヲ以テ論シタルハ不法ナリト云フニ在レトモ○刑法第二百九條ニ規定スル手形類ハ單ニ商法ニ規定スルモノハハミニ限ラズ其他ハ證券ト雖モ其性質効用相類スルモノハ亦之ニ包含スルモノトス而シテ本件被告カ偽造行使シタル種油預證ナリト雖モ此證券タルヲ原院ハ認メタル事實ニ依リハ裏書ヲ以テ賣買讓渡ヲ爲シ得ヘキモノナルコト明ナリ既ニ裏書ヲ以テ賣買讓渡ヲ爲シ得ヘキモノト認メタル上ハ刑法第二百九條ニ間擬シタルハ當然ナリトス又被告カ右偽造ノ證券ヲ賣買シ若シクハ金額ト交換シタル事蹟ヲシト雖モ前掲ノ如ク裏書ヲ以テ賣買讓渡ヲ爲シ得ヘキ證券ニシテ苟モ之ヲ偽造行使シタル上ハ其行使ノ方法如何ニ拘ハラズ刑法第二百九條ノ罪ヲ構成スルコト固ヨリ論ヲ俟タサルナリ因テ本論旨モ亦適法ノ理由ナキモノトス

同第二點ハ證書偽造罪ハ物質其モノニ偽造ナカル可カラズ原院ニ於テ第一第二第三及ヒ第七ノ所爲ニ付認定シタル事實ニ依リハ被告ハ其屋主敷田勘兵衛ノ實印ヲ押捺シタル預用紙ニ種油預ノ文字ヲ記入シテ之ヲ利用シタルニ過キス然ラハ則證書ノ物質其モノニ偽造ナクシテ其紙面ニ種油預ノ文字ヲ記入シテ他人ヲ欺キタルニ止マルヲ以テ單純ナル詐欺取財ノ罪ト爲ルヲモ知ルヘカラスト雖モ此事實ヲ偽造ト認定シタルハ不當ナリト云フニ在レトモ○要スル



鎖鑰及封印ノ寄託品○封印ナキ寄託品

四

ニ殿田勘兵衛ノ實印ヲ押捺シタル預用紙ヲ材料トシ勘兵衛カ真正ノ預リ證ノ如ク作爲シタル上ハ假リニ其所爲ハ種油預リノ文字ヲ記入シタルニ止マルモノトスルモ尙ホ偽造タルヲ免レメ何トナレハ則右勘兵衛カ實印ヲ押捺シタル預用紙ハ唯之ヲ偽造ノ材料ニ供シタルニ過キサレハナリ然ルヲ況ンヤ種油預リノ文字ヲ記入シタルニ止マルトノ事實ハ原判文之ヲ認メサルニ於テナキ

右ノ理由ナルヲ以テ刑事訴訟法第二百八十五條ニ依リ本案ノ上告ハ之ヲ棄却ス  
明治三十一年一月十八日大審院第一刑事部公廷ニ於テ檢事藤堂融立會宣告ス

○竊盜ノ件

明治三十一年第一一三八號  
明治三十一年一月十八日宣告

○判決要旨

容器ニ鎖鑰又ハ封印ヲ施シタル物件ヲ寄託セラレ之ヲ破棄シテ物件ヲ取出シタル所爲ハ竊盜罪ヲ構成ス  
封印ナキ包中ノ委託物件ヲ取出シタル所爲ハ委託物費消罪ヲ構成ス

第一審 和歌山地方裁判所

第二審 大阪控訴院

被告人 楠見コサキ

右竊盜被告事件ニ付明治三十年十一月十三日大阪控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ被告ハ上告ヲ爲シタルニ依リ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ審理ヲ遂クルニ上告ノ趣旨ハ竊盜ノ罪タルヤ其物件カ他人ノ占有ニ係ルコト犯罪構成上ノ一要件タリ若シ之カ條件ヲ欠クニ於テハ竊盜罪ヲ構成セサルモノナリ然ルニ原院ハ被告カ木地龜太郎ノ依頼ニ依リ其荷物ヲ預リ置キタル中無斷ニ之カ物品ヲ取出シタルノ事實ヲ認メナカラ之ニ對シ竊盜ノ罪アルモノトシ重禁錮ニケ月ノ刑ヲ言渡シタルハ不當ニ法律ヲ適用シタル不法ノ裁判ナリト云フニ在リ○依テ審按スルニ物件ハ容器ニ鎖鑰又ハ封印等ヲ施シテ一個ト爲シタルモノハ寄託セラレタル場合受託者竊カニ其鎖鑰封印ヲ破リ其内ヨリ或ル物件ヲ取去リタルニ於テハ或ハ竊盜罪ヲ構成スヘシト雖モ本件ハ全ク之ハ異ナリ被告ハ吳服類在中ハ風呂敷包ニ箇チ他人ヨリ預リ其中ハ縮緬切若干ヲ取リタリト云フニ過キスシテ其風呂敷包ニ封印ヲ施シタルニ非ス隨テ包括シタルモノハ寄託セラレタルニ非ルヤ勿論ナレハ被告ハ所爲ハ法律ニ所謂委託物費消ノ罪ナリトス然ルニ原判決之ニ對シ刑法第三百六十六條同第三百七十六條ヲ適用シテ處斷シタルハ上告論旨ノ如ク擬律ニ錯誤アル不法ノ裁判ナリトス  
右ノ理由ナルヲ以テ刑事訴訟法第二百八十六條同第二百八十三條ニ則リ原判決ヲ破毀シ本院ニ於テ直チニ判決スル左ノ如シ

鎖鑰及封印ノ寄託品○封印ナキ寄託品

五



右

補見コサキ

原判決ノ認ムル事實ニ依リ之ヲ法律ニ照ラスニ被告ノ所爲ハ刑法第三百九十五條前段ニ該當シ押收物ノ内友染縮緬二尺八寸五分同二尺ハ刑法第四十八條ニ依リ又友染縮緬三尺及ヒ賣上機ヨリ拔取リタル付込一枚ハ刑事訴訟法第二百二條ニ依リ何レモ木地龜太郎ニ還付シ公訴裁判費用ハ刑法第四十五條刑事訴訟法第二百一條ニ依リ處分スヘキモノトス依テ被告ヲ重禁錮二月ニ處シ押収ノ友染縮緬三切及ヒ付込壹枚ハ木地龜太郎ニ還付シ公訴裁判費用金壹圓貳拾壹錢ハ被告ノ負擔トス

明治三十一年一月十八日大審院第一刑事部公廷ニ於テ檢事藤堂融立會宣告ス

○商品押用官印偽造ノ件

明治三十年第一一七二號  
明治三十一年一月二十日宣告

○判決要旨

蠶種検査所ニ於テ蠶種検査ニ使用スル印章ハ刑法第九十六條第一項ニ所謂産物商品等ニ押用スル官ノ印章ナリ

(參照) 産物商品等ニ押用スル官ノ記號印章ヲ偽造シ又ハ其偽印ヲ使用シタル者ハ蠶

懲役ニ處ス(刑法第九十條第一項)

第一審 大分地方裁判所

第二審 長崎控訴院

被告人 松岡喜六 辯護人 山浦橋馬

右喜六カ商品等ニ押用スル官ノ印章偽造及ヒ詐欺取財被告事件ニ付明治三十年十一月二十二日長崎控訴院ニ於テ大分地方裁判所ノ判決ニ對スル被告ヨリノ控訴ヲ審理シ原判決ヲ取消シ更ニ被告喜六ヲ輕懲役六年ニ處ス云々ト言渡シタル判決ヲ不法ナリトシ被告ハ上告ヲ爲シ原院檢事長大島貞敏ハ答辯書ヲ差出シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ辯護士山浦橋馬ノ辯論立會檢事岩田武儀ノ意見ヲ聽キ判決スルコト左ノ如シ

上告ノ要旨ハ原判決ハ不當ノ裁判ナリト信ス何トナレハ蠶種検査所ハ大分縣蠶種業組合員ヨリ成立シタルモノニテ官署ニハ之ナク又原判決ノ事實ニ於テ被告ノ用ヒタル印ヲ單ニ用ノ字ヲ甲ノ字ニ變更シトノミ判示シアルモ其用ヒタル印ハ圓形ニ大小ノ相違及ヒ檢ノ字ノ畫モ違ヒ居ルノミナラス用ト甲トノ相違アリテ全ク詐欺ノ目的ヲ以テ用ヒタルモノニシテ單純ナル詐欺取財罪ヲ構成セルモノナリ然レハ刑法第三百九十條第三百九十四條ニ依リ處分セラルヘキモノナルニ原院カ刑法第九十六條ヲ適用シ輕懲役ニ處セラレタルハ事實ノ理由ト法律ノ理由ト阻斷スル不法ノ判決ナリト云フニアレトモ○原判文ニハ大分縣ニ於テ蠶種検査ニ使用スル大分縣蠶種検査所製絲用種検査ハ證ト刻シタル印章ニ擬シタル印ニ特ニ其用ノ字ヲ甲ニ變更シ一見真正ハ検査印ハ如ク偽造セシメ云々ト判示シアリテ即チ大分縣ニ於テ蠶種検査ニ



使用スル印章ニ疑シタル印ヲ偽造使用シタルハ事實ヲ認めアルコト分明ナレハ隨テ該偽造印ハ刑法第九十六條第一項ニ所謂產物商品等ニ押用スル官ノ印章ニ相當スヘキハ勿論ナリ故ニ原院カ其認メタル事實ニ對シ前條項ヲ適用處斷シタルハ違法ニアラス其他ノ論旨ハ要スルニ原院ノ職權ニ屬スル事實ノ認定ヲ批難スルニ過キササルヲ以テ上告ハ其理由ナシ

第一回辯明書ノ第一點第五點及ヒ第二回辯明書ノ第一點第四點第七點ハ喋々辯述シアルモ要スルニ上告論旨ヲ詳説敷衍スルニ過キササルヲ以テ重テ説明ヲ與ヘス第一回辯明書ノ第二點原判決事實記載ノ部ニ被告ハ前審ノ相被告人池永伊太郎ト共謀シ大分縣蠶種検査所製絲用種検査ノ證ト刻シタル印判即チ大分縣蠶種検査所ノ印章ニ擬シタルモノヲ偽造セシメタリトアルモ右ノ偽造ニ被告カ共謀シ居ラサルコトハ第一審公廷ニ於テ池永伊太郎カ明言セシ如クナリ然ルニ原院カ之ヲ兩名ノ共謀ナリトセラレタルハ即チ審理不盡ノ判決ナリ同第三點被告カ前審ノ相被告人池永伊太郎ト申合セ注文シタル印ハ末岡奎平ヨリ差出シアル角形ノ印ニシテ検査所ノ印章ニ擬シタルモノニアラス右角形ノ印ハ伊太郎カ大分町印判師ニ知人アリテ注文ニ立越ス際同人ノ望ミニ應ジ金壹圓ヲ渡シタルコトアルヲ以テ承知シ居ルモ別府町印判師ニ注文致シタルコトハ被告ノ知ラサル處ナルヲ以テ後ニ其事ヲ聞キタルヨリ其別府町ニ注文セシ印ハ何様ノ印ナルヤチ伊太郎ニ尋子タルニ検査所ノ印ト同一ナリトノコトニ付該印章ハ入用ナキニ依リ前ニ渡シタル金一圓ノ返付ヲ求メタルニ大分町ニ注文セシ印ハ偽造ニ之ナク印形及ヒ文字等モ遠イ居ルトテ渡シ吳レタルヲ以テ一見セシ處圓形ニシテ大分縣蠶種検査所製絲

用検査ノ證トアリ而シテ大分縣蠶種取締規則蠶種検査規則等ニ押用スル印章ハ階圓形ニシテ縦一寸八歩横一寸文字ハ大分縣某検査所製絲用種検査ノ證トアル印ヲ用ユル成規ニシテ本件ノ印トハ異ナル處アルヲ以テ伊太郎ノ申ス如ク偽造印ニハ之ナクト信シ全ク伊太郎ニ欺カレタル事實ナルニ第一二審共被告兩名申合セ検査所ノ印ヲ偽造シテ使用シ云々ト判示シ恰モ共謀ノ如ク認定シ刑法第四百四條ヲ適用シタルハ不當ナリ同第四點原判決事實記載ノ部ニ後藤京藏ヨリ金二十圓藍澤作太郎ヨリ金十圓二十錢ヲ後藤京藏分ハ内金トシテ受取り藍澤作太郎分ハ賣價ニ相當スル代金トシテ受取り乃チ該金額ヲ騙取シトアルハ不當ナリ何トナレハ被告ヨリ賣渡シタル物品ハ買入ニ於テモ十分其真否ヲ見分シタル上ニテ價格ヲ定メ物品ヲ渡シ金圓ヲ請取りタルモノニシテ決シテ騙取シタルモノニアラス故ニ原院カ騙取罪アリト判定シタルハ不當ナリト云フニアレトモ○被告ハ他ノ一名ト共謀シ大分縣廳ニ於テ蠶種検査ニ押用スル印章ヲ偽造シテ之ヲ使用シ後藤京藏等チ欺罔シ金圓ヲ騙取シタルノ事實ハ原判決中明カニ判示シアルヲ以テ原院カ適用シタル法條ハ何レモ相當ニシテ違法ノ點アルコトナシ要スルニ上告論旨ハ原院ノ職權ニ屬スル事實ノ認定證憑ノ取捨ヲ論難スルニ外ナラスシテ渾テ適法ノ理由ナキモノトス同第六點被告カ所爲ハ大分縣蠶種検査規則及ヒ大分縣蠶絲業組合規約ニ違背セシモノニ過キササルニ刑法ニ則トリ處分シタルハ不法ナリト云フニアレトモ○原院カ認メタル事實ニ依レハ其適用シタル刑法ノ各法條ハ事實ニ相當スヘキモノニシテ農商務省令蠶種検査規則等ノ違反者トシテ處分スヘキモノニアラス因テ原院判決ハ違法ニアラス



第二回辯明書ノ第二點第三點第六點第八點ハ第一回辯明書ノ第二點第三點第四點ノ論旨ヲ反  
覆陳辯シ第二回辯明書ノ第五點ハ第一回辯明書ノ第六點ノ論旨ヲ敷衍スルニ過キサルヲ以テ  
重子テ説明ヲ與ヘス

山浦辯護士擴張書ノ第一點ハ明治十九年八月農商務省令第九號蠶種検査規則第四條ニハ蠶種  
検査所ハ管轄廳ニ於テ管内便宜ノ地ニ之ヲ設置スヘシトアリテ其縣廳ノ一部一課ヲ爲スモノ  
ニアラスシテ其用ニル所ノ検査認印ノ如キモ規則ニ依リ一定ノ定形アルモノニアラス其用ニ  
ル所ハ全ク各府縣共隨意ナリサレハニヤ各府縣ニ於テ用ユル處ヲ異ニスルハ勿論又一縣下ト  
雖トモ其印章多少ノ異ナル處ノモノアリ然レハ本案被告等カ偽造セシト稱スル物ハ果シテ大  
分縣ノ何所ノ検査所ニ於テ用ユルモノニ擬シタルヤ只大分縣ニ於テ蠶種検査ニ使用スル云々  
トアルノミナレハ其大分縣トハ大分縣廳ノ謂ナルカ大分縣下某所ノ謂ナルカ又大分縣某人ノ  
謂ナルカ若シ縣廳ナリト解釋シ得ラルモトモトセハ偽造シ得ラルヘキ答ナク縣下某所又ハ某  
人ナリトセハ何レニシテ又何人ナルヤ其點ノ理由不備ナルカ故ニ得テ之ヲ知ルニ由ナク從テ  
擬律ノ適用ニ差違ヲ生スル重要ナル理由ニ不備アル不法ノ裁判ナリト云フニアレトモ○被告  
等カ大分縣蠶種検査所ノ印章ヲ偽造シタル事實ハ原判文ニ明示スル處ナレハ其事實ハ即チ刑  
法第九十六條ニ該當スルハ勿論ナルヲ以テ上告論旨ノ如キ理由ヲ付スルノ要ナキモノトス  
同第二點原院ノ認メタル事實ニ據ルトキハ被告ハ只偽印ヲ蠶紙ニ押捺シタルニ過キスシテ其  
蠶紙ヲ賣ルニ付検査ヲ經タルモノナリトノ事實ヲ偽リタルモノニアラス又買主ニ於テモ検査

ヲ經タルモノナリト聞キ且信シテ之ヲ買ヒタリト認ムヘキ點ナシ去レハ詐欺ニ因レル賣買ナ  
リトシテ其代金ヲ騙取シタリトハ論斷シ得ヘカラス然ルニ原院カ之ヲ詐欺取財罪ニ問ヒタル  
ハ擬律ノ錯誤ナリト云フニアレトモ○原判文ニ大分縣ニ於テ蠶種検査ニ使用スル大分縣云々  
ト刻シタル印章ニ擬シタル印ヲ偽造セシメ之ヲ被告等カ所持スル無検査ノ蠶紙ニ押捺シ恰モ  
大分縣検査所ノ検査ヲ經タルモノ、如ク作爲シ之ヲ利用シテ金員ヲ騙取シタルノ事實ヲ明示  
シアレハ詐欺取財罪ヲ構成スルハ勿論ニシテ擬律ニ錯誤アルコトナシ  
右ノ理由ニ依リ刑事訴訟法第二百八十五條ニ從ヒ本件上告ハ之ヲ棄却ス  
明治三十一年一月二十日大審院第二刑事部公廷ニ於テ檢事岩田武儀立會宣告ス

○詐欺破産ノ件

明治三十年第一一九九號  
明治三十一年一月二十日宣告

○判決要旨

破産者ノ雇人ナルト否トヲ問ハス苟モ詐欺破産ノ行爲ヲ補助シタル者ハ詐欺  
破産ノ制裁(商法第千五十條)ヲ免ル、ヲ得ス

(參照) 破産ノ宣告ヲ受ケタル債務者カ支拂停止又ハ破産宣告ノ前後ヲ問ハス履行ス  
ル意ナキ義務又ハ履行スル能ハサルコトヲ知リタル義務ヲ負擔シタルトキ又ハ債務  
詐欺破産ノ補助



者ニ損害ヲ被ラシムル意思ヲ以テ貸方財産ノ全部若クハ一部ヲ藏匿シ轉匿シ若クハ脱漏シ又ハ借方現額ヲ過度ニ掲ケ又ハ商業帳簿ヲ毀滅シ藏匿シ若クハ偽造變造シタルトキハ詐欺破産ノ刑ニ處ス(商法第千五十條)

第一審 大分地方裁判所 第二審 長崎控訴院  
被告人 矢頭秀太

右詐欺破産被告事件ニ付明治三十年十一月二十五日長崎控訴院ニ於テ原判決ヲ取消シ更ニ被告ヲ重禁錮四年ニ處シタル判決ニ對シ被告ヨリ上告ヲ爲シ原院檢察長大島貞敏ハ答辯書ヲ差出シタルニ依リ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ  
上告趣意ヲ要スルニ第一ハ原院ニ於テ被告ノ犯罪行為ナリト認メラレタル事實ニ付有無ノ訊問ヲ爲サス又々證據ノ取調ヲ爲サスシテ直チニ有罪ノ言渡ヲ爲シタルハ不法ナリト云フニ在レトモ○原院公廷ニ於テ本按ノ事實ハ總テ之ヲ審問シ押収ノ書類一切ヲ示シテ辯解セシメ記録ニ付テハ被告ニ於テ則讀ノ必要ナシト云フヲ以テ當署シタル事跡公判始末書ニ依リ明瞭ナレハ論旨ノ如キ違法ナシ』第二ハ原院ニ於テ被告ヨリ利益ノ證據ヲ提出シ供述中發言ヲ停止シ送ニ利益ノ證據ヲ舉クルコトヲ得サラシメタルハ違法ナリト云フニ在レトモ○原院公判始末書ヲ查スルニ一モ所論ノ如キ違法ノ影跡ノ見ルヘキモノナケレハ本論旨モ相立タス』第三被告及相被告ノ供述ノミヲ採リテ證據ト爲シタルハ證據ノ明示ヲ欠キ且刑事訴訟法第二百三十九條ニ背戾シタル裁判ナリト云フニアレトモ○刑事訴訟法第二百三十九條ハ被告人其罪ヲ自白シタ

ルトキト雖トモ仍證據ヲ取調フヘシト云フニ止リ自白ノミヲ證據ト爲スヘカラサルノ禁令ニ非サルノミナラス相被告ノ供述ハ自白ニ非サルヲ以テ原判決ノ探證ハ違法ナリトセス其他ノ論旨ハ原院ノ職權ニ屬スル探證ノ當否ヲ論難スルモノニシテ上告ノ理由ナシ』第四ハ本件ノ業務ハ恰モ富藏又ハ頼母子講ノ如キ一種異様ノ營業ニシテ商業ニ非ス既ニ商業ニアラストスレハ商法ノ制裁ヲ受クヘキモノニ非サルハ勿論ナルニ原院カ商法ノ規定ヲ適用シタルハ法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シタル不法ノ判決ナリト云フニ在レトモ○原判決ノ事實ニ依レハ丸吉銀行ノ行為ハ商事ニ屬スルコト明瞭ナルヲ以テ被告カ商法ノ制裁ヲ受クルハ當然ナリ』第五ハ原判決ニ依レハ短期ノ方法ニ付キテハ合金八圓ヲ加入者ヨリ領取シトアレトモ其實ハ拾壹圓預ルヘキ計算ニシテ理由ノ錯誤アル判決ナリト云フニ在レトモ○要スルニ原院ノ職權ニ屬スル事實ノ認定ヲ論難スルモノニシテ上告ノ理由ナシ』第六ハ本件ニ付テハ明治三十年十一月十八日ニ辯論終結シ同月二十五日ニ判決ノ言渡ヲ爲シタルハ刑事訴訟法第二百四條ニ違反シタル不法ノ判決ナリト云フニ在レトモ○右法條ハ訓示法ニ過キササルヲ以テ次ノ開廷日ニ言渡ヲ爲サハルモ判決ヲ違法ナリトセス』第七ハ原判決ノ前段ニハ被告ヲ以テ會社ノ業務經營員カ會社ノ爲メ業務ヲ執行シタル者ノ如ク認定シ後段ニハ第三者トシテ有罪行為ヲ助ケタル者ノ如ク認定シタルハ理由ノ齟齬ナリト云フニ在レトモ○原判決ニ「丸吉銀行ヲ設立シ其次耶ヲ營業主トナシ同人ノ名義ヲ以テ其筋ノ許可ヲ受ケ被告及七郎ハ其重役トナリトアリテ右銀行ヲ以テ會社ト認メタルニ非スシテ吉次郎一己ノ營業ナレハ詐欺破産ヲ爲シタル者ハ同



人ニシテ被告ハ其犯罪行為ヲ助ケル者ニ外ナラス故ニ原判決ニ被告ハ營業者稻光吉次郎カ有罪行為ヲ助ケタルモノト認メタルハ相當ニシテ理由ニ於テ齟齬スル所ナシ第八ハ原判決ノ法律理由ニ第五十二條トノミアリテ其前後段何レニ依リタルヤ之ヲ明示セサルハ不法ナリト云フニ在レト

○原判決ノ事實理由ニ被告カ營業主ニ非スシテ詐欺破産ノ行為ヲ幫助シタル事實ヲ明示シアレハ法律適用ノ部ニ商法第五十二條ト掲擧シアルハ其後段ナル「明瞭ニシテ理由ノ不備ナシトス」第九ハ丸吉銀行ハ吉次郎一己ノ設立ニ係リ被告ハ同人ノ命令ノ下ニ執務スル器械的ノ雇人ナルニ原院カ本件ニ付被告ニ有罪ノ宣告ヲ爲シタルハ不法ナリト云フニ在レト

○破産者ハ雇人ナルト否ヲ問ハス苟モ詐欺破産ノ行為ヲ幫助シタル者ハ商法第五十條ハ制裁ヲ受ケハキモハナルヲ以テ原院カ被告ニ對シ有罪ハ宣告ヲ爲シタルハ相當ニシテ上告ハ其理由ナシ

右ノ理由ナルヲ以テ刑事訴訟法第二百八十五條ニ依リ本按上告ハ之ヲ棄却ス

明治三十一年一月二十日大審院第二刑事部公廷ニ於テ檢事安居修藏立會宣告ス

○竊盜ノ件

明治三十年第一二二八號  
明治三十一年一月二十一日宣告

○判決要旨

被告人ノ住所氏名不詳ナルモ人相特徴ニ依リ其誰タルコトヲ知リ得ヘキトキハ適法ナル公訴ヲ提起スルコトヲ得ヘシ而シテ此場合ニ於テ通常ノ送達ヲ爲スコト能ハサルトキハ公示送達ヲ爲スヘキモノトス

第一審 徳島地方裁判所脇町支部 第二審 大阪控訴院  
被告人 男 一人

右ニ對スル竊盜被告事件ニ付明治三十年十二月二日大阪控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ服セス同院檢事長林誠一ヨリ上告ヲ爲シタルニ依リ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ審理スル左ノ如シ

檢事長林誠一上告趣意ハ

- 一、大阪控訴院ニ於テ言渡シタル判決ハ被告人ノ誰ナルコト不詳ナル者ト被告人ノ誰ナルコト不明ニシテ只タ被告人ノ氏名不詳ナル者ト同一視シタル不法ノ判決ナリ
- 一、本件被告人ハ氏名ヲ幸田判太郎ト詐稱シ梯彌三郎方ニ被雇中同雇人ノ物品ヲ盜取リ逃走シタルモノナレハ被告人ノ誰レタルコト判明ナル者ナリ
- 一、本件公判請求書ニハ住所氏名不詳男一人本紙裏面記載ノ通トアリテ其裏面末尾欄内ニ本年

氏名不詳被告人ノ起訴



六月九日美馬郡西口山村幸田判太郎ト稱シ麻植郡山崎村柳彌三郎方ニ孫キ奉公ニ住込ミタル者ニシテ其入相ハ記録第六葉第十二葉通トアレハ被告人ノ人相及被告人ハ幸田判太郎ト稱シ居タルコトヲ表示シ其者ニ對シ起訴シタルモノタルコト明ナリ

一、前辯明ノ通リ本件ハ被告人誰タルコト明ナレハ假令住所不明ナルモ公示ノ方法ヲ以テ呼出シ得可キ者ナルニ大阪控訴院ニ於テハ呼出狀ヲ發スルニ由ナキモノニ付適法ノ起訴ニアラストシ公訴不受理ノ判決シタルハ法律ニ背キ公訴ヲ受理セサル不法ノ判決ト思料ス依テ原判決破毀相成度候也ト云フニ在リ

○依テ記録ヲ査閱シ密按スルニ上告趣旨ノ如ク被告人ハ誰ナルコト詳カナラサル場合ト被告人ノ誰タルコトヲ知ルモ其住所氏名等ハ詳ナラサル場合トハ判然區別セサルヘカラス本件起訴狀ヲ見ルニ被告人ハ住所氏名不詳トアルモ其裏面ニ被告人ニ特別ノ事實ヲ記載シアルハミナラズ人相書ヲ添ヘアレハ被告人ハ誰タルヲ知ラサル場合ニアラサルコト明カナリ然ルニ原院ハ呼出狀ヲ發付スルニ由ナキモノニ付適法ニ起訴ノ手續ヲ履行セシモノト認ムルコトヲ得ストハ理由ニ基キ本件ニ對シ公訴不受理ハ判決ヲ爲シタルハ不法ナリ若シ通常ノ送達ヲ爲スコト能ハスハ公示送達法アリ要スルニ原院ハ被告人ノ住所氏名ノ知レサル場合ト其誰タルヲ知ル能ハサル場合トヲ同一視シタル誤謬アルノミナラス通常ノ手續ニ依リ呼出狀ヲ送達スルコト能ハサリシトテ直チニ適法ノ起訴ナシトセシカ如キハ甚々シキ法則ノ誤解ト云フヘシ

右ノ理由ニ依リ刑事訴訟法第二百八十六條ノ規定ニ從ヒ判決スル左ノ如シ

原判決ヲ破毀シ更ニ審判セシムル爲メ本件ヲ名古屋控訴院ヘ移送ス  
 明治三十一年一月二十一日大審院第一刑事部公廷ニ於テ檢事藤堂融立會宣告ス

○郵便條例違反ノ件

明治三十年第二二號  
 明治三十一年一月廿一日宣告

○判決要旨

郵便條例第二百三十四條ニ所謂之ヲ受取人ニアラサル者ニ交付シトアルハ受取人ニ交付セサル意思ヲ以テ第三者ニ交付シタル場合ヲ云フ

(參照) 已ニ屬セサル郵便物ヲ開封シ或ハ毀損汚穢シ或ハ私用賣却抑留隱匿拋棄シ若クハ之ヲ受取人ニアラサル者ニ交付シ及其情ヲ知テ之ヲ受ケ又ハ寄藏故買シ若クハ牙保ヲ爲シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス(郵便條例第二百三十四條第一項)

郵便集配人ニシテ郵便物ヲ自ラ配達セス他人ニ委託シテ送致シタル所爲ハ法律上罪トナラス

原審 松山地方裁判所宇和島支部

郵便物ノ交付○配達ノ委託



被告人 黒田喜市 木下久吉

右喜市カ郵便條例違犯被告事件ニ付明治三十年五月二十一日松山地方裁判所宇和島支部ニ於テ審理ノ末被告ヲ有罪ト認メ重禁錮二月罰金三圓ニ處ス云々ト言渡シタル裁判確定ノ後檢察總長春木義彰ハ非常上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ審判スルコト左ノ如シ

非常上告ノ要旨ハ原裁判所ニ於テ言渡シタル裁判ハ明治二十三年六月二十八日日本院ニ於テ被告坂本吉太郎ノ上告事件ノ裁判ニ照セハ法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑ノ言渡ヲ爲シタルモノト思考スト云フニ在リ○因テ原裁判ヲ査閱スルニ其認定シタル事實ハ被告ハ愛媛縣北宇和郡畑地村大字上畑地郵便局郵便集配人ニシテ明治二十九年十月中旬ヨリ明治三十年三月二十六日迄ノ間ニ於テ數回ニ郵便局ヨリ配達ノ爲メ受取タル郵便端書數葉ヲ配達セス他人ニ其送致方ヲ委託シタリト云フニ在リテ此所爲ニ對シ郵便條例第二百三十四條刑法第百條ヲ適用シアリ然レトモ郵便條例第二百三十四條ニ已レニ屬セサル郵便物ヲ(申啓)受取人ニアラザル者ニ交付シトアルハ受取人ニ交付セサル意思ヲ以テ第三者ニ交付シタルモノハ制裁スルハ律意ニシテ本件ハ如ク受取人ニ交付スル意思ヲ以テ第三者ニ送致方ヲ委託シタルニ止マルモノハ同條ノ違背ヲ以テ論スルコトヲ得サルハミナラス法律上此ノ如キ所爲ヲ罰スル正條ナシ乃チ原裁判ハ法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シタル違法アルモノニシテ非常上告ハ其理

由アリトス已ニ被告喜市ノ所爲ニシテ罰スヘカラサルモノタル上ハ原裁判カ被告喜市ノ委託ヲ受ケテ端書ヲ受取リ更ニ他人ニ托シテ送致ヲ爲サシメタリト認定シタル共同被告人木下久吉ノ所爲モ亦法律上罰スヘキ正條ナキモノナレハ被告喜市ニ對スル原裁判破毀ノ利益ハ被告久吉ニ及ホスヘキモノトス  
右ノ理由ナルヲ以テ刑事訴訟法第二百九十二條第二項第二百八十九條第二項ニ則リ原裁判ノ全部ヲ破毀シ本院ニ於テ直チニ判決スルコト左ノ如シ

右

黒田喜市 木下久吉

原裁判ノ認メタル被告喜市カ郵便端書數葉ヲ自ら配達セシメ他人ニ其送致方ヲ委託シ又被告久吉カ被告喜市ノ委託ヲ受ケ右端書ヲ他人ニ托シ送致セシメタル所爲ハ共ニ法律上罪ト爲ラサルヲ以テ刑事訴訟法第二百二十四條ニ從ヒ無罪

明治三十一年一月二十一日大審院第一刑事部公延ニ於テ檢事藤堂融立會宣告ス



○毆打創傷附帶私訴ノ件

明治三十年第一一八八號  
明治三十一年一月廿四日宣告

○判決要旨

公訴私訴ハ相牽聯スヘキモノナルヲ以テ私訴判決ノ理由ヲ畧記シテ公訴判決ニ讓ルモ不法ニアラス

第一審 水戸地方裁判所土浦支部 第二審 東京控訴院

私訴 上告人 吉田權平 代理人 吉田七之丞

私訴被上告人 渡邊長左衛門

右當事者間ノ毆打創傷事件附帶ノ私訴ニ付キ明治三十年十一月二十七日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不當トシ權平代理七之丞ヨリ上告ヲ爲シタルニ因リ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ審判スルコト左ノ如シ

上告趣意ハ凡裁判ニハ其理由ヲ明示セサルヘカラサルモノナルニ原院ハ本件私訴判決ニ付キ被告人カ民事原告人ヲ傷ケタルハ民事原告人ヨリ暴行ヲ受ケタルニ當リ自己ノ身體生命ヲ正當ニ防衛シ止テ得サルニ出タルモノニシテ其事實ハ公訴判決ニ於テ認メタル如クナレハ云々ト説明シ直ニ民事原告人タル上告人ニ對シ控訴棄却ノ言渡ヲ爲シタルトモ公訴ノ判決ハ民事原告人ノ與リ知ラサル所ナレハ之ヲ以テ私訴判決ノ理由ト爲スヲ得ス即原判決ハ理由ヲ欠キタル不法アルモノナリト云フニ在レトモ○公訴ト之ニ附帶セル私訴トハ固ヨリ牽聯セルモノ

ナレハ私訴ノ判決ニ付キ其理由ヲ畧記シテ之ヲ公訴判決ノ理由ニ讓リタルモ判決ハ理由ハ明瞭ナルヲ以テ理由ヲ付セサル不法アリトセス

以上ノ理由ナルニ依リ刑事訴訟法第二百八十五條ニ從ヒ本件上告ハ之ヲ棄却ス  
上告費用ハ上告人ノ負擔トス

明治三十一年一月二十四日大審院第二刑事部公廷ニ於テ檢事藤堂融立會宣告ス

○官林冒認附帶私訴ノ件

明治三十年第一一三七號  
明治三十一年一月二十五日宣告

○判決要旨

再度ノ闕席判決ニ對シ故障ノ申立ヲ許サ、ル法則刑事訴訟法第二百三十三條第二項ハ故障ノ申立ヲ受理シ更ニ通常ノ規定ニ從ヒ裁判ヲ爲スヘキ場合ニ於テ未ダ本案ノ辯論ヲ開始セサル前故障申立人ノ闕席シタルトキニ限ル

(參照) 故障ノ申立ヲ受理シタル場合ニ於テハ更ニ通常ノ規定ニ從ヒ裁判ヲ爲スヘシ

再度ノ闕席判決



前項ノ場合ニ於テ故障申立人開席シタルトキハ更ニ故障ヲ申立レコトヲ得ス(刑事訴訟法第百三十三條)

第一審 福島地方裁判所平支部 第二審 宮城控訴院

私訴上告人 鈴木 馨 代理人 村松 山壽

私訴被上告人

松本 文内  
平賀 定之  
志賀 芳太郎  
菅野 宗貞  
石田 宗貞

右當事者間ノ公訴附帶損害要償私訴事件ニ付明治三十年十一月二十日宮城控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ服セス右林務官鈴木馨ヨリ上告ヲ爲シタルニ依リ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ審理スル左ノ如シ

上告代理人村松山壽ノ上告趣意第四點ハ原判決ハ而シテ本件故障ハ公訴ノ附帶損害要償私訴事件ニ付(中略)然レトモ刑事訴訟法第二百三十三條第二項ノ規定ニ依リ之カ故障ノ申立ヲ爲スコトヲ得サルモノトスレト判定セラレタルハ法律違背ノ裁判ナリトス蓋シ本件事實ノ如キ場合ニ於テ刑事訴訟法第二百二十六條ニ從ヒ當然故障ヲナシ得ヘシト上告ヲ失當ノ解釋ナリトシ私訴ノ場合ニ於テハ亦原院ノ認ムル如ク同法第二百三十三條第二項ヲ適用シ得ヘシトスルモ同條ノ法意ハ本件ノ如キ前開席判決ニ對シ故障ヲナシ之ヲ受理シタル上本案ノ辯論ヲナシ其後再度ノ開席ヲナシタル場合ニ適用スヘキモノニアラサルニ原院ノ如ク判決アリタルハ不

當ノ裁判ナリト信スト云フニ在リ○依テ按スルニ刑事訴訟法第二百三十三條第二項ニ前項ノ場合ニ於テ故障申立人開席シタルトキハ云々トアルハ故障ハ申立ヲ受理シ更ニ通常ノ規定ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可キ場合ニ於テ未タ本案ノ辯論ヲ開始セサル前故障申立人開席シタルトキハ即チ其再度ノ開席判決ニ對シ故障ヲ申立ルコトヲ許サハ法意ナルコトハ本論旨所論ハ如シ本件記録ヲ閱スルニ明治三十年四月十三日ノ開席判決ニ對シ同月十五日上告人ヨリ故障ノ申立ヲ爲シ明治三十年五月十一日ニ於テ本按ノ辯論ヲ爲シ終結ニ至ラスシテ上告人ノ申立ニ依リ辯論ヲ中止シ更ニ明治三十年七月八日ニ指定シタル辯論期日ニ於テ上告人開席シタルヨリ同日開席判決ヲ爲シタル事實ナレハ此開席判決ニ對シテ故障申立アリタル通常ノ規定ニ從ヒ審判ヲ爲ス可ク刑事訴訟法第二百三十三條第二項ヲ適用スヘキ場合ニアラス然ルニ原院ハ同項ノ規定ヲ適用シテ上告人ノ故障ヲ棄却シタルハ不法ニシテ全部破毀ヲ免レサルモノトス既ニ此點ニ於テ原院ノ判決全部破毀スハキモノト認ムル以上ハ他ノ上告論旨ハ説明スルノ要ナシ而シテ上告人ノ故障ハ受理スヘキモノニシテ之ヲ棄却シタルハ不法ナリトシテ原判決ヲ破毀スル以上ハ原院ハ刑事訴訟法第二百三十三條第一項ノ規定ニ從ヒ審判スヘキハ當然ナリトス

右ノ理由ニ依リ判決スル左ノ如シ

原判決ノ全部ヲ破毀シ更ニ審判セシムル爲メ本件ヲ宮城控訴院ニ差戻ス

明治三十一年一月二十五日大審院第一刑事部公廷ニ於テ檢事藤堂融立會宣告ス



○詐欺取財ノ件

明治三十年第一二二三號  
明治三十一年一月二十五日宣告

○判決要旨

當初ヨリ騙取ノ意思ヲ以テ賣買契約ヲ締結シ物件ノ交付ヲ受タル後詐言ヲ構  
ヘテ代金ヲ支拂ハサル所爲ハ詐欺取財罪ヲ構成ス

第一審 大阪地方裁判所 第二審 大阪控訴院

被告人 上田榮次郎  
野垣楠之助

右詐欺取財被告事件ニ付明治三十年十二月八日大阪控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ同院  
檢察長ハ上告ヲ爲シタリ

大審院ニ於テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ審判スルコト左ノ如シ  
上告趣旨ハ原判決ノ事實理由ニ殘餘ノ余地ヲモ代金不拂ノ意思ニテ引取ラント欲シ云々ト揭  
ケ以テ當初ヨリ代價ヲ支拂フ意思ナキ事ヲ認メ其次ニ榮次郎ノ代理資格ニテ運送聯合店ニア  
ル木管木地買取り度旨虛偽ノ申込ヲ爲サシメ云々ト掲ケ以テ虛偽ノ申込ヲ爲シタル事ヲ認メ

其末ニ木管木地ハ十六捆ノ交付ヲ受ケタル後被告兩名ハ交々所在ヲ晦マシタル事ヲ認メナカ  
ラ畢竟惡意ヲ以テ物品ヲ賣買シタル後詐術ヲ用ヒテ代金ノ支拂ヲ免カレントシタルニ過キス  
シテ眞實ノ賣買ナリト信セシメタル欺罔ノ手段ナキモノトシ詐欺取財ヲ構成セスト判決シタ  
ルハ理由ノ顯赫ナリト云フニ在リ○因テ原判決文ヲ查閱スルニ原院ノ認メタル事實ニ依レハ被  
告榮次郎ハ渡邊八代吉カ榮次郎ノ注文ニ應シ木管木地百六十捆ヲ大阪市湊町停車場構内荷物  
運送聯合店ニ送り越シタルヨリ内二十捆ヲ買取りタル後殘餘ハ木地ヲモ代金不拂ノ意思ニテ  
引取ラント欲シ被告楠之助ハ被告榮次郎ノ代理資格ニテ八代吉ニ對シ運送聯合店ニアル  
木地ヲ買取り度旨虛偽ノ申込ヲ爲サシメカ名ヲ賣買ニ籍リ内金トシテ四十五圓ヲ八代吉ニ  
渡シタル後右殘餘ハ木管木地八十六捆ヲ被告榮次郎ノ納屋ニ運入レ殘代金百五圓ハ即時支拂  
フ可キ管ナルニ被告榮次郎ハ八代吉ノ督促ニ對シ詐言ヲ構ヘ被告楠之助ハ踪跡ヲ晦マシタリ  
トハ理由明瞭ナレハ即被告等ハ始ヨリ木管木地八十六捆ヲ騙取スルノ惡意ニ出テ虛偽ノ賣買  
契約ヲ以テ八代吉ヲ欺罔シ遂ニ之ヲ騙取シタルモノナリ故ニ其所爲詐欺取財ヲ構成ス可キコ  
ト勿論ナレハ原判決ハ擬律ノ錯誤ナリトス  
右ノ理由ナルヲ以テ刑事訴訟法第二百八十七條ニ依リ原判決ノ擬律ヲ破毀シ直チニ判決スル  
コト左ノ如シ



風流ノ器メタル事實ニ依レハ被告兩名ノ所爲ハ刑法第三百九十六條第一項第三百九十四條ニ  
 依リ處分ス可キモノトス因テ各重禁錮五月ニ處シ罰金拾圓ヲ附加シ監視六月ニ付ス押收ノ證  
 據書類ハ刑事訴訟法第二百二條ニ依リ差出人ニ還付ス  
 明治三十一年一月二十五日大審院第一刑事部公廷ニ於テ檢察官若田武藏立會宣告ス

○詐欺取財ノ件

明治三十一年第六號  
明治三十一年一月廿五日宣告

○判決要旨

郵便局ノ雇員不足税未納税ノ郵便物アルニ當リ郵便切手ヲ貼付セシメテ其金  
 額ヲ騙取シタル所爲ハ詐欺取財罪ヲ構成ス若シ其不足税未納税ヲ徵收シタル  
 後惡意ヲ生シ費消シタルトキハ委託金費消罪又ハ監守盜罪ヲ構成ス

第一審 大津地方裁判所 藤井外造  
 被告 人 藤井外造  
 第二審 大阪控訴院

右詐欺取財郵便條例違反被告事件ニ付明治三十年十一月三十日大阪控訴院ニ於テ言渡シタル  
 判決ニ對シ同院檢察長ハ上告ヲ爲シタリ

大審院ニ於テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ審判スルコト左ノ如シ

上告趣旨後段ノ論旨ハ本件各郵便物受取人ハ相當印紙ヲ貼用シ消印ヲ爲シメルモノヲ受取リ  
 初メテ納税ヲ爲ス可キ手續ヲ知ラサルヲ奇貨トシ被告ハ無印紙ノ儘不足税未納税ト詐リ其金  
 額ヲ騙取シタルモノニシテ右受取人等ハ國家ニ對シテハ尙ホ納税ノ義務ヲ有スルモノナレハ  
 被告ノ此所爲ハ詐欺取財ナルコト論テ俟タス況テ原判決ノ認ムル所ニ據ルモ被告ハ其徵收シ  
 タル金圓ヲ擅ニ自己ノ用ニ費消シタルモノナレハ委託金費消ノ行爲アルコト明ナルニ原院カ  
 法律ニ正條ナシトノ理由ヲ以テ無罪ノ言渡ヲ爲シタルハ擬律錯誤ナリト云フニ在リ○因テ原  
 判文ヲ査閱スルニ被告ノ所爲ハ被告カ雇員トナリ郵便事務ヲ擔任シ居タル滋賀縣東淺井郡速  
 水村三等郵便局ニ於テハ不足税未納税ニ相當スル切手ヲ貼付セサル前ニ試配達ヲ爲シ宛名人  
 カ其郵便物ヲ受取ルコトヲ承諾スルトキ其不足税未納税金ヲ徵收シタル上郵便局ニ於テ其郵  
 便物ノ封皮等ニ相當郵便切手ヲ貼付シ更ニ配達スル慣行ナルヨリ被告ハ其慣行ヲ利用シ受取  
 人ヲ欺罔シテ金員ヲ騙取スルノ目的ヲ以テ試配達ヲ爲シ不足税未納税ヲ徵收スルト欺罔シ其  
 金員ヲ騙取シタルトハ事實ナレハ詐欺取財ノ罪ヲ構成ス可ク若シ然ラズシテ試配達ヲ爲シ其  
 未納税不足税ヲ徵收シタル後惡意ヲ生シ其金員ヲ費消シタルトハ事實ナレハ委託物費消又ハ  
 監守盜ノ罪ヲ構成ス可シト雖モ原判文ハ右等ノ事實理由ヲ明示シテ被告ヲ以テ擬律ノ如何  
 ナ斷定スルルニ由ナシ故ニ原判決ハ此點ニ付破毀テ免カレサレモトス故ニ其他ノ論旨ニ付  
 テハ説明スルノ要ナシ



右ノ理由ナルヲ以テ刑事訴訟法第二百八十六條ニ依リ原判決ヲ破毀シ本件ヲ名古屋控訴院ニ移ス

明治三十一年一月二十五日大審院第一刑事部公庭ニ於テ檢事岩田武儀立會宣告ス

○私印盗用等ノ件

明治三十年第一一七一號  
明治三十一年一月二十八日宣告

○判決要旨

詐欺取財事件ニ付共犯者ノ一人被害者ト親屬ノ關係ヲ有スル爲メ不論罪トナルモ他ノ共犯者ハ其責ヲ免カル、ヲ得ス

(参照) 此節(第五節詐欺取財ノ罪及受寄財物ニ關スル罪)ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者第三百七十七條ニ掲ケタル親屬ニ係ルトキハ其罪ヲ論セス(刑法第三百九十八條) 祖父母父母夫妻子孫及ヒ其配偶者又ハ同居ノ兄弟姉妹互ニ其財産ヲ竊取シタル者ハ竊盜ヲ以テ論スルノ限ニアラス若シ他人共ニ犯シテ財物ヲ分テタル者ハ竊盜ヲ以テ

論ス(刑法第三百七十七條)

第一審 松山地方裁判所

第二審 廣島控訴院

被告人 片山光藏

右私印盗用私書偽造行使詐欺取財未遂被告事件ニ付明治三十年十一月二十六日廣島控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ被告ハ上告ヲ爲シタリ

大審院ニ於テ刑事訴訟法第三百八十三條ノ定式ヲ履行シ審判スルコト左ノ如シ

上告趣旨ノ第一點ハ本案ノ追認證書ハ被告カ認メタルモノニアラス被告ハ同氏名ノ者カ認メタルモノナレハ其筆跡及ヒ印影ノ鑑定ハ缺ク可カラサルモノナルニ單ニ民事訴訟記録ニ在ル寫ヲ以テ被告カ偽造シタリト認メタルハ不法ナリト云ヒ第二點ハ追認證書ノ日付ハ豫審終結決定及ヒ檢事ノ諭告等ニ依ルモ明治二十六年舊四月七日ナルニ原院ニ於テ明治二十六年新曆四月七日ト認メタルハ不法ナリト云フニ在レトモ要スルニ原承審官ノ職權ニ存スル事實ノ認定ヲ非難スルニ過キサレハ上告ノ理由トナル可キモノニアラス

同第三點相被告タリシ藤太郎ノ所爲ハ其實母ニ對シ詐欺取財ヲ行ヒタルモノナレハ刑法上其罪ヲ論ス可キモノニアラス隨テ假ニ被告ヲ共犯ト看做スモ被告ノ罪モ亦問テ可カラサルモノナリ何トナレハ則共犯者相互ノ惡意相合シテ一罪ヲ組成スルモノナレハ其中テ欠キタルトキハ一罪ヲ組成セサルコト言テ俟タサレハナリ且藤太郎ノ所爲ハ實母即チ親屬ニ對シ詐欺取財ヲ行ヒタルモノナレハ共共ニ犯シタル被告ハ未タ財物ヲ分テサルニ付罪ヲ問テ可ヘキモノニ



アラスト云フニ在レトモ ○本案詐欺取財ノ所爲ハ、應太郎ハ被害者リ、エニ對シ、母子ノ關係アル  
 以テ、應太郎ノ所爲ハ之ヲ論ス可キモ、ハニアラストスルモ、之カ爲メ、其共ニ犯セシ他人タル被  
 告ハ所爲ヲ論セサルハ理ナシ、且刑法第三百七十七條ニ若シ他人共ニ犯シテ財物ヲ分チタル物  
 ハ云々トアル規定ハ竊盜罪ニノミ適用ス可キモノニシテ詐欺取財ニ適用ス可キモノニアラス  
 故ニ被告ノ所爲ハ財物ヲ分チタルト否トニ拘ハラズ之ヲ問フ可キモノナルニ付原判決ハ不法  
 ニアラサルナリ

辯明書ノ第一點ハ、應太郎ヨリ、エノ印影ヲ押捺セシ白紙ヲ以テ證書ノ偽造ヲ被告ニ依頼シタ  
 ルニ付被告ハリ、エノ書ヲ被ムラシコトヲ恐レ、印影捺捺ノ白紙ヲ破毀セシカ爲メ、故ラニ無効ノ  
 文書ヲ記シ、且被告ノ惡意ニアラサルコトヲ示サンカ爲メ、故ラニ脱文誤文等ヲ爲シ、云々、應  
 太郎ヨリ、金二十圓ノ報酬ヲ贈リ、タレトモ被告ハ固辭シテ受ケス止ムヲ得、預リ證書ヲ渡シテ  
 之ヲ預リ、タリ又、應太郎ヨリ、金二百圓ノ證書ヲ贈リ、タレトモ被告ハ之ヲ返戻シ、タリ云々ト云ヒレ  
 第二點ハ、要スルニ被告ノ所爲ハ罪ヲ犯スノ意思ナシト云フニ在レトモ ○右ノ論旨ハ、總テ原承  
 審官ノ職權ニ存スル事實ノ認定ヲ非難スルニ過キサレハ、上告ノ理由トナル可キモノニアラス  
 同第三點ハ、第一二審ニ於テ、證人喚問ノ申請ヲ爲シタルニ之ヲ採用セサルハ、違法ナリト云フニ  
 在レトモ ○假リニ右申請ヲ爲シタルモノトスルモ、其必要ナルヤ否ヤヲ判斷シテ之ヲ許否スル  
 ハ、承審官ノ職權ニ在ルヲ以テ本論旨ハ到底相立タサルモノトス  
 同第四點ハ、本案ノ偽造證書ハ無効無害ノモノナレハ、罪トナラズト云フニ在レトモ ○原院ハ有

審ノモノト認メ、タリ要スルニ是亦原承審官ノ職權ニ屬スル事實ノ認定ヲ非難スルニ過キサレ  
 ハ、上告ノ理由トナル可キモノニアラス

右ノ理由ナルヲ以テ、刑事訴訟法第二百八十五條ニ依リ、本案ノ上告ハ之ヲ棄却ス  
 明治三十一年一月二十八日大審院第一刑事部公庭ニ於テ、檢事藤堂融立會宣告ス

○私書偽造等詐欺取財ノ件

明治三十年第一一七六號  
 明治三十一年一月二十八日宣告

○判決要旨

一部ノ偽造ニ係ル證書ニ對シ、全部ノ沒收ヲ言渡シタル裁判ハ、擬律錯誤ノ不法  
 アリ

第一審 仙臺地方裁判所 第二審 宮城控訴院

公訴私訴上告人 戸板 睦文 辯護人 關 幸太郎

公訴上告人 及川喜惣右衛門

私訴被上告人 及川芳藏

偽造證書ノ一部沒收



右嗟文ニ對スル私書偽造并ニ變造行使詐欺取財被告事件及ヒ嗟文、喜惣右衛門ニ對スル私印盜用私書偽造行使被告事件ニ付明治三十年十一月十八日宮城控訴院ニ於テ管渡シタル公訴私訴ノ判決ヲ不法トシ嗟文ハ公訴私訴ニ對シ喜惣右衛門ハ公訴ニ對シ上告ヲ爲シ原判決ノ破毀ヲ要求シ原院檢事ハ答辯書ヲ差出シタルモ民事原告人ハ答辯書ヲ差出サス

大審院ニ於テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ審判スルコト左ノ如シ  
被告嗟文カ上告趣意第一點原院ハ借用證文及ヒ約定證文ヲ偽造ナリトシ被告ニ有罪ヲ言渡スニ當リ被告カ其偽造ニアラストシテ列舉シタル反證ニ對シ一言ノ判斷ヲ付セサルハ理由不備ノ判決ナリト信スト云フニ在レトモ○判決ニハ其認メタル事實ノ理由及ヒ其之ヲ處分スル法律ノ理由ヲ明示スルコトヲ要スルモ被告提出ノ證據カ反證トナラサルノ理由ヲ付スルコトヲ要セサルナリ故ニ原判決ハ理由ノ不備アルニアラス同第二點及ヒ被告喜惣右衛門カ上告趣意第一點ハ原判決第三ノ理由ニ「同月中居村役場ニ於テ云々證書ヲ作ルニ付一時芳藏ノ印類ヲ預リタル際之ヲ盜捺シ云々」トアルハ被告ノ尋モ覺ヘナキ事實ナル事ハ一件記錄ニ明瞭ナルニ架空ニ事實ヲ誣キ以テ犯罪ヲ認メタルハ不法ナリト云フニ在リテ○原院ハ其判決ニ列記セル證據ニ據リ事實ヲ認定シタルニ在レハ架空ニ犯罪ヲ認メタルニアラス要スルニ本論旨ハ事實認定ノ非難ニ外ナラスシテ上告ノ理由ナシ同第三點及ヒ被告喜惣右衛門カ第二點ハ原判決第三ノ事實ハ被告喜惣右衛門ノ名義ヲ以テ及川榮左衛門ニ差入レタル小作證書ニ芳藏カ保證人ニ爲リタルニ過キス假リニ其保證人ノ名印ハ偽造ナリトスルモ其他ハ總テ真正ノ成立ナリ故ニ

芳藏ノ保證タル名印ヲ偽造物トセハ其部分ヲ滅却セシムルハ格別其全部ヲ沒収セラレ、理由ナシ然ルニ原院カ刑法第四十三條第一號同第四十四條ヲ適用シ右小作證書沒収ノ言渡ヲ爲シタルハ不法ナリト云フニ在リ○依テ查スルニ原判決第三ノ事實ハ被告喜惣右衛門カ及川榮左衛門ニ小作證書ヲ差入ルハ際シ被告嗟文ハ其小作證書ニ及川芳藏ノ氏名ヲ記入シテ保證人ト爲シ芳藏ノ印ヲ盜捺シタルハ上喜惣右衛門ハ之ヲ榮左衛門ニ交付シタリトハ事實ナルハ其保證人ハ署名捺印ハ偽造ナルモ其他ハ真正ノ成立ニシテ喜惣右衛門カ榮左衛門ニ對スル小作義務ノ證書タルヲ失ハス然レハ刑法第四十三條第一號同第四十四條ニ照シ其偽造ノ部分ヲ沒収スヘキニ原判決カ保證契約ノ部分ニ止メス小作證書全部ノ沒收ヲ言渡シタルハ擬律錯誤ハ不法アルモノニシテ本論旨ハ理由アリトス

被告嗟文カ擴張辯明書ノ要旨第一ハ原院カ告訴人及川芳藏ノ證言ハ被告類文ヲ陷害シタル偽證ノ證據明カナルニ拘ハラス悉ク之ヲ採用シ被告利益ノ申請ハ悉ク之ヲ却ケテ採用セス以テ有罪ノ判決ヲ與ヘタルハ實ニ不法ノ裁判ナリト云フニ在レトモ○證據ヲ取捨スルコト及ヒ證據據調ノ申請ニ對シ其取調ノ要不要ヲ判定シテ之ヲ許否スルコトハ原院ノ職權ニ屬ス而シテ證人及川芳藏ハ本件ニ付偽證ノ處分ヲ受タルニ非ス偽證ヲ爲シタリトハ徒ニ被告ノ放言ニ止マレハ原院カ同人ノ證人ヲ斷案ノ資料ニ供シタルコトハ勿論被告ノ申請ヲ許容セザリシコトモ違法ニアラス同第二ハ原院カ明治二十九年九月二日付定約證書ヲ單ニ偽造物ナリトシ其偽造ノ顛末ヲ説明セサルハ理由不備ノ裁判ナルハ勿論事實ニ阻礙アル裁判ナリト云フニ在レ



トモ○原告文ニハ被告カ小野寺丈右衛門ヨリ金借スルニ當リ明治二十七年十月中白紙ニ及川芳藏ノ印ヲ捺捺シ置キタルモノヲ以テ芳藏ヨリ被告宛ノ定約證ナルモノヲ偽造シタルコトヲ認メアリテ偽造ノ顛末明ニシテ不備ノ點ナク又組織ノ點アルヲ見ス要スルニ本論旨ハ該ニ原告判決ニ對シ非難ヲ試ミルニ外ナラスシテ上告ノ理由ト爲ルヘキモノニ非ス

辯護人關幸太郎カ上告趣意擴張書ノ要旨第一點ハ法律上私書偽造行使ト爲スモノハ其偽造ヲ爲シタル目的ノ方法ニ依リ行使シタル場合ヲ云フモノニシテ目的以外ニ使用シタル場合ヲ云フモノニアラス然ルニ原告判決第一項ノ理由ニ依レハ及川芳藏實吉兩人ヨリ金員ヲ騙取セントノ目的ヲ以テ證書ヲ偽造シタルトモ其目的ノ方法ニ使用セスシテ他ノ方向即チ小野寺丈左衛門ヨリ金貳拾五圓ヲ借入ルルノ典物ト爲シタリ左レハ法律上私書偽造行使罪ヲ構成セサルヲ論テ候タス況ンヤ債權證書ノ抵當ハ債務者ノ承諾ヲ得ルニ非サレハ其効力ヲ生セサルモノニ付被告人カ此無効ノ所爲ヲ行ヒタリトテ私書偽造行使罪ヲ構成スヘキ理由ナキヤ故ニ原告判決被告ノ所爲ニ對シ私書偽造行使ノ刑ヲ適用シタルハ法律ニ違フモノナリト云フニ在ルトモ○私書偽造罪ハ偽造文書ヲ文書トシテ使用スルニ於テ成立スルモノニシテ其當初ヨリ目的トシタル用法ニ供シタルト否トハ之ヲ問フニトテ要セサルナリ而シテ本件被告カ金二百二十圓ノ偽造借用證書ヲ行使シタルハ明治二十九年四月小野寺丈左衛門ヘ借用金二十五圓ノ紙幣トシテ右偽造證書ヲ差入レタル時ニアララスシテ未ダ金圓騙取ニ着手セサル以前明治二十七年十一月二十八日右偽造證書ヲ登米區裁判所ニ提出シテ之ヲ抵當地所ノ登記ヲ受ケタル時

ニ在ルコト原告文上明カニシテ即チ私書偽造行使罪ハ此時ニ於テ成立シタルナリ左レハ原告カ被告ノ此所爲ニ對シ私書偽造行使ノ刑ヲ適用シタルハ當然ニシテ決シテ不法ノ裁判ニアラス論旨後段ノ抵當ノ効力云々ハ犯罪成立ノ時期ヲ誤解シタルヨリ生セシ餘論ナレハ之ニ對シ特ニ說明ヲ下スコトヲ要セス同第二點ハ原告判決理由第一項中明治二十七年十一月二十七日金五拾圓ヲ芳藏實吉ニ貸付ケルニ當リ同日自宅ニ於テ唯文自ラ右金額ノ借用證書ヲ認メ芳藏ヨリ同人及ヒ實吉ノ印願ヲ受取リテ之ヲ押捺シナカラ文書憑シト詐リ之ヲ捺ミ獄中ニ入レ更ニ書改ムルニ依リ證券印紙買來ルヘシトテ同印願ヲ預リタルマ、一時芳藏ヲ遠ケタル上豫テ偽造シ置キタル明治二十七年十一月二十七日付借用人及川芳藏及川實吉ヨリ被告ニ文宛云々都合三筆ヲ抵當ト爲シタル金二百貳拾圓借用證書ノ芳藏實藏各名下及其他ノ要所ニ右印願ヲ捺シ該偽造證書日付ノ翌日即二十八日右偽造證書ヲ登米區裁判所ニ提出シテ抵當地所登記ヲ受ケ云々トアリ而シテ芳藏カ證券印紙ヲ買ヒ來リタル結果更ニ五拾圓ノ借用證書ヲ作りタルヤ否及金貳百二十圓ノ偽造證書ニ登記ヲ受ケルノ手續如何ヲ説明セサルハ判決ニ理由ヲ付セサル不法アルモノトス何トナレハ更ニ五拾圓ノ借用證書ヲ作ラスシテ金貳百二十圓ノ偽造證書ノミヲ作りタリトモハ芳藏ハ登記ノ手續ヲ爲スヘキ理山ナク又芳藏同行スルニアラサレハ被告印文ノミニテ登記ヲ受ケ得ヘキ理由ナキヲ以テナリト云フニ在レトモ○犯罪構成ニ關スル事實ハ原告文ニ明示スル所ニ依リ十分ナリ彼ノ五拾圓ノ證書ヲ別ニ作成シタリヤ將タ二百二十拾圓ノ偽造證書ノミニテ芳藏ヲ騙着シ得タリヤ否ヤ又ハ芳藏ハ登記所ニ被告ト同行シタリ



ヤ將タ他人ニ委任シタリヤ否ヤ等ノ事ハ全ク本案犯罪構成ノ要件ニアラサレハ原判決之ヲ示サトルモ事實理由ノ不備ト謂フヘキモノニアラス」同第三ハ又原判決理由ニ於テ偽造證書ノ抵當ト爲シタル田地三筆ノ内二筆ハ芳藏、寅吉ノ承諾上抵當ト爲シタルモノト認メ他ノ一筆ノミ承諾ヲ得サル偽造ノ抵當ト認メタルカ如シ之ヲ私訴判決理由ニ徴シテ他ノ二筆ハ正當ノ抵當ナリト認メタルコト明白ナリ元來金二百圓ノ證書ニシテ偽造ナル上ハ田地三筆共其偽造證書ニ抵當ト爲シタルトハ總テ芳藏ノ承諾アリタルモノト爲スヘカラス又該偽造證書ニ抵當ト爲シタル田地二筆ニシテ芳藏ノ承諾アリトセハ他ノ一筆ノミ承諾ナシト云フヘカラス特ニ此筆ノミ承諾ナキ抵當ナリトセハ其理由ヲ付セサルヘカラス然ルニ現ニ一ノ證書ニ抵當ト爲シアルモノ、内其二筆ハ承諾ナル正當ノ抵當ト爲シ他ノ一筆ノミ不承諾ニシテ偽造抵當ナリト爲シ以テ該證書ヲ偽造ナリト爲シタルハ理由齟齬ノ裁判ニシテ違法タルヲ免レヌト云フニ在レトモ○原公訴判文ニ「右五拾圓借受ノ抵當トナシタル寅藏所有田地一筆芳藏所有ノ田地一筆外ニ芳藏等ノ承諾ナキ芳藏所有田地壹畝四歩ノ一筆都合三筆ヲ抵當トナシタル云々」トアリテ其承諾ナキトハ正當ニ貸借契約ノ成リタル金五拾圓ノ債務ニ對シ芳藏等ニ於テ抵當ト爲スコトノ承諾ナカリシ田地ト云フノ意ナルコト明瞭ナリ決シテ芳藏等ニ於テ他ノ二筆ハ偽造證書ニ抵當ト爲スコトヲ承諾シタリト認メタルニアラス私訴判決ニ芳藏カ承諾セサル同人所有ノ田地一筆ヲ擅ニ抵當トナシタル金員借用證書ヲ偽造行使シ云々トアルモ公訴判決ノ趣旨ニ外ナラス故ニ原判決本論旨ノ如キ理由齟齬ノ不法アルニアラス」同第四ハ原判決理由第二項ニ於

テ被告書文カ金貳百二十圓ノ借用證書ノ返済期限短縮ノ證書ヲ偽造シ之ヲ丈左衛門ニ示シ金二十圓ヲ騙取シタリトアリ然レトモ該偽造證書ヲ丈左衛門ニ示シタルヲ以テ之ヲ行使シタリト爲スヘカラス原院ハ之ヲ以テ偽造行使トナシ其レニ對スル擬律ヲ爲シタルハ違法ノ裁判ナリト云フニ在レトモ○原判決ニハ金二百二十圓返済期限短縮ノ旨ヲ記シタル證書ヲ偽造シ小野寺丈左衛門ヨリ金二十圓ヲ借用スルニ當リ芳藏等ヘノ貸金ヲ取立テ返済スヘキ證據トシテ右偽造證書ヲ丈左衛門ニ示シ直正ナル約定違ノ如ク申欺キ以テ丈左衛門ヨリ金貳十圓ヲ騙取シタリトアリテ之ヲ示シテ債權者ノ安心ヲ博シ金員騙取ヲ容易ニスルノ用ニ供シタルニアレハ偽造證書ノ行使ナルコト勿論ニシテ原判決之ニ私書偽造行使ノ法條ヲ擬シタルハ當然ノコトナリトス」同第五ハ前記三點ニ於テ結局書文ニ對スル裁判ハ全部破毀セラレヘキハ勿論ナルニ付特ニ喜惣右衛門ニ對スル上告理由ノ辯明ヲ爲スヘキ必要ナキヲ信ス故ニ原判決理由第一二項破毀相成ル時ハ其三項モ破毀アラン事ヲ請求スト云フニ在レトモ○前記ノ上告論點中沒収ニ關スル擬律ノ外總テ理由ナキコト既ニ說明スル如クナレハ本論旨ノ相立サルコトハ了解スヘシ

被告書文カ私訴上告ノ趣旨ハ公訴ニ於テ不法ノ裁判ナル以上ハ私訴裁判ノ不法ナルコトハ論ヲ俟タスト云フニ在レトモ○公訴裁判ハ擬律ノ他又不法ノ點ナキコトハ前項説明ノ如ク又私訴判決ニ於テ別ニ不法ノ點アルコトナシ

右ノ理由ナルヲ以テ私訴上告ニ付テハ刑事訴訟法第二百八十五條ニ從ヒ之ヲ棄却ス



公訴上告ニ付テハ刑事訴訟法第二百八十六條同第二百八十七條ニ則リ原判決疑律ノ部分ヲ破毀シ本院ニ於テ直チニ判決スル左ノ如シ

右

戸板 監文

及川喜惣右衛門

原判決ノ認ムル事實ニ依リ之ヲ法律ニ照スニ押収ニ係ル小作證書中偽造ニ係ル部分ハ刑法第四十三條第一號同第四十四條ニ依リ處分スヘキモノトス依テ押収ノ小作證書中偽造ニ係ル部分ハ之ヲ沒収ス

其他ハ總テ原判決ノ通リトス

明治三十一年一月二十八日大審院第一審刑事部公延ニ於テ檢事岩田武徳立會宣告ス

○盜守盜ノ件

明治三十年第一二八四號  
明治三十一年一月廿八日宣告

○判決要旨

司法警察官ハ非現行犯事件ニ付押収處分ヲ爲スコトヲ得テ其處分ヲ爲ス

ニ當リ作成シタル文書ハ無効ナリ

第一審 名古屋地方裁判所 第二審 名古屋控訴院  
被告人 川瀬安丸 辯護人 高木益太郎

右安丸ニ對スル監守盜被告事件ニ付明治三十年十二月一日名古屋控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ服セス被告ヨリ上告ヲ爲シタルニ依リ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ審理スル左ノ如シ

辯護人高木益太郎上告辯明追申ノ趣旨ハ第一審判決證據列記ノ部ニ押収目錄トアリテ一件記録中警部ノ作りタル押収目錄二通ニハ立會人ノ連署ナキヲ以テ無効ノ書類ナリ故ニ右目錄ヲ採用シタル第一審判決ハ不法ニシテ此判決ヲ認可シタル原判決モ亦不法タルヲ免レスト云フニ在リ○依テ案スルニ本件ハ非現行犯事件ナルヲ以テ司法警察官ニ於テ押収處分ヲ爲スコト能ハス隨テ之ニ屬スル文書ハ無効ナルヘキハ勿論ナリ故ニ本件記録警部坪井千尋ノ作りタル押収目錄ト題スル文書ハ無効ナリ然ルニ第一審判決ヲ見ルニ其證據列記ノ部ニ於テ單ニ押収目錄ト記載シアリテ右無効ノ押収目錄ヲモ斷罪ノ資料ニ供シタリト云ハサルヘカラサルヲ以テ其判決全部不法タルヲ免レス然ルニ原院ハ第一審判決ニ於テ此不法アルニ拘ハラズ之ヲ認可シ被告ノ控訴ヲ理由ナシトテ棄却ノ判決ヲ爲シタルハ此又不法タルヲ免レスシテ全部破毀スヘキ理由アルモノトス既ニ此點ニ於テ原判決ノ全部破毀ヲ認ムル以上ハ他ノ上告論旨ハ一



★説明スルヲ要セス

右ノ理由ニ依リ刑事訴訟法第二百八十六條ノ規定ニ從ヒ判決スル左ノ如シ  
原判決ノ全部ヲ破毀シ更ニ審判セシムル爲メ本件ヲ大阪控訴院ニ移送ス  
明治三十一年一月二十八日大審院第一刑事部公廷ニ於テ檢事藤堂融立會宣告ス

○詐欺取財ノ件

明治三十一年第二六號  
明治三十一年一月廿八日宣告

○判決要旨

巡查カ非現行犯人ヲ逮捕告發セシハ不法ノ處分ナリトスルモ其處分ハ本案判  
決ニ對シ何等ノ關係ナ有セス

第一審 山形地方裁判所 第二審 宮城控訴院

被告人 石川 頼松

右頼松外一名カ詐欺取財被告事件ニ付明治三十年十二月十四日宮城控訴院ニ於テ言渡シタル  
判決ニ服セス頼松ハ上告ヲ爲シタリ  
大審院ニ於テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ審判スル左ノ如シ

上告趣意書ノ要旨第一ハ五月十九日ノ晚被告ト白井岩吉兩人ニテ佐藤良助方ニ登樓シタルニ  
トハ樓主良助及雇人鈴木ヨシ並ニ良助方娼妓ノ證言ニテ明白ナルニ拘ハラス豫審判事ハ被告  
ニ向ヒ其許ト岩吉ト他ニ一人ノ者三人ニテ佐藤屋ニ參リタル事ハ樓主良助並ニ警察署ニテ會  
ハセラレタル娼妓モ三人ヲ來リタルニ相違ナイト云フテ居ルカ尙ホ行カンカトノ訊問ハ即チ  
恐嚇詐言ナリト云ヒ同第二ハ五月十九日ノ晚福田屋ニ泊リタル事ハ被告ノ陳述且ツ福田屋ノ  
主人石川悦之助ノ證言ニテ明白ナリ然ルニ豫審判事ハ相被告矢作吉治ヲ調フルニ十八日ノ晚  
ハ福田屋ニテ頼松ト酒ヲ飲マヌカ答飲マヌ「頼松ハ何レニ泊リシヤ」答自分ト共ニ加規屋ニ泊リ  
マシタ「嘘ヲ云フテハナランソ頼松ハ其晚ハ福田屋ニ泊リシト云ヒ且福田屋ノ主人石川悦之助  
モ同様云フカ如何」答十八日ノ晚ハ加規屋ニ泊リタル事ヲ申立テ且ツ福田屋ニ於テモ十八  
日ニ泊リタル事ハ申立テサルニ右ノ如ク恐嚇詐言ヲ用ヒ取調ヘラレタルコトヲ原院カ認メス  
シテ其儘裁判セシハ不法ナリト云フニ在レトモ○假リニ被告頼松ノ豫審調書ニ不法ノ點アリ  
トスルモ原判決之レチ本件ノ證料ニ供シタルコトナキニ付之ヲ以テ原院判決ヲ攻撃スルハ其正  
鵠ヲ失シタルモノナリ又相被告矢作吉治ノ豫審調書ニ於ルモ豫審判事ニ於テ故ラニ詐言ヲ用  
ヒテ自白ヲ促シタルモノトハ認メ難ク隨テ之ヲ證憑ニ供シタル原院判決モ亦不法ニアラストス  
同第三ハ原院決ニ福田屋ニ於テ賭博ヲ爲シタル如ク認メアルモ跡形モナキ事ニシテ只岩吉ノ  
言ヲ信シ事實ヲ確メヌシテ判決アリシハ不法ナリト云ヒ同第四ハ原院決ニ「頁ケタル分モ支拂  
非現行犯人ノ逮捕



ハスト申立ヲタルヲ以テ之ヲ中止シト之レアルモ文拂ハストノコトハ岩吉モ申立テス又何人  
 申立テサルニ右ノ如ク事實ヲ表示シタルハ不法ナリト云ヒ同第五ハ岩吉ト吉治ハ如何ナル  
 話ニシテ金員ヲ貸借シタルカ否モ被告ノ知ラサル所ナルニ共謀シテ關取シタリトハ不法ナリ  
 ト云フニ在レトモ○右論旨ハ總テ原院ノ職權ニ一任シアル事實ノ認定ヲ非難スルニ過キスシ  
 ナ上告ノ理由トナラス同第五ハ五月二十一日午後十時三十分頃被告カ寒河江町飲食店ニテ酒  
 食スル際同所ノ巡查遠藤政彌ハ判事檢事ノ令狀ヲ示サス非現行犯ナル被告ヲ濫リニ逮捕セラ  
 レタリ然ルニ原院カ之ヲ看過シテ判決セシハ違法ナリト云フニ在レトモ○假ニ本件ハ非現行  
 犯ニシテ巡查カ逮捕發見セシハ總テ不法ハ處置ナリトスルモ○ハ巡查其人ニ對スル問題ニシ  
 テ本案判決トハ何等ハ關係ヲ有スルモ○ハ本論旨モ理由ナシ擴張釋明書ノ第一ハ被告  
 ハ第一二審ニ於テ申立テタル如ク詐欺ノ手段ヲ用ヒ相被告吉治ト共謀シテ金員ヲ關取シタル  
 者ニアラス岩吉ニ賭博ヲ勸メフレ共ニ賭博シタル者ナルニ詐欺取財ヲ以テ罰シタルハ不法ナ  
 リト云ヒ同第二ハ豫審延ニテ被告カ岩吉ヲモ知ラスト申立テタルハ岩吉カ自ラ賭博ヲ勸メ岩  
 吉ノミ賈ケタルヲ遺恨ニ思ヒ自訴シタルモノト考ヘタルヨリ知ラスト申立テタルモ○ニシテ  
 同ヨリ詐欺取財ノ訴ナリトハ知ラサリシ故ナリト云フニ在レトモ○是亦事實認定ノ非難ニ過  
 キスシテ上告ノ理由ナシ同第三ハ原院ハ詐欺取財ヲ以テ罰シ刑法第三百九十條第三百九十四  
 條ヲ適用セラレタレトモ同第四百四條ヲ以テ被告ヲ罰セラレタルカ同第四百九條ヲ以テセラレタ  
 ルカ是等ノ法條ヲ明示セシテ言渡シアリシハ不法ナリト云フニ在レトモ○被告ハ吉治ノ共

犯ナルコトヲ認メ而シテ被告ニ對シ本利ヲ料シアル以上ハ正犯ヲ以テ罰シタルコト明カナレ  
 ハ尙ホ其總則ナル對法第四百四條ヲ適用セサルモ不法ニアラス  
 右ノ理由ナルニ付刑事訴訟法第二百八十五條ニ從ヒ本案上告ハ之ヲ棄却ス  
 明治三十一年一月二十八日大審院第一刑事部公廷ニ於テ檢事藤堂禮立會宣告ス

○竊盜ノ件

明治三十年第一一九一號  
明治三十一年一月三十一日宣告

○判決要旨

郵便切手貼用ノ郵便物ヲ寄託セラレタル場合ニ於テ其切手ヲ剽取タル所爲ハ  
 委託物費消罪ヲ構成ス

第一審 前橋地方裁判所 第二審 東京控訴院

被告人 石原龍太郎 辯護人 龜谷恒太郎  
 根岸竹次郎

右兩名竊盜被告事件ニ付明治三十年十二月七日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ兩名  
 ヲリ上告ヲ爲シタルニ付刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ

郵便切手ノ剽取



龍太郎上告趣意書ノ要旨ハ龍太郎ハ群馬縣廳特使發送ノ件ニ付保證金ヲ積置キ其責任者トナ  
 リシモ其事務ハ相被告竹次郎ニ於テ取扱ヒ居リ而シテ郵便物ニ貼用アリシ切手ヲ剝取リタ  
 ルハ竹次郎ノ所爲ニシテ龍太郎ニ關係ナキニ原院カ共謀ナリトシ刑法第三百九十五條ヲ適用  
 シタルハ不法ナリ又原判決附本ニ被告ノ出生地ノ村名大字ハ三公田ナルヘキニ上三公田トア  
 リ又差立ノ箇所又ハ郵便切手貼用云々トアリテ字句ノ意味解シ難キヲ以テ原判決ノ破毀ヲ求  
 ムト云フニ在レトモ○前段ハ原院ノ職權ニ屬スル事實ノ認定ヲ非難スルニ過キス又判決附本  
 ニ誤字アリ若クハ被告ノ解シ難キ字句アルモ之カ爲メ原判決ノ破毀トナルヘキコトナシ依テ  
 該論旨ハ上告ノ理由トナスヲ得ス

竹次郎上告趣意書ハ原判決ハ擬律ニ錯誤アリト云フニ止マリ○如何ナル點カ錯誤ナルヤ之ヲ  
 揭示セサルヲ以テ説明ヲ與フルニ由ナシ

被告兩名辯護人鹽谷恒太郎上告趣意擴張第一點ハ原院ノ認メタル事實ハ龍太郎カ群馬縣廳ヨ  
 リ特使物ノ發送ヲ請負ヒ同縣廳ヨリ特使物ト共ニ龍太郎及ヒ竹次郎ニ托セラレタル郵便切手  
 貼用ノ郵便物ヲ二人共謀ノ上龍太郎宅ヘ持歸リ明治二十九年十一月六日ヨリ明治三十年二月  
 二十三日迄ノ間ニ合計金拾九圓六十五錢ノ切手ヲ剝取リ費消シタリト云フニ在リ故ニ兩名カ  
 委托セラレタルハ郵便切手貼用ノ郵便物ニシテ郵便切手ニ非ス依テ兩名カ郵便切手ヲ剝取費  
 消シタリトスルモ刑法第三百九十五條前段ニ該當スルモノニ非ス則チ受寄ノ物件ニ貼用シア  
 リタル郵便切手ヲ剝取リタル所爲ハ竊盜罪トシテ處分スヘキモノナリ然ルニ原院カ刑法第三

百九十五條前段ヲ適用シタルハ擬律錯誤ノ裁判ナリト云フニ在リ○然レトモ郵便切手ノ貼用  
 アル郵便物ノ委托ヲ受ケタル場合ニ在テハ其郵便切手モ均シク委托セラレタルモノナルコト  
 勿論ナルヲ以テ原院カ本件ニ付刑法第三百九十五條前段ヲ適用シタルハ相當ナリトス○第二  
 點ハ本件犯罪事實即チ群馬縣廳ヨリ委托ヲ受ケタル郵便物ノ切手ヲ剝取リ費消シタリトノ事  
 實ハ竹次郎一人ニテ爲シタルコトハ同人ノ自白スル所ナリ然ラハ竹次郎ニ對シテハ勿論龍太  
 郎ニ對シテ竹次郎カ右ノ如ク自白シ居ルニモ拘ハラス他ノ證據ニ對シ龍太郎ヲ共犯ト認ムル  
 ニ竹次郎ノ自白ノ信スヘカラサルコトヲ説明セサル可ラス然ルニ原判決ニ何等ノ説明ナキハ  
 理由不備ノ不法アルモノト云フニ在リ○然レトモ證據ノ採否ハ原院ノ職權ニ屬シ而シテ其採  
 否ニ付キ特ニ理由ヲ付スヘキ規定ナキヲ以テ原院カ竹次郎ノ供述ヲ採用セス且之ヲ採用セサ  
 ル理由ヲ付セサルモ之カ爲メ原判決ヲ不法ナリト云フヲ得ス○同第三點ハ龍太郎ノ住所ハ群馬  
 縣勢多郡下川澗村大字三公田ニシテ其出生ノ年月ハ安政三年八月ナルハ第二審公判調書ニ依  
 ルモ明ナリ然ルニ原判決ヲ見ルニ上川澗村上三公田トアリ又生年月ハ安政四年九月トアリ是  
 住所及ヒ生年月ノ點ニ於テ龍太郎ノ住所生年月ハ相違スルモノニシテ又第二審公判調書ニ記  
 載スル所ニ異ナレリ故ニ一面ニハ原院カ調書ニ明記スル所ニ反シ不法ニ事實ヲ認定シタルモ  
 ノト謂フ可ク一面ニハ原院カ言渡シタル判決ハ果シテ龍太郎ニ對スルモノト認ムルコト能ハ  
 サルヲ以テ龍太郎ニ對シテ違法ノ判決タルヲ免レスト云フニ在レトモ○住所及ヒ生年月日ヲ  
 記載スルニ當リ固ヨリ調書ニ羈束セラレヘキモノニ非ス又假令前掲ノ如キ誤記アリトスルモ



被告人ノ人違ニ非サルコト明白ナルヲ以テ之カ爲メ原判決ノ瑕疵トナルコトナシ依テ各上告論旨ハ一モ適法ノ理由ナキモノトス又辯護士ヨリ提出シタル上告趣意書ト題スル書面ニハ原判文中明治二十九年十一月六日金壹圓三十二錢ニ相當スル切手ヲ始メトシ云々トアレトモ原院ニ於テハ此點ニ付キ龍太郎ニ對シテハ勿論竹次郎ニ對シテモ一言ノ取調アリタルコトナシ然ルニ被告カ不服ナリトシテ控訴シタル第一審ノ判文ヲ其儘引用シ恰モ取調アリタル如ク說明シタルハ不當ナリトアリテ○被告ノ上告趣意ヲ擴張スルモノト如シ然レトモ原院公判始末書ニハ竹次郎ニ對スル間ノ部ニ「昨年十一月六日ニ一圓三十二錢ニ相當スル切手ヲ始メトシ合計十九圓六十五錢ニ相當スル切手ヲ剝取リタルカ」答高ハ幾ラカ確ニ判マセマセ云々トアリ又龍太郎ニ對スル間ノ部ニ「今竹次郎ノ申通リニテ同人ノ申ス處ハ違ハメカ」答今日ノ申立ハ違テ居ラメト考ヘマス云々トアリテ則チ切手ヲ剝取タル點ニ付テモ兩人ニ對シテ取調ヲ爲シタル事跡明白ニシテ上告論旨ノ如キ不法ナシ

龍太郎上告辯明書ハ西川鍋太郎關文七矢村定六等ノ申立ニ依レハ原院ノ認メタル事實ハ不當ナリ竹次郎ノ供述ハ不實ナリ又判文ニ金壹圓三十二錢ニ相當スル切手ヲ始メトシテ合計十九圓六十五錢ノ切手ヲ費消シタリトアルモ其取調アリタルコトナシ又判決謄本ニ住所及生年月等ノ誤謬アリト云フニ在レトモ○前段ハ原院ノ職權ニ屬スル事實ノ認定ヲ非難スルニ適キス後段ハ龍太郎ノ趣意書及辯護人ノ擴張論旨ニ對シテ說明セシ如クナルヲ以テ何レモ上告ノ理由トナラス

右ノ理由ナルヲ以テ刑事訴訟法第二百八十五條ニ依リ本件上告ハ之ヲ棄却ス  
 明治三十一年一月三十一日大審院第二刑事部公廷ニ於テ檢察安居修藏立會宣告ス

○贓物寄藏ノ件

明治三十一年一月三十一日第一二二號

○判決要旨

家宅搜索調書ニ關係人ノ供述アルトキハ其署名捺印アルヲ要ス然ラザレハ其

供述ハ證據力ナシ

第一審 長崎地方裁判所 第二審 長崎控訴院

被告人 福井寅一 辯護人 高木益太郎

右贓物寄藏被告事件ニ付明治三十年十二月十六日長崎控訴院ニ於テ長崎地方裁判所ノ判決ニ對スル被告及原裁判所檢察官ヨリノ控訴ヲ審理シ原判決ヲ取消シ更ニ被告寅一ヲ重懲罰三年罰金三十圓監視一年ニ處シ前發ノ刑ヲ通算ス云々ト言渡シタル判決ヲ不法ナリトシ被告ハ上告ヲ爲シ原院檢察長大島貞敏ハ答辯書ヲ差出シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ辯護士高木益太郎ノ辯論立會檢察安居修藏ノ意見ヲ聽キ判決スルコト左ノ如シ

家宅搜索調書ノ供述



高木辯護士辯明書ノ第三點ハ被告人方ニ於テ執行シタル家宅搜索調書ヲ視ルニ係審判事ハ藥物寄藏事件ニ付家宅搜索ヲ爲ス旨ヲ告ケ被告ノ親族副島八太郎ヲ立會ハシメ其調書第三第四項ノ供述ヲ聽キ之ヲ錄載シ又被告ノ繼母アイノ供述ヲモ爾ク之ヲ錄載シアリトス如此關係人ノ供述必要ナリト認メテ調書ニ錄載シタルニモ拘ラス此等ノ者テシテ署名捺印爲サシメザリシハ不法ノ措置ニシテ其供述ハ有効ノモノニアラス然ルニ原院ハ此無効ノ供述ヲ掲ケタル其調書全部ヲ有効ノモノト認メ之ヲ罪證ニ供シタルハ不法ノ裁判ナリト云フニ在リ○因テ該家宅搜索調書ヲ査スルニ其冒頭ニ搜索ヲ爲シタル場所ハ佐賀縣佐賀市松原町字通り名九番地福井寅一郎方ナリ寅一郎ハ長崎行不在ノ趣ニテ其繼母アイ病聲ニ臥シ居リ其弟同市柳町副島八太郎見舞ノ爲メ來合セタルニ付同人ヲ立會セタリ云々其末尾ニ簞笥ハ抽斗中ニ於テ發見セル數個ハ印判ヲ押收セリ該簞笥ハ寅一郎ノ所有ニ係ル旨アイニ於テ陳述セリト記載シアリテ即繼母アイノ供述ヲ錄載シアリ已ニ其供述ヲ錄載シタル以上ハ同人ヲ署名捺印セシメサレハ其供述ハ無効ハ者ナリ然ルニ原院カ其無効ノ供述ヲ記載シタル家宅搜索調書ノ全部ヲ探テ本件斷罪ノ資料ニ供シタルハ要スルニ辯護士所論ノ如ク違法ノ判決タルヲ免レサルモノトス已ニ此點ニ於テ原判決ヲ破毀スヘキ者ト認メタル上ハ他ノ上告論旨ニ付テハ一々說明ヲ與ヘス右ノ理由ナルニ依リ刑事訴訟法第二百八十六條ノ規定ニ則リ原判決ノ全部ヲ破毀シ本件ヲ廣島控訴院ニ移ス

明治三十一年一月三十一日大審院第二刑事部公廷ニ於テ檢事安居修藏立會宣告ス

○監視規則違犯ノ件

明治三十一年一月三十一日第三三號

○判決要旨

甲罪ニ對スル判決確定シタル後ニ至リ甲罪ニ對スル判決以前ノ乙罪ヲ裁判スルニ該リ餘罪後發例刑法第百二條ヲ適用セル判決ハ不法ナリ

(參照) 一罪前ニ發シ已ニ判決ヲ經テ餘罪ノ後ニ發シ其輕ク若クハ等シキモノハ之ヲ論セス其重キモノハ更ニ之ヲ論シ前發ノ刑ヲ以テ後發ノ刑ニ通算ス但前發ノ刑罰金額料ニ該リ已ニ納完シタル者ハ第二十七條ノ例ニ照シ折算シテ後發ノ刑ニ通算ス若シ前發ノ罪ヲ判決スルトキ未タ發セサル罪再犯ノ罪ト俱ニ發シタルモノハ其再犯ト比較シ一ノ重キニ從ヒ前發ノ刑ヲ通算セス(刑法第百二條)

第一審 山形地方裁判所鶴岡支部 第二審 東京控訴院

被告人 平田半次郎

右監視規則違犯被告事件ニ付明治三十年十二月二十五日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ

餘罪後發例ノ適用



對シ被告ヨリ上告ヲ爲シタルニ付刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スルコト左  
如シ

上告趣意ノ要旨ハ本件監視規則違反事件ニ付宮城控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ本院へ  
上告申訴欺取財事件ノ餘罪發覺シ山形地方裁判所鶴岡支部ニ於テ重禁錮一年三ヶ月監視一年  
罰金貳拾圓ノ判決ヲ受ケタルニ付キ宮城控訴院へ控訴ヲ爲シタル處該判決ヲ取消シ更ニ同一  
刑期金額ノ判決ヲ受ケ上告ノ未該判決ハ確定シ既ニ其執行ヲ終ヘタリ然ルニ東京控訴院カ本  
件ニ付判決ヲ爲スニ當リ前發ノ刑ヲ通算セシテ重禁錮七月ニ處スト言渡シタルハ不法ナリ  
ト云フニ在リ○依テ訴訟記録ヲ閱スルニ被告カ詐欺取財罪ニ依リ宮城控訴院ニ於テ言渡サレ  
タル判決ニ對スル上告ハ明治二十九年十二月十五日ヲ以テ本院ニ於テ棄却ハ言渡ヲ爲シ其判  
決確定シタルコトハ上告論旨ハ如クナルヲ以テ明治三十年十二月二十五日ニ至リ原院カ本件  
即チ明治二十八年十二月廿八日ハ犯罪ニ付判決ヲ爲スニ當リテハ刑法第二百二條ヲ適用スヘキモハ  
トス然ルニ之ヲ適用セザリシハ法則ヲ適用セサル不法ノ判決タルヲ免レシ依テ上告論旨ハ理  
由アルモノトス

右ノ理由ナルヲ以テ刑事訴訟法第二百八十六條ニ依リ原判決ヲ破毀シ本件ヲ名古屋控訴院ニ  
移ス

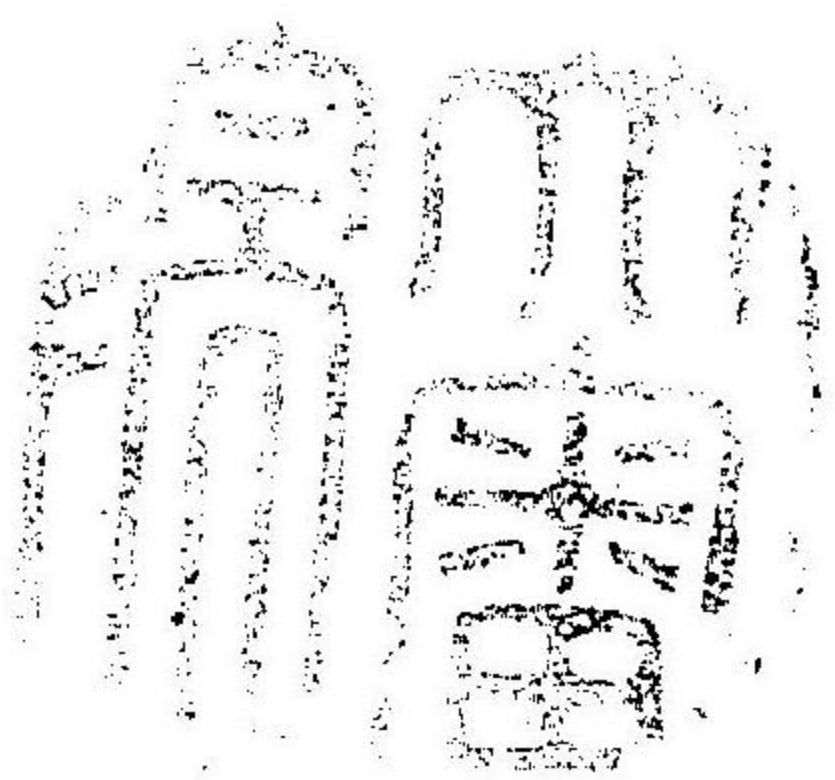
明治三十一年一月三十一日大審院第二刑事部公廷ニ於テ檢事安居修職立會宣告ス

明治三十一年二月廿八日印刷  
明治三十一年三月四日發行

定價金四拾錢

版權所有

大審院





東京市神田區錦町貳丁目貳番地

發行者 東京法學院

東京市麴町區內幸町壹丁目三番地

代表者 菊池武夫

東京市神田區錦町三丁目八番地

印刷者 八尾新助

東京市京橋區銀座四丁目一番地

發賣所 八尾商店

東京市神田區表神保町一番地

發賣所 八尾書店



大審院判決録







大審院民事判決錄



總目録

民法

普通ノ買戻契約ニ付テハ豫定期間ニ代金ノ提供ヲ要スル法規ナキニ依リ單  
ニ其提供ナキ爲メ買戻權ヲ喪失スル道理ナシトノ事……………八  
債權ノ轉付ヲ受ケタル者ハ其債權者カ債務者ニ負フタル債務アルトキハ其  
相殺ノ請求ニ應スル義務アリトノ事……………三  
他家ニ入リテ當然法定ノ推定家督相續人トナルヘキ要件ノ事……………六  
未成年カ離婚ニ付キ承諾ヲ爲ス能力ヲ有シタルモノト看做シタル裁判ニ關  
スル事……………八  
郡長ハ民事上國ヲ代表シテ訴訟ヲ爲ス資格ナシトノ事……………四  
保證人カ特ニ債務者ト連帶シテ債務ヲ負擔スルハ裁判例ノ認ムル所ナリト  
ノ事……………七  
法定ノ推定家督相續人タル長女ノ尊養子トナリタル者カ養嗣子ノ身分ヲ取  
得スルハ本邦慣習ノ認ムル所ナリトノ事……………三



家督相續權ハ戸主ノ最近卑屬親タル子ニ屬スヘク直クニ孫ニ屬スヘキモノ  
ニアラストノ事……………三三

家督相續權アル長女ノ嫁養子トナリタル者ハ戸籍上ノ名稱如何ニ拘ハラズ  
其家ノ法定家督相續人タリトノ事……………三四

條件ノ履行ヲ一定ノ期間ニ繫ラシメタルモノハ其期間履行ヲ求メタルヤ否  
ニ因リ條件ノ成否ヲ決スヘキモノナリトノ事……………五一

民事訴訟法

傳聞事項ノ供述若クハ證人ノ意見ハ證據トシテ採用スルヲ得ストノ事……………一

控訴狀ニ掲記セル請求ノ一定ノ申立ヲ更正スルニ付テハ民事訴訟法第二百  
二十二條ノ規定ヲ遵守スルヲ要セストノ事……………三

事實上ノ申述ハ調書ニ記載シテ明確ニスヘキ事項ニ屬セサルヲ以テ其記載  
ナキ爲メ之レカ申立ナカリシモノト云フヲ得ストノ事……………四

訴訟手續ニ不當ノ廉アルモ利害ノ關係ナキ當事者ノ一方ハ之ヲ上告ノ理由  
ト爲スヲ得ストノ事……………一一

二个ノ訴訟カ實質上同一ナラサルトキハ之ニ關スル證據カ前後同一ナルモ  
一事再訴ト云フヲ得ストノ事……………一五

當事者ノ代表資格ノ欠缺ハ裁判所カ職權ヲ以テ調査スヘキモノナリトノ事……………二四

民事訴訟法ニ於テ數箇ノ獨立ナル攻撃又ハ防禦ノ方法ト稱スルモノ、意義  
及ヒ之ニ對シ制限等ヲ爲シ得ヘキ場合ノ事……………三七

假處分決定ニ對スル異議ノ申立ニハ當事者ノ表示ヲ要件トセストノ事……………四四

唯一ノ證據決定ノ申請ヲ斥ケ立證ナシトシテ當年者ノ請求ヲ排斥シタルハ  
不法ナリトノ事……………四六

利息制限法

利息制限法ハ金銀貸借ノ外適用スヘキモノニアラストノ事……………五〇

町村制

一村内ノ部落カ財産所有ノ事實ニ依リ公法人タル資格ヲ以テ出訴シ得ヘキ  
場合ノ事……………五七



明治十年第四十三號布告

氏子又ハ壇家ナキ社寺ハ明治十年第四十三號布告ノ主旨ニ從ヒ其社寺附ノ地所ヲ抵當ニ差入ル、如キ處分行爲ヲ爲スヲ得ストノ事.....

事件目錄

事	件	關係事項	判決日	番號	訴訟關係人	丁數
整理公債證書取戻請求ノ件	人證	控訴狀、事實上ノ申述	一月二日	三〇六號	上告人 井關 勝 被上告人 矢部 七	一
地所買戻請求ノ件	買戻契約、買戻權	買戻契約、買戻權	二月二日	三〇七號	上告人 堀井 七郎 被上告人 堀井 七郎	三
生立木並ニ伐込材賣戻請求ノ件	訴訟手續ノ瑕疵、債權ノ轉付	訴訟手續ノ瑕疵、債權ノ轉付	二月八日	三〇八號	上告人 平田 幸助 被上告人 平田 幸助	八
轉付債權金請求ノ件	二個人ノ訴訟	二個人ノ訴訟	二月十五日	三〇九號	上告人 有馬 憲文 被上告人 有馬 憲文	二
無効相續確認請求ノ件	他家ノ推定家督相續人タル要件、未成年者離婚ノ能力	他家ノ推定家督相續人タル要件、未成年者離婚ノ能力	二月十五日	三〇九號	上告人 五月川 兵四郎 被上告人 五月川 兵四郎	二
不當處分損害要償ノ件	國ノ代表者、職權調査、代表資格ノ欠缺	國ノ代表者、職權調査、代表資格ノ欠缺	二月十六日	三〇九號	上告人 松橋 福次郎 被上告人 松橋 福次郎	二
永續掛金請求ノ件	連帶保證	連帶保證	二月十七日	三〇九號	上告人 武藤 春吉 被上告人 武藤 春吉	三
貸米請求ノ件	利息制限法	利息制限法	二月十七日	三〇九號	上告人 武藤 重助 被上告人 武藤 重助	三
相續權回復並ニ遺產相續登記取消請求ノ件	養嗣子ノ身分取得、家督相續權ノ歸屬、家督相續權アル長女ノ養子	養嗣子ノ身分取得、家督相續權ノ歸屬、家督相續權アル長女ノ養子	二月廿二日	三〇六號	上告人 堀江 竹松 被上告人 堀江 竹松	三



事件目録

質他受戻並ニ抵當登記請求ノ件  
 假處分異議ノ件  
 證據金及口錢取戻請求ノ件  
 地所買戻契約履行請求ノ件  
 公證取消地所引渡請求ノ件  
 見繼山生立木共有權確認及見繼名義訂正請求ノ件

數箇ノ獨立ナル攻撃又ハ防禦ノ方法ノ意義、其制限  
 假處分決定ニ對スル異議申立  
 唯一ノ證據決定申請ノ不採用  
 買戻條件付賣買、條件ノ不成就  
 明治十年第四十三號布告、社、寺附地所ノ抵當  
 一村内ノ部落カ公法人タル要件

廿三日 三十九年  
 廿三日 三十九年  
 廿四日 三十年  
 廿五日 三十四年  
 廿五日 三十四年  
 廿八日 三十九年

香取新之助  
 岩瀬利右衛門  
 住谷三郎  
 石川徳三郎  
 村井圓次郎  
 吉川次郎  
 鐵本文吉  
 原野彦左衛門外二名  
 田中善兵衛  
 荒居養壽  
 大倉貞藏外二名  
 小澤惣吉外百二十三名  
 山形三右衛門

三 四 五 六 七

いろは索引

此索引ハ専ラ法律上ノ用語ニ依リ其頭音ヲ取テいろはノ順ニ從テ排列編纂ス止ムヲ得サルニ非サレハ形容詞若クハ普通名詞ヲ用ヒス○頭音ハ必スシモ字音ノ假名遣ニ拘ハラズ人ノ通常言フ所ノ音聲ニ據ル例之ほうヲ入ルカ如シ

[5]

一事再訴

(二個ノ訴訟)參看  
 唯一ノ證據決定申請ノ不採用  
 當事者カ唯一ノ證據決定ノ申請ヲ爲シタルニ拘ハラズ判決ニ必要ナシトシテ之ヲ斥ケ立證ナシトノコトヲ以テ其請求ヲ理由ナシト判斷シタル裁判ハ不法ナリ

一村内ノ部落

一村内ノ部落カ町村制第十四條ニ依リ公法人タル資格ヲ認メラントスルニハ必ス其財産所有ノ事實ヲ以テ要素ト爲サトルヘカラス然レトモ其所有タルヲ必スシモ實際其物ヲ握有スルトキノミニ限ラス總ヘテノ所有ノ場合ニ之ヲ適用シ得ヘキモノナレハ部落カ係争物ヲ以テ自己ノ所有ナリト主張スルトキモ亦其主張ニ基キ之ヲ自己ノ所有ト看做シ公法人タル資格ヲ以テ出訴スヘキハ當然ナリ

いろは索引

頁數

[2]

人證

傳聞ニ關スル事項ノ供述若クハ證人ノ意見ハ證據トシテ採用スルコトヲ得ス

二個ノ訴訟

二個ノ訴訟ノ性質カ實質上同一ナラザルトキハ其請求ヲ證明スヘキ證據カ前後同一ナリトスルモ一事再訴ト云フヲ得ス

保證

(連帶保證)參看

當事者ノ表示

(假處分決定ニ對スル異議申立)參看

離婚

(未成年者離婚ノ能力)參看

利息制限法

利息制限法ハ金銀貸借上ノ外適用スヘキモノニアラス

買戻契約

一

一 二 三 四 五 六 七 八







いろは索引

〔さ〕

ノ聖養子(参看)

債權ノ轉付

債權ノ轉付ヲ受ケタル者ハ其債權者ノ權利ヲ承繼シ即チ被承繼者ノ地位ニ代リタルモノナリ故ニ被承繼者カ債務者ニ對シ負フ所ノ債務アルトキハ假令轉付ノ債權ニ關係チ有セサルモ被承繼者カ其相殺ノ請求ヲ拒ミ得サルト同シク承繼者モ其請求ニ應スル義務アリ

裁判例

(連帶保證)参看

〔め〕

明治十年四十三號布告

明治十年四十三號布告ハ神社又ハ寺院カ其社寺附ノ地所ヲ抵當ト爲スニ付テハ其氏子又ハ壇家惣代二名以上ノ連署ヲ爲サシムルヲ以テ取引上ノ要件ト爲シタルモノナリ故ニ氏子又ハ壇家ナキ社寺ハ該布告ノ主旨ニ從ヒ其社寺附ノ地所ヲ抵當ニ差入ルルカ如キ處分行爲ヲ爲スコトヲ得ス

〔み〕

未成年者ノ離婚能力

婚姻ハ結婚者本人ノ承諾ナクシテ成立スヘキモノニアラス故ニ未成年者ト雖トモ結婚シタル以上ハ承諾ヲ爲ス能力ヲ有セサルヘ

三

〔し〕

カラス從テ離婚ニ付テモ亦其能力ヲ有シタルモノト看做シタル裁判ハ相當ナリ

證人ノ意見

(入證)参看

證據

(入證)参看

上告ノ理由

(訴訟手續ノ瑕疵)参看

證據ノ同一

(二個ノ訴訟)参看

職權調査

(代表資格ノ欠缺)参看

資格

(國ノ代表者)参看

習慣

(養嗣子ノ身分取得)参看

證據決定ノ申請

(唯一ノ證據決定申請ノ不採用)参看

條件ノ不成就

買戻條件附賣買ニシテ其條件ノ履行チ一定ノ期間ニ繫ラシメタル者ハ其期間相手方ニ對シ履行ヲ求メタルヤ否ニ因リ條件ノ成否

一 二 三 四 五 六

ヲ決スヘキ者ナリ故ニ期間内ニ履行ヲ求ムル意思アリシモノト認メ得ヘキ場合ニ於テハ期限後ト雖トモ相當ノ準備時間内ニ出訴スレハ條件カ成就スルモノト如ク斷定セル裁判ハ不法ナリ

社寺附地所ノ抵當

(明治十年四十三號布告)参看

事實上ノ申述

事實上ノ申述即チ其中立ハ調書ニ記載シテ明確ニスヘキ事項ニ屬セサルヲ以テ其記載ナキ爲メ之レカ申立ナカリシモノト云フヲ得ス

意見

(入證)参看

卑屬親

(家督相續權ノ歸屬)参看

制限

(數箇ノ獨立ナル攻撃又ハ防禦ノ方法ノ意義)参看

數箇ノ獨立ナル攻撃又ハ防禦ノ

方法ノ意義

民事訴訟法ニ所謂數箇ノ獨立ナル攻撃又ハ

いろは索引

防禦ノ方法トハ孰レモ相互ニ相對的無關係ナル法律上ノ判斷ヲ爲サシムルモノト云フ故ニ辯論中ハ訴訟ノ如何ナル程度ニアルチ間ハス民事訴訟法第百十九條ノ規定ニ從ヒ何時ニテモ之ヲ制限シ得ヘク又辯論ノ終結後ハ同法第二百三十條第二項ノ規定ニ依リ其間適切ナリト思料スル一箇ニ對シテノミ判斷ヲ與フルコトヲ得ベシ

一 二 三 四 五 六

五



法  
文  
表

民事訴訟法

丁數

一一九條……………七

二二二條……………三

三三〇條二項……………七

町村制

一一四條……………七

明治十年第四十三號布告……………五

法  
文  
表



月日目錄

判決月日

二月一日  
二月二日  
二月二日  
二月八日  
二月十五日  
二月十五日  
二月十六日  
二月十七日  
二月十七日  
二月二十二日  
二月二十二日  
二月二十三日

番號

三十年一〇六號  
三十年二二六號  
三十年二二〇號  
三十年三四〇號  
三十年四三七號  
三十年四三九號  
三十年二八三號  
三十年一四八號  
三十年四四〇號  
三十年二二六號  
三十年一九一號  
三十年三三六號

判決結果

破毀  
棄却  
破毀  
棄却  
破毀  
廢棄  
棄却  
棄却  
棄却  
破毀  
棄却  
棄却

原控訴院

東京  
前橋  
名古屋  
大阪  
長崎  
東京  
函館  
東京  
大阪  
東京  
東京  
東京

丁數

一三八二五八四三〇三七〇

月日目錄



月日目錄

二月二十四日  
二月二十五日  
二月二十五日  
二月二十八日

三十年  
二六七號  
三十年  
一四二號  
三十年  
四八五號  
三十年  
四八九號

破 破  
毀 毀  
棄 棄  
却 却

東 東  
京 京  
宮 城  
函 館

二  
五 五 五 五

總計十六件  
破 毀 六件  
棄 却 九件  
廢 棄 一件

人名音字目錄

人名	番號	原控法院	丁數
[シ] 岩瀬利右衛門 <small>被上告人</small>	.....	.....	三六
石川徳三 <small>被上告人</small>	.....	.....	四五
[ハ] 原野彦左衛門外二名 <small>被上告人</small>	.....	.....	五一
[ハ] 堀越彌七郎對龜井七三郎	.....	東京	四
堀江徳兵衛 <small>被上告人</small>	.....	東京	九
堀江竹松對堀江ミナ <small>被上告人</small>	.....	東京	三四
堀江ミナ <small>被上告人</small>	.....	東京	三四
堀江七三郎 <small>被上告人</small>	.....	東京	四
[カ] 香取新之助對岩瀬利右衛門	.....	東京	三七
吉川チヨ <small>被上告人</small>	.....	大阪	四〇
[カ] 武村重助外一名對小林源藏	.....	東京	三五
[カ] 田中善兵衛對荒居養壽外二名	.....	東京	三五

人名音字目錄



〔つ〕	綱川 勘吉外一名對五月女兵四郎	三十年	四三九號	東京	一八
〔む〕	武藤 春吉 <small>被上 告人</small>	三十年	二六七號	東京	四九
〔る〕	村井 圓次郎對吉川 十ヨ	三十年	一〇六號	東京	一
〔わ〕	井關 勝對矢部 セン	三十年	四八九號	函館	五八
〔や〕	小澤 惣吉外百二十三名對山形三右衛門	三十年			一
〔え〕	矢部 セン <small>被上 告人</small>				五八
〔こ〕	山形 三右衛門 <small>被上 告人</small>				一五
〔ふ〕	牧瀬 八九郎 <small>被上 告人</small>				二四
〔あ〕	松橋 福次郎 <small>被上 告人</small>	三十年	二二〇號	名古屋	九
〔て〕	二村 半平對堀江德兵衛	三十年	一四八號	東京	二七
〔さ〕	福地 フサ外二名對武藤 春吉	三十年	一八三號	函館	二四
〔し〕	船越 宜美對松橋福次郎				三〇
〔ち〕	小林 源藏 <small>被上 告人</small>	三十年	一四二號	宮城	五一
〔な〕	鐵本文吉對原野彦左衛門外二名	三十年	四三七號	長崎	一五
〔に〕	有馬 憲文對牧瀬八九郎				一五

○民

〔き〕	荒居 養壽外三名 <small>被上 告人</small>	三十年	四三九號	東京	一八
〔け〕	五月女 太十郎外一名對五月女兵四郎				一八
〔こ〕	五月女 兵四郎 <small>被上 告人</small>				一八
〔さ〕	鹽田 幸助 <small>被上 告人</small>	三十年	四四〇號	大阪	三〇
〔し〕	白瀧 達藏外一名對小林 源藏	三十年			三〇
〔ち〕	穴倉 貞藏外三名 <small>被上 告人</small>	三十年	三四〇號	大阪	三
〔な〕	平村 佐太郎對鹽田 幸助	三十年	三三六號	東京	四五
〔に〕	住谷 郡藏對石川德三郎				四五



# 大審院民事判決録

第四輯 第二卷

## ○整理公債證書取戻請求ノ件

明治三十年第一百六號  
明治三十一年二月一日第一民事部判決

### ○判決要旨

一 傳聞ニ關スル事項ノ供述若クハ證人ノ意見ハ證據トシテ採用スルコトヲ得ス  
(判旨第二點)

第一審 東京地方裁判所 第二審 東京控訴院

上告人 井 關 勝 訴訟代理人 高木祖來

被上告人 矢部三浦隆見人セシ 訴訟代理人 上原鹿造

右當事者間ノ整理公債證書取戻請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十年二月十二日言渡シタル  
判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

人證



立會檢察安居修藏ハ意見ヲ陳述シタリ

判決

原判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ東京控訴院ニ差戻ス

理由

上告論旨第二點ハ原判決理由第三ニ於テ證人青木元勝岡田正定中澤貴光ノ證言ニヨリ松屋兩替店ニテ本件ノ公債證書ヲ預リタルモノト推定セラレタレ其基本タル青木元勝ノ證言ハ元勝自身ニ接觸シタル事實ヲ陳述セシニアラス只他ヨリ傳聞シタル話シテ陳述シタルノミニテ此傳聞ノ事實ノ眞偽ニ付テハ證人ハ責任ナキモノナレハ隨テ證據ノ効チ生セサルモノナリ又岡田正定ノ證言ニ付テハ其要點ハ后ニ金ヲ持參セルニ付無論預リ居ルコトヲ認メタルニ相違ナシト信シテ居リシト云フニ在レトモ是レ必竟證人ノ意見ニ過キサレハ上告人カ預リ居ルコトヲ認メタル證據ト爲ス可ラサルモノナリ然レハ原判決ハ證據ノ法則ニ違背シ事實ヲ確定シタル不法ノ裁判ナリト云フニ在リ

判旨第二點

依テ按スルニ人證ニ付テハ證人カ自ら直接ニ見聞シタル事項ニ非サレハ事實ハ眞否ヲ確定スル材料ト爲ルモノニ非ス從テ他人ヨリ傳聞シタル事項ハ供述ハ自己ハ見聞シタル事實ニ係ラサルヲ以テ之ヲ證據トシテ採用スルヲ得ス又證人カ或ル事實ニ付キ述ヘタル意見ハ事實ハ判斷ニシテ事實ハ判斷ハ裁判官ノ職權ニ屬シ證人ハ爲ス可キ事項ニ非サレハ是亦證據ト爲ルモノニ非ス而シテ原院ハ證人警部青木元勝ノ刑事巡查ヨリ傳聞シタル事實ノ供述及ヒ證人岡田

正定ノ川田勝カ本訴公債證書ヲ預リ居ルコトヲ認メタルニ相違ナシト信シ居ルトノ供述等ニ基キ松屋兩替店ニテ本件公債證書ヲ預リタルモノト認定シタルハ原判決理由第三ニ徴シ明カニシテ即チ證人カ他人ヨリ傳聞シタル事實ノ供述並ニ證人カ事實ニ付キ述ヘタル意見ヲ採テ以テ裁判ノ材料ニ供シタルモノナレハ證據ノ法則ニ違背スル不法ノ裁判タルヲ免カレサルモノトス既ニ此點ニ於テ原判決ヲ破毀スル以上ハ自餘ノ上告論旨ニ對シ遂一説明ヲ爲スノ要ナシ

右説明ノ如クナルヲ以テ民事訴訟法第四百四十七條第一項ニ依リ原判決ヲ破毀シ同法第四百四十八條第一項ニ從ヒ主文ノ如ク判決ス

○地所買戻請求ノ件

明治三十年第二百二十六號  
明治三十一年二月二日第二民事部判決

○判決要旨

一 控訴狀ニハ請求ノ一定ノ申立ヲ掲記スルノ要ナシ故コ之ヲ更正スルニ付テハ民事訴訟法第二百二十二條ノ規定ヲ遵守スルヲ要セズ

(參照) 判決ヲ受クヘキ事項ノ申立ハ書面ニ基キ之ヲ爲スコトヲ要ス

控訴狀○事實上ノ申述



控訴狀の事實上ノ申述

書面ニ掲ケサル申立アルトキハ調書ニ附録トシテ添付ス可キ書面ヲ差出シテ之ヲ爲スコトヲ要ス

重要ノ點ニ於テ前申立タルモノト異ナル申立ニ付テモ亦同シ

本條ノ規定ヲ遵守セサルトキハ申立ナキモノト看做ス(民事訴訟法第百二十二條)

一 事實上ノ申述即チ其申立ハ調書ニ記載シテ明確ニスヘキ事項ニ屬セサルヲ以テ其記載ナキ爲メ之レカ申立ナカリシモノト云フヲ得ス(以上判旨第二點)

第一審 前橋地方裁判所 第二審 東京控訴院

上告人 堀越彌七郎 訴訟代理人 熊野敏三

被上告人 龜井七三郎

右當事者間ノ地所買戻請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十年四月二十四日言渡シタル判決ニ對シ上告代理人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告第一論旨ハ原判決ハ法則ヲ不當ニ適用シタリ被上告人控訴人ハ賣戻請求權ヲ有スルヲ否ヤハ本件第一審以來ノ爭點タリ而シテ原院ハ控訴人七三郎カ係争地ニ被控訴人所有名義トナ

リアルニ基キ本訴ニ於テ賣戻請求ヲナスハ妥當ニシテ其權利ナリト云ハサルヘカラスト判定シタリ然レトモ此判定ニハ左ノ不法アルモノナリ

(第一)原判決理由ニ曰ク控訴人七三郎ニ於テ賣却チナシ畑戻契約ヲ取消シタル事實アリト認ムルコト能ハス從テ係争地戻契約ハ有効ニ存續スルモノト認ム云々ト依テ此ヲ詳言セハ畑戻契約ハ存續スルヲ以テ控訴人(被上告人)ハ賣戻請求權ヲ有スルモノナリト云フニ外ナラス然レトモ畑戻契約ノ存續ヲ認メナカラ賣戻請求權アリト云フハ矛盾ノ説明タリ何トナレハ畑戻契約トハ單ニ賣戻ス可シトノ契約ニアラスシテ甲第一號證係争地チ質入トシタルコト及債務者辨濟ノ上ハ該畑地チ返戻セントノ意ヲ表シタル契約タリ從テ同契約ノ存續ヲ認ムル以上ハ質權ノ性質ニ基キ質地返戻ヲ求ムルハ格別之ヲ賣買契約アリタルカ如ク賣戻ヲ請求スルモ可ナリト判決シタルハ質權井ニ賣買ノ性質ヲ誤解シタルモノナリ

(第二)原判決後段ニ曰ク加之ナラス被控訴人(上告人)先代所有名義トナシタル點ニ付テハ控訴人ノ主張ニ依ルモ後ニ承諾ヲ與ヘタリト云フニ歸スルヲ以テ結局當事者ノ合意上ノモノト云フ可シ云々故ニ控訴人七三郎ハ賣戻請求權ヲ有スト此レ亦速斷ニアラスンハ未タ其意ヲ盡サス何者現今係争地タル畑地カ上告人ノ所有名義ナリトノ一事ハ直ニ以テ被上告人ニ賣戻請求權ノ有無ヲ斷判スルニ足ラス詳言スレハ質契約ニ付キ質取主ノ所有名義ト便宜上ナシ置キ後之ヲ返戻スルコトアルモ致テ質權ノ性質ヲ害スルモノニアラス然ルニ原判決ハ當時承諾上上告人ノ所有名義ト爲シタリトノ一事ヲ以テ直ニ賣戻請求權アリトシタルハ不法ノ判決ナリ何ト

控訴狀の事實上ノ申述



テレハ賣戻ノ請求ハ必ス賣買契約ニ基クヘキモノニシテ單ニ合意上上告人ノ所有名義ト爲シタル事實ハ賣戻請求權ヲ生スヘキ合法ノ原因ニアラサレハナリト云フニ在リ○(第一)依テ原判文ヲ閱スルニ其理由申被控訴人(上告人)先代カ控訴人(被上告人)七三郎ヨリ係争畑地ヲ明治八年中金百八十圓ノ實地ニ受取リ後先代所有名義ト爲シ明治十四年中返地約定ヲ爲シタル事實ハ被控訴人カ當法廷ニ於テ自認スル所ナレハ云々係争畑地戻契約ハ有効ニ存續スルモノト認ムト説明シテ元來係争地所實地ノ性質ヲ持續スルモノトスレハ之ヲ受戻ス爲メ特ニ戻契約ナルモノヲ締結スル要ナキモノナルニ尙ホ其契約カ存スル事實及ヒ該地所有名義カ被上告人控訴人(合意上々告人)被控訴人(名義ニ爲シアルト)ノ點ヨリ觀察シ結局畑戻契約ヲ以テ賣戻契約タル事實ヲ假裝シタルモノト認定シ從テ被上告人ニ賣戻請求權アリト判定シタルコトハ原判文理由ノ前段ヲ通讀スレハ其意自カラ明カナリ然ルニ上告人ハ畑戻契約ハ賣戻スヘシトノ契約ニアラスシテ係争畑地ヲ質入ト爲シタルコト及ヒ債務辨濟ノ上ハ該畑地ヲ返戻セントノ意ヲ表シタル契約ナリトノ自己ノ見解ニ基キ本論旨ヲ爲スハ原裁判所ノ職權ニ立入り事實ノ認定ヲ非難スルニ過キササルヲ以テ上告論旨トシテ採用スルニ足ラス(第二)原裁判所ハ單ニ本訴ノ地所上告人ノ所有名義ト爲シタル一事ヲ以テ直ニ賣戻請求權アリト判定シタルモノニ非ルコトハ前項ニ對スル辯明ニ依リ會得スヘシ即チ本論旨モ其理由ナシ

同第二論旨ハ原判決ハ申立ナキ事項ヲ裁判シタル不法アリ(第一)一定ノ申立ニ付キ不當ニ更正ヲ採用シタリ原判決主文中被控訴人ハ控訴人七三郎ニ對シ(中略)以上四筆ノ地所ヲ代金百八十

圓ニテ賣戻ス可シト判決セリ然レトモ一件書類ニ付テ見ルトキハ當初控訴人ハ控訴狀中一定ノ申立トシテ云々ノ地所ヲ控訴人ヘ登記ヲ經テ引渡ス可シト申立テ後ニ此ヲ更正シ登記ヲ經テ引渡ス可シトアルヲ賣戻ス可シト改メタリ就テハ前後ノ申立タルヤ一ハ登記ヲ經テ引渡スヘシトシテ漠然其原因ヲ指定セス一ハ賣戻スヘシトシテ原因ヲ指定シ登記ヲ經テノ一事項ヲ削レテ從テ二者全ク異ナルモノナルヲ以テ民事訴訟法第二百二十二條ニ基キ書面ニ依リ申立ヲ爲サハル可カラス然ルニ被上告人ハ單ニ口頭ノ申立アリタルノミニモ拘ハラヌ原判決ハ此カ更正ヲ採用シテ主文中ニ賣戻ス可シト判決シタルハ民事訴訟法第二百二十二條末項并ニ同法第二百三十一條ニ違背シテ被上告人ノ申立テサル事項ヲ上告人ニ歸セシメタル不法アルモノナリ(第二)申立テサル事實ヲ申立テタルモノ、如ク看做シテ不當ニ事實ヲ認定シタリ上告人先代所有名義トナシタル點ニ付テハ被上告人ノ主張ニ依ルモ後日承諾ヲ與ヘタリト云フニ歸スルヲ以テ云々ト説明シテ上告人ノ先代所有名義トナシタルハ被上告人ノ承諾ニ出テタルモノナリト説明シタリ然レモ原院ニ於テ控訴人ヨリ斯ル申立テナシタルコトナク亦一件書類中此カ記載ナシ然ルニ原判決ハ申立テアリタルモノトシテ裁判シタルハ民事訴訟法第四百三十八條末項ニ違背シタルモノナリト云フニ在リ○(第一)按スルニ控訴狀ニ掲ケハキ要件ハ民事訴訟法第四百一條ノ規定スル處ニシテ一定ノ申立ハ如キハ之ヲ控訴狀中ニ掲記スルハ要ナキモハナリ本件記録ヲ閱スルニ請求ノ一定ノ申立ハ被告ハ原告ニ對シ(中略)地所代金百八十圓ニテ速ニ原告方ハ賣戻シ云々トアリテ第二審ニ於テモ同一ハ申立ヲ爲シタルコト其口頭辯論書

判官第二點



ニ照シテ明カナリ左スレハ偶々控訴状中ニ相違ハ申立チ一旦記載シタルコトアルモ固ト之レ  
 不必要ノ事項ヲ記載シタルニ過キサレハ後之ヲ更正スルニ付キ民事訴訟法第二百二十二條ハ  
 規定ヲ遵守スルノ要アルヲ視ス故ニ本論旨モ上告適法ノ理由ナシ(第二)本論旨中所謂申立ハ如  
 キハ民事訴訟法第三百三十條ノ規定ニ從ヒ調書ニ記載シテ明確ニスヘキ事項ニ屬セサルヲ以テ  
 其主張ナカハシモノト論スルヲ得ス即チ原判決ハ上告所論ノ如キ違法ナシ  
 上文辯明ノ如ク本件上告ハ一モ適法ノ理由ナキニ依リ民事訴訟法第四百三十九條第一項ニ從  
 ヒ棄却スヘキモノトス

○生立木並ニ伐込材賣戻請求ノ件

明治三十年第二一二三三號  
 明治三十一年二月二日第二民事部判決

○判決要旨

一 實物提供ヲ買戻契約ノ條件ト爲シ特約シタル場合ニ於テハ其不履行ニ因リ當  
 然買戻權ノ喪失ヲ來スコトアルモ普通ノ買戻契約ニ付テハ豫定期間内ニ代金  
 ノ提供ヲ要スル法規ナシ故ニ單ニ其代金提供ナキ爲メ買戻權ヲ喪失スヘキ道  
 理ナキモノトス(判旨第二點)

第一審 安濃津地方裁判所山田支部 第二審 名古屋控訴院

上告人 二村半平 訴訟代理人 信岡雄四郎  
 被告 堀江總兵衛 訴訟代理人 岡村輝彦  
 右當事者間ノ生立木并ニ伐込材賣戻請求事件ニ付名古屋控訴院カ明治三十年四月二十二日言  
 渡シタル判決ニ對シ上告代理人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告代理人ハ上告棄却ノ  
 申立ヲ爲シタリ

判決

原判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ名古屋控訴院ニ差戻ス

理由

上告第一點ハ凡ソ買戻條件ノ成否ハ買戻有權者即チ上告人カ相當ノ期限内ニ買戻ノ行動ヲナ  
 シタリヤ否ヤヲ密按シテ之ヲ明カニスヘキ筋合ナリト信ス而シテ本案上告人ハ其買戻ノ權能  
 ナ行フニ當リ被上告人カ私利ノ爲メ之ヲ違ケントスル事狀ヲ發見シタルニヨリ數日前ヨリ掛  
 ケ合ナシタル事跡顯著ナルニ原裁判所ハ之ヲ輕々ニ觀過セラレタルノミナラス上告人カ買  
 戻ノ權能ヲ拋棄セス却テ其行動ヲナシタルコトハ公力ニヨリテ事實ノ消滅ヲ防ク方法トシテ  
 期限ノ當日出訴ヲ爲シタル事實ニ依リテ之ヲ證明シタルニ拘ハラズ買戻權能ヲ拋棄シタリト  
 ノ推定ヲ下サレタルハ即チ法律ニ違背シテ事實ヲ確定シタル不法ノ判決ナリト云ヒ其第二點  
 ハ原裁判所ハ本案第一號證ヲ援引シテ金四百四十圓七拾五錢ヲ本年十一月二十五日限り御



持參買戻ノ御依頼有之候節ハ云々万一期限經過候節ハ此契約取消云トアルニ徴スルモ控訴人ハ其權能ヲ行ハントセハ須ク先ツ既約ノ期日代金ヲ返還セサルヘカラサル筋合ナリト判示セラレタリ而シテ本案上告人カ該約旨ニ基キ金圓ヲ交付セントスルニ當リ被上告人ハ之ヲ避ケ以テ該山林ヲ絶體ニ自己ノ所有ニ歸セシメント圖リ到底本契約ノ履行ヲササルヨリ其期日内ニ於テ本訴ヲ提記タシル事實ナレハ此事實ノ消滅セサル限リハ上告人ハ買戻權能ヲ拋棄シタルモノト云フヲ得ス之ヲ要スルニ上告人ハ期日内金圓ヲ持參シテ買戻ノ依頼ヲ爲セハ其意思買戻權ヲ拋棄セサルヲ明瞭ナリ之ニ應セサルハ被上告人ノ非行ニシテ出訴ヲ求メタル所以亦茲ニアリトス然ルニ原裁判所カ本約旨ヲ維持スルノ方法ハ單ニ代金返還濟ノ一事ニアルカ如ク判示セラレタルハ即チ法則ヲ不當ニ適用セラレタルモノナリト云ヒ其第三點ハ買戻請求人ハ被請求人カ其申込ニ應シ買戻ヲ實行スルニ當リテハ其代金ヲ交付スヘキモノニシテ被請求人其申込ニ應セサルニ先ツ其代金ヲ交付又ハ提供セサルヘカラサル義務アルモノニアラス然ルニ原裁判所ニ又甲第三號證ハ何レモ本訴控訴人カ買戻代金ヲ被控訴人ニ交付シタリト認ムヘキ證左ニアラス云々果シテ此金額カ買戻期限ニ被控訴人ニ提供セラレタリト信憑スヘキモノモ之ナキニ於テテ云々ト判示シ買戻ノ申込ト同時ニ代金ヲ交付又ハ提供セサルヘカラサルモノト斷定セラレタルハ法則ヲ不當ニ適用シタル違法ノ判決ナリト云フニ在リ○依テ按スルニ買物提供ヲ以テ買戻契約ノ條件トシテ特約シタル場合ニ於テハ或ハ其不履行ニ因リ當然買戻權ノ喪失ヲ來タスヘシト雖モ一般普通ノ買戻契約ニ於ケル豫定ノ期間内ニ代金

判旨第二點

ハ提供ヲ要スルトハ現行法規ノ存セサル今日ニ在リテハ單ニ其代金ハ提供ナキ一事ヲ以テ買戻權ノ喪失ヲ來タスヘキ道理ナシ然ルニ原裁判所ハ本件甲第二號證ノ契約ヲ以テ當事者間ニ前記ノ特約アリシ事實ヲ認メタルニ非ス而カモ上告人カ豫定ノ期間内ニ本訴ヲ提起シテ被上告人ニ對シ買戻ヲ請求セシ事實ヲ認メナカラ恰モ當事者間ニ特約アリシ場合ト一般其期間内ニ代金ヲ提供セサリシトノ理由ヲ以テ已ニ買戻權ヲ喪失セシモノト判定シタルハ即チ買戻ニ關スル法則ヲ不當ニ適用シタル違法ノ判決ニシテ上告論旨ハ其理由アリトス既ニ此點ニ付原判決ヲ破毀スル以上ハ爾餘ノ論告ニ對シテハ一々說明ヲ要セス以上説明ノ如ク本件上告ハ適法ノ理由アルヲ以テ民事訴訟法第四百四十七條第一項ニ依リ原判決ヲ破毀シ尙ホ同法第四百四十八條第一項ノ規定ニ從ヒ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル處メ本件ヲ原裁判所ニ差戻スナ相當ナリトス是レ主文ノ如ク判決ヲ爲ス所以ナリ

○轉付債權金請求ノ件

明治三十年第三百四十號  
明治三十一年二月八日第一民事部判決

○判決要旨

一 訴訟手續ニ不當ノ廉アルモ利害ノ關係ナキ當事者ノ一方ハ之ヲ以テ上告ノ理

訴訟手續ノ瑕疵○債權ノ轉付



由ト爲スコトヲ得ス(判旨第一點)

一 債權ノ轉付ヲ受ケタル者ハ其債權者ノ權利ヲ承繼シ即チ被承繼者ノ地位ニ代  
リタルモノナリ故ニ被承繼者カ債務者ニ對シ負フ所ノ債務アルトキハ假令轉  
付ノ債權ニ關係チ有セサルモ被承繼者カ其相殺ノ請求ヲ拒ミ得サルト同シク  
承繼者モ其請求ニ應スルノ義務アリ(判旨第二點)

第一審 富山地方裁判所高岡支部 第二審 大阪控訴院

上告人 平村佐太郎 訴訟代理人 長島鷲太郎

被上告人 鹽田幸助

右當事者間ノ轉付債權金請求事件ニ付明治三十年六月十六日大阪控訴院カ言渡シタル判決ニ  
對シ上告代理人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告第一點ハ上告人ヨリ被上告人ニ對スル金五百圓ノ請求ニ付第一審裁判所ノ下シタル判決  
主文ヲ見ルニ單ニ原告ノ訴ハ之ヲ棄却ストアリ然レトモ被上告人ハ第一審裁判所ニ反訴ヲ提  
起シタルモノニシテ而モ其反訴ニ於ケル一定ノ申立ヲ見ルニ原告請求スル訴外林伊作ノ債權

判旨第一點

金五百圓ハ被告ト伊作間ノ乙第二三號證債權ノ内其金高五百圓ト相殺消了スヘキ權御判決奉  
願候トアリ蓋シ反訴ハ便宜上本訴ノ繫屬スル裁判所ニ提起スルコトヲ得ル獨立ノ訴ナレハ民  
事訴訟手續上被上告人ノ反訴ニ對シテハ獨立ニ裁判ヲ爲サハカラス然ルニ第一審裁判所  
カ相殺ノ抗辯ノ提出セラレタルカ如クニ裁判シタルハ訴訟手續ニ違背シタルモノニシテ而シ  
テ原院カ亦此點ヲ審查セシテ單ニ控訴棄却ノ判決ヲ與ヘ以テ此形式上不法アル第一審判決  
ヲ認可シタルハ不當ナリト云フニ在リ○按スルニ反訴モ亦一ノ訴ナルヲ以テ之ヲ受ケタル裁  
判所ハ必ス其判決ヲ爲サハル可ラス然ルニ第一審裁判所カ原告ノ訴ハ之ヲ棄却ストノミ言渡  
シ被告ノ提出シタル反訴ニ對シテ何等ノ判決ヲ爲ササリシニ拘ハラヌ原裁判カ之ヲ認可シ控  
訴ヲ棄却シタルハ論告ノ如ク訴訟手續ニ違背セル不法アリトス然レトモ此反訴ハ被告即チ被  
上告人ノ提起シタルモノニ係リ原告即チ上告人ハ其反訴ニ於テ求メラレタル相殺ノ理由アル  
コトヲ説明セラレテ而シテ其訴ヲ棄却サレタルニアレハ右被上告人ノ提起シタル反訴ニ付テ  
ノ判決ナキモ之レカ爲メ上告人ハ毫モ利害ノ關係ヲ生セサルナリ乃チ利害ノ關係ナキ訴訟手  
續ハ不當ハ以テ原裁判ヲ破毀スル上告適法ノ理由トナラス

上告第二點ハ第三債務者ヨリ債務者ニ對シテ爲シ得ヘキ抗辯ハ之ヲ轉付債權者ニ對シ爲シ得  
ヘキコト固ヨリ論テ俟タスト雖トモ反訴ハ獨立ノ訴ニシテ普通ノ抗辯ト同一視スヘキモノニ  
アラス故ニ轉付債權者ハ其權利ニ對シ相殺ヲ遂ケタリ又ハ辨濟ヲ終ヘタリト主張スル抗辯ヲ  
避クルコトヲ得スト雖トモ訴外人ニ對シ而モ獨立ノ原因ニ基キ主張スル請求ニ應スルノ理由

訴訟手續ノ瑕疵○債權ノ轉付



判旨第二點

ナシ故ニ原院カ「被控訴人カ伊作ニ對抗シ得ヘキ相殺ノ反求ハ控訴人ニ對シテモ亦之ヲ爲シ得ヘキヲ以テ」云々判斷シタルハ不法ナリト云フニ在レトモ○轉付ヲ受ケタル債權ト雖モ亦其債權者ハ權利ヲ承繼シタルニ外ナラス即チ被承繼者ハ地位ニ代リタル者ナレハ被承繼者カ他ニ債務者ニ負フ所ノ債務アラハ假令其轉付債權ニ關係チ有スルモノニアラサルモ被承繼者カ其相殺ハ請求ヲ拒ムヲ得サルト同シク承繼者ニ於テモ其請求ニ應ゼサルヲ得ス原裁判カ「控訴人(上告)ハ林伊作ニ對スル自己ノ債權ノ爲メ本訴債權ノ轉付ヲ受ケタル者ナレハ即チ伊作ノ地位ニ代リタル者ニシテ伊作ノ有セシ權利ヨリ更ニ大ナル權利チ有シ得可ラサル筈合ナレハ云々本訴ノ債權五百圓ハ乙第二三號號ノ債權ト相殺ス可キモノナリ」云々説明シタルハ相當ニシテ論告ハ其理由ナキモノトス

右ノ理由ナルヲ以テ民事訴訟法第四百三十九條第一項ニ從ヒ主文ノ如ク本上告ヲ棄却スルモノナリ

○貸附品取戻使用損料請求ノ件

明治三十年第四百三十七號  
明治三十一年二月十五日第一民事部判決

○判決要旨

一 二个ノ訴訟ノ性質カ實質上同一ナラザルトキハ其請求ヲ證明スヘキ證據カ前後同一ナリトスルモ一事再訴ト云フヲ得ス(判旨第二點)

第一審 長崎地方裁判所

第二審 長崎控訴院

上告人 有馬憲文

訴訟代理人 ト部喜太郎

被上告人 牧瀬八九郎

右當事者間ノ貸附品取戻使用損料請求事件ニ付長崎控訴院カ明治三十年六月四日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告第一點第一號證ハ私署證書ニシテ上告人ノ否認セル所ナリ果シテ然レハ該證ハ法律上何等ノ効力チ有スルニアラス而シテ法律ハ否認者ニ否認ヲ要スル反證ヲ提出スルノ責任ヲ課スルコトナシ是レ證據法ノ通則ナリ然ルニ原院ニ於テ「私署證書ニ債務者ノ捺印アルトキハ正當ニ成立シタルモノト推定スヘク云々」之カ成立ヲ爭ハントセハ必スヤ反證ヲ舉示セサル可ラス

二个ノ訴訟



是レ我現行ノ法律ナリト判斷シタルハ法則ノ適用ヲ誤リタル不當ノ裁判ナリト云フニ在リ○  
 按スルニ甲第一號證ナル私署證書ノ差出人タル上告人ニ於テ其成立ヲ否認スルニ於テハ該證  
 書ハ上告人ニ對シ何等ノ効力ナキハ勿論ナレトモ上告人ハ第一審及ヒ第二審判決ニ明カナル  
 如ク該證名下ノ印影ハ其實印ナルコトヲ認メ單ニ盜印セラレタルコト、其署名ノ自筆ニアラ  
 サルコトヲ爭フモノナレハ此場合ニ於テ盜印ノ證明ナク又其證名ノ自筆タルト否トハ證書ノ  
 効力如何ニ直接ノ關係ナキコト原院說明ノ如クナル上ハ該證ヲ以テ一應上告人ヨリ提出シタ  
 ルモノト看做スハ法律上普通ノ推測ナリ原院ハ此推測ニ基キ前掲ノ如ク判定シタルモノナレ  
 ハ毫モ上告論旨ノ如キ不法ナシ

同第二點被上告人ノ裁キニ甲第一二號證カ金錢貸借ノ關係ヲ表明スルト稱シ貸金請求ノ訴訟  
 ナ提起シ而シテ偶々該訴訟カ被上告人ノ不利ニ歸シタルヲ以テ更ニ訴旨ヲ變更シ甲第一二號  
 證カ物品賣買ノ關係ヲ成立セシムルト稱シ貸付品取戻ノ本訴ヲ提起シタリ之ヲ以テ之ヲ見レ  
 ハ被上告人カ貸金請求ノ原因ト爲スモノモ甲第一二號證ニシテ茲ニ貸付品取戻請求ノ原因ト  
 爲スモノモ亦甲第一二號證ナリ原院カ本訴ヲ成立セシムルノ理由トシテ「畢竟本訴ハ裁キニ控  
 訴人ノ爲シタル貸金請求ノ訴ヲ排斥シタルカ爲メ茲ニ至リタルモノニシテ本訴ヲ斷スルニ當  
 リ前訴訟ニ於テ控訴人ノ爲シタル申立ニ就キ深ク之ヲ詰責スルヲ要セス」ト判斷セラレタルモ  
 被上告人ノ申立タル他訴訟ニ於ケル單純ノ自白ト異ナリ他ノ訴訟ヲ成立セシムルノ原因タル  
 ハキモノナルカ故ニ被上告人ハ其訴旨ヲ變更シ新訴ヲ提起シタル場合ニ於テ之ヲ再理スヘキ

判旨第二點

モノニアラス若シ本訴ニシテ法律上許ス可キモノトセハ必スシモ他ノ訴訟ノ成立不成立ヲ問  
 ハサルヘク從テ甲第一二號證ニ基キ被上告人ノ貸金請求成立シタル後ト雖モ上告人ハ同一證  
 ニ基ツク本訴請求ヲ排斥スル能ハサルヘシ豈ニ此ノ如キ理アラシヤ要スルニ原院ノ判斷タル  
 一事不再理ノ原則ヲ狹隘ニ解釋シタルノ不法アリト云フニ在リ○案スルニ本訴ト前訴ト實質  
 上同一ノ訴ニシテ單ニ訴名ヲ異ニスルニ過キサレハ一事再訴トシテ本訴ヲ排斥セサルヘカ  
 ラスト雖モ原院ノ說明ヲ見ルニ前訴ハ貸金トシテ請求シタルモ貸金ノ事實之レナシト判定セ  
 ラレタルニ依リ茲ニ甲第一號證ノ本旨ニ立戻リ本訴ノ請求ヲ爲スモノナリ云々畢竟本訴ハ先  
 キニ控訴人ノ爲シタル貸金請求ノ訴ヲ排斥セラレタルカ爲メ茲ニ至リタルモノ云々トアレハ  
 原院ハ本訴ハ前訴ノ排斥セラレタルカ爲メ提起セラレタルモノニシテ實質上前訴ト其訴旨ヲ  
 異ニスルモノト認メタルヲ明カナリ已ニ實質上訴訟ノ異ナル上ハ假令其請求ヲ證明スヘキ證  
 據ハ前後同一ナルトスルモ本訴ヲ以テ再訴ナリト論スルヲ得ス依テ本論旨モ亦其理由ナシト  
 ス

以上説明ノ如ク本件上告ハ民事訴訟法第四百三十九條第一項ニ依テ之ヲ棄却スヘキモノトス



○他家ノ推定家督相続人タル要件○未成年者離婚ノ能力

○無効相續確認請求ノ件

明治三十年第四百三十九號  
明治三十一年二月十五日第一民事部判決

○判決要旨

一 他家ニ入りテ當然法定ノ推定家督相續人トラントスルニハ其家ノ戸主ノ養嗣子タルカ又ハ其家ノ法定ノ推定家督相續人タルヘキ女子ト結婚シ婿養子タル身分ヲ取得セサルヘカラス(判旨第一點)

一 婚姻ハ結婚者本人ノ承諾ナクシテ成立スヘキモノニアラス故ニ未成年者ト雖トモ結婚シタル以上ハ承諾ヲ爲ス能力ヲ有セサルヘカラス從テ離婚ニ付テモ亦其能力ヲ有シタルモノト看做シタル裁判ハ相當ナリ(判旨第二點)

第一審 宇都宮地方裁判所 第二審 東京控訴院

上告人 (五月女 太郎) 訴訟代理人 太田 資時

被上告人 五月女 兵四郎

右當事者間ノ無効相續確認請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十年六月十二日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告論旨第一點ハ家督相續人ヲ廢嫡スルノ行爲ハ獨リ戸主タル父ノ特有スル權利ナルコト本邦古來ノ慣例ナリ故ニ戸主タル父ニ其相續人ヲ廢嫡スルノ意思ナキトキハ他ノ親族ヨリ容喙スルコト能ハサルハ勿論戸主タル父ノ意思ニ反シテ其相續人ヲ親族等ニ於テ廢嫡スルコトヲ得サルハ亦言ヲ俟タス上告人ハ原院ニ於テ五月女家前戸主タル養父九平ハ人事不省ナリシヲ以テ上告人廢嫡ノ行爲モ同人ノ眞意ニアラサル事實ヲ立證セントシテ加藤環藤田榮五月女源三郎五月女キヨ登井孫一郎玉生勸二郎ヲ證入トシテ訊問アラントシテ申請シタルニ原院カ假令證人等カ出廷ノ上控訴人カ證明セントスル事實ヲ陳述スルモ控訴人(上告人)ハ承認上タマト離婚シ且控訴人ノ實父鶴平ニ於テ控訴人ヲ己ノ家族トシ携帶ノ上分家シタル事實アル以上ハ證人等ノ陳述ハ本訴ニ何等ノ影響ヲ及ボサルヲ以テ該申請ハ不必要ト認メ却下シタル所以ナリト說明シ前戸主タル父九平ニ於テ廢嫡ノ意思アリタルヤ否ヤ事實ノ立證ヲ許サレルノミナラス同人ニ廢嫡ノ意思ナシトスル證人ノ陳述ハ不必要ナリトシテ排斥シタルハ廢嫡ノ行爲ヲ以テ戸主タル父ノ權限ナリトスル法則ヲ適用セス且唯一ノ證據ヲ排斥シタル不法ノ判決ナリト云フニ在レトモ○凡ソ他家ニ入りテ當然法定ノ推定家督相續人タルハ其家ノ戸主ハ養嗣子トナルカ又ハ其家ノ法定ノ推定家督相續人タルヘキ女子ト結婚シ婿養子タル身分ヲ取得セサルヘカラス本件ニ於テ上告人カ五月女家法定ノ推定相續人タル身分ヲ取得シタルハ全ク九平ノ婿養子トナリ長女タマト結婚シタルカ爲メナリ然ルニ原院ノ認定ニ由レハ上

判旨第一點

○他家ノ推定家督相続人タル要件○未成年者離婚ノ能力



○他家ノ推定家督相續人タル要件○未成年者離婚ノ能力

告人ハ承諾上タマト離婚シタルモノナレハ此離婚ト同時ニ五月女家ノ相續權ヲ失却シタルモノト云ハサルヘカラス然レハ廢嫡ニ關スル九平ノ意思如何ハ別ニ之ヲ推究スルノ必要ナク隨テ之ヲ證明スヘキ證據調モ亦之ヲ爲スノ要ナシ左レハ原院ノ證據調ノ申請ヲ却下シタルハ結局不法ニアラス

同第二點ハ凡ソ未丁年者ハ完全ノ能力ヲ有セストハ事實上ノ推定ナリ(本院明治二十八年二百五十八號)故ニ此法律上ノ推定ニ反シ未成年者ニ完全ノ能力アリテ承諾ヲ爲シタルモノトスルニハ他ニ確定ノ事實ナカルヘカラス然ルニ原院ハ「控訴人(上告人)カ離婚届即チ乙第五號證ニ連印シタルコトニ徴スルニ控訴人ハ實父鶴平其他親族協議ニヨリ承諾上故九平長女タマト離婚シ廢嫡ノ末分家シタルモノト認メサルヲ得スト」說明セラレタレトモ離婚當時上告人カ僅カニ十六年ノ未成年者ナリシコトハ被上告人ノ認ムル甲第四號證及乙第五號證ニヨリテ明ナリ果シテ然ラハ上告人ハ法律上ノ推定ニ於テ完全ノ能力ヲ有セサルカ故ニ單ニ離婚届ニ連印シアルノ一事ヲ以テ承諾上故九平長女タマト離婚シ承諾上廢嫡ノ末分家シタルモノトナシタル原判決ハ前掲法則ニ違背シテ不當ニ事實ヲ確定シタル不法アリト云フニ在レトモ○婚姻ハ結婚者本人ノ承諾ナクシテ成立スヘキモノニ非ラレハ未成年者ト雖モ結婚ヲ爲シタル者ハ其承諾ヲ爲ス能力ヲ有シタル者ナラサル可カラズシテ結婚ニ付キ承諾ヲ爲ス能力ヲ有スル以上ハ離婚ニ付テモ承諾ヲ爲ス能力ヲ有スル者ト謂ハサルヲ得ズ然レハ上告人離婚ノ當時其承諾ヲ爲ス能力ヲ有シタルヤ否ヤノ事實ハ特ニ調査スルノ必要ナク原院カ該事實ノ調査ヲ爲サズ

判旨第二點

シテ上告人ノ離婚ニ付テノ承諾ヲ有効ト認メタルモ廢モ論告ノ如キ不法ノ廉アルコトナシ同第三點ハ家督相續人ヲ廢嫡スルコトハ戸主タル父ノ權利ナルコト第一點ニ論述スル處ノ如シ原院ハ「控訴人ノ實父鶴平カ乙第四號證ノ如ク明治二十七年二月中控訴人チ己ノ家族トナシ携帶シ分家ヲ爲シタルコト及ヒ控訴人カ離婚届即チ乙第五號證ニ連署シタルコトニ徴スレハ控訴人ハ實父鶴平其他親族協議ニヨリ承諾上故九平長女タマト離婚シ廢嫡ノ末分家シタルモノト認メサルヲ得スト」說明セラレタリト雖モ五月女家ノ戸主ニアラサル上告人實家ノ父ノ行爲ト上告人ノ行爲トニ依リテ五月女家ノ相續人ヲ廢嫡スルコト能ハサルハ論ヲ俟タズ然ルニ原院ハ五月女家ノ戸主タル養父ノ眞意ニヨラス上告人實家ノ父ト上告人ト承諾上五月女家ノ廢嫡トナリタルモノトシテ說明セラレタルハ法則ニ違背シ事實ヲ確定シタル不法アリト云ヒ同第四點ハ原判決ハ「本訴事實上陳述ノ要領ハ第一審判決ニ指示スル所ト異ナラス」トアリテ其第一審判決ヲ見ルニ控訴人(上告人)ノ主張ニ曰ク「兵四郎ニ於テ九年跡相續ヲ爲シタルモ元來廢嫡届ハ九平ノ眞意ニ出テタルモノニアラス根本的無効ノモノニ付原告(上告人)ハ未タ九平相續人タル資格ヲ失ハサルモノナレハ被告ハ其爲シタル九平跡相續ノ無効タルコト確認スヘシ」トアリ又原院ノ調査ニハ「控訴人ヲ廢嫡セシハ(中略)決シテ親族ノ協議ヲ經タルモノニアラス九平並ニ控訴人ハ更ニ承諾セスト」トアリテ上告人ハ徹頭徹尾廢嫡ハ前戸主タル養父九平ノ眞意ニアラサルヲ主張セリ而シテ被上告人ハ此點ニ對シ「原告並ニ其實父鶴平(中略)被上告五月女家ト分家別立シ其際原告ハタマト離婚シ且原告及鶴平連署ノ上廢相續人願ヲ所轄郡役所ニ差出シ

○他家ノ推定家督相續人タル要件○未成年者離婚ノ能力



(第一審判決摘示)ト主張シタルノ外原院調査ニ、鶴平或ニ其妻及控訴人兄弟ヲ分家別立シトアルノミナルヲ以テ前段廢嫡ハ養父九平ノ意思ニアラスト云フ上告人ノ主張ハ被上告人ニ於テ認メ居ルモノト謂ハサル可ラス果シテ然ラハ乙第六號證ノ廢相續人願ハ根本的無効ニシテ上告人ハ依然五月女家ノ相續權ヲ有ルモノナルカ故ニ原院カ上告人ノ請求ヲ却ケタルハ家督相續ニ關スル法則ヲ適用セサル不法ノ判決ナリト云ヒ同第五點ハ上告人ハ第四點ニ陳述スル如ク廢嫡ハ前戸主タル養父九平ノ意思ニアラサルコトヲ主張シタルニ拘ハラヌ原院ハ單ニ控訴人ノ實父鶴平カ控訴人ヲ己ノ家族トナシ携帶シテ分家ヲ爲シタルコト及控訴人カ離婚届即乙第五號證ニ連署シタル事ニ徴スルハ控訴人ハ實父鶴平其他親族協議ニ因リ承諾上故九平長女タマト離婚シ廢嫡ノ末分家シタル者ト認メサルヲ得スト說明シ而シテ廢嫡ハ養父九平ノ意思ニアラストスル證人ノ陳述ヲ以テ本訴ニ何等ノ影響ナシト判示シタルハ訴訟ノ基本タル事實ノ審理ヲ盡ササル不法ノ判決ナリト云フニ在レト○右三箇ノ論告ハ要スルニ執レモ廢嫡ノ行爲ハ養父ノ九平ノ戸主權ニ專屬ストノコトヲ以テ論據ト爲スモノナルハ本件ニ付其謂レナキコトハ第一點ニ對スル說明ニ依リテ了解スルヲ得ヘシ同第六點ハ原院カ控訴人ノ實父鶴平カ控訴人ヲ己ノ家族トシテ携帶シテ分家ヲ爲シタルコト(中畧)ニ徴スレハ控訴人ハ(中畧)廢嫡ノ上分家シタルモノト認メサルヲ得スト說明セラレタルニ依テ見レハ分家ノ事實ヲ以テ廢嫡ノ事實ヲ推測セラレタルモノナリ果シテ然ラハ上告人カ其分家ノ家族中ニ在ルハ適法ノモノナルヤ否ヤヲ審理セサルヘカラス若シ上告人カ廢嫡セラレサル以前ニ於テ假令上告人カ分家ノ家

族トシテ分家屬ニ記載アリトスル上告人ハ夫レカ爲メニ分家シタルモノト云フコトヲ得ス何トナレハ廢嫡ハ養家戸主ノ權利ニ屬スレハナリ今乙第四號證分家別立届ト乙第六號證廢相續人願トチ對照スルニ何レカ前ニ成立シタルモノナルヤ之ヲ知ルニ由ナシ寧ロ廢嫡許可ノ日付ハ明治二十七年七月二十一日トアルニ依テ見レハ廢嫡願カ後ニシテ分家屬カ前ナルヤ知ルヘカラス果シテ然ラハ不適法ナル乙第四號證分家ノ事實ニ依リ廢嫡ノ事實ヲ推測スルコトヲ得サル筋合ナレハ原院ハ分家ノ事實ハ廢嫡ノ前ナルヤ又ハ其後ナルヤ此點ニ對シテ審理ヲ盡ササルヘカラサルニ其事ヲクシテ直チニ分家ノ事實ニ依リ廢嫡ノ事實ヲ推測シタルハ審理不盡ノ不法アル判決ナリト云フニアレトモ○上告人ノ實父鶴平カ上告人ヲ己レノ家族トシテ携帶シ分家ヲ爲シタルハ上告人カ廢嫡セラレタル結果ナリトコトニ付キ當事者間ニ爭ナカリシハ原院口頭辯論調査中控訴人(上告人)ノ演述ノ部ニ控訴人チ廢嫡シ云々無理ニ分家ヲ爲サシムルコトニナリタリ云々ト陳述シタル旨記載アリテ被上告人ニ於テモ廢嫡ノ前分家ト爲リタリト主張シタル事跡ナキニ徴シテ明カナレハ分家カ廢嫡前ナルヤ否ヤノ事實ハ等ニ係ラサルモノナルヲ以テ調査スル要ナシ加之第一點ニ於テ說示シタル如ク廢嫡ハ離婚ヨリ生スル當然ノ結果ナルヲ以テ離婚ノ事實存在スル以上ハ分家ノ事實ハ本件ニ付キ重要ナル事項ニ非サルナリ然レハ原判決ヲ以テ論告ノ如キ不法ノ廉アル裁判ナリト云フコトヲ得ス以上說明ノ如ク本件上告人一モ適法ノ理由ナキヲ以テ民事訴訟法四百三十九條第一項ニ從ヒ主文ノ如ク判決ス



〇不當處分損害要償ノ件

明治三十年第二百八十三號  
明治三十一年二月十六日第二民事部判決

〇判決要旨

一 郡長ハ民事上國ノ代表者トシテ訴訟ヲ爲スノ資格ヲ有スルモノニアラス故ニ  
國ヲシテ賠償ノ責任ヲ負ハシメントスル訴訟ヲ郡長ニ對シ提起シタルハ不當  
ナリ

一 當事者ノ代表資格ノ欠缺ハ裁判所カ職權ヲ以テ調査スヘキ責任ヲ有スルモノ  
トス(以上判旨第三點)

第一審 青森地方裁判所八月支部 第二審 函館控訴院

上告人 青森三戸郡長 宜美 訴訟代理人 鹽入太輔

被上告人 松橋福次郎 訴訟代理人 羽島勝江

右當事者間ノ不當處分損害要償事件ニ付函館控訴院カ明治三十年五月十九日言渡シタル判決  
ニ對シ上告代理人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告代理人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタ

立會檢事藤堂融ハ意見ヲ陳述シタリ

判決

原判決ヲ破毀シ本院ニ於テ更ニ判決スル左ノ如シ

第一審判決ヲ廢棄ス

本件ノ訴ハ之ヲ却下ス

訴訟費用ハ總テ被上告人ニ於テ負擔ス可シ

理由

上告第三點ハ地方稅徵收權ハ地方稅規則第四條第六條等ニアルカ如ク全ク府縣知事ニ在リ今  
日ニ至テモ依然トシテ府縣知事ニアリテ郡長ニアラサルコトハ府縣稅徵收法第五條以下地方  
稅滯納處分規則明治二十三年四月內務省訓令第二百八十三號等(國稅徵收法第八條國稅滯納處  
分法第十一條第十三條參觀)ニ依テ明カナリ去レハ郡長ハ一時ノ收入官吏ニシテ縣知事ノ行政  
行爲ノ一部ヲ委任ニ由テ處辨シタルニ過キサカ故ニ地方稅ニ關スル國(府縣)ノ代表者ハ縣知  
事ナリトス然ルニ其代表者ニアラサル上告人ヲ對手人ト爲シタルハ不法ニシテ裁判所カ宜シ  
ク職權ヲ以テ調査スヘキ事項ナリトス然ルニ原院ハ之ヲ調査セス漫然正當ニ代表セラレサル  
者ニ對シテ判決ヲ下シタルハ不法ナリト云フニ在リ

依テ按スルニ本件ハ被上告人松橋福次郎ニ於テ青森縣三戸郡長立岩一郎カ職務ヲ以テ明治二  
十年地方稅及町費等ヲ怠納シタリトシテ所有ノ債權證書若干ヲ公賣ニ付シタルハ不當處分

國ノ代表者〇職權調査〇代表資格ノ欠缺



ナリトシ同郡長ニ係リ弘前始審裁判所八月支廳ニ不當處分取消ノ訴ヲ提起シタル末明治二十二年八月六日右公費處分ハ明治七年司法省第二十三號達及明治十一年大藏省乙第七號達第六項ノ規定ニ違背シタル不當處分ナリトノ理由ヲ以テ公費處分取消ノ裁判(内閣ノ裁可ヲ經タルモノ)ヲ受ケタルニ基キ明治二十九年六月二十三日更ニ現任ノ三戸郡長タル上告人ニ對シ前任郡長ノ不當處分ノ爲メニ受ケタル損害ノ賠償ヲ求ムル訴訟ナレハ其訴旨タル國庫ヲシテ賠償ノ責ヲ盡サシメントスルニ在ルモノトス蓋シ本件ニ於テ三戸郡長ヲ對手人ト爲シ國庫ヲシテ賠償セシムルニハ不當處分ヲ爲シタル官吏ノ所屬官廳ヲ被告ト爲ズ可キモノトノ見解ニ基キシモノナル可シト雖モ明治二十五年勅令第六號(第一條各省北海道廳及府縣廳ハ其所管又ハ監督スル事務ニ係ル民事訴訟ニ付國代表スル第二條各省大臣ハ省令ヲ以テ所屬特定地方機關中其司掌事務ニ係ル民事訴訟ニ付國代表スルモノ)ヲ定ムルコトヲ得第三條前二條ノ場合ニ於テ國代表シ訴訟ヲ爲スモノハ各官廳ハ長官又ハ長官ノ指定シタル所屬官トス)アリ此規定ニ據レハ民事訴訟上國代表シ訴訟ヲ爲スモノハ各省北海道廳及府縣廳若クハ各省大臣カ省令ヲ以テ定ムル特定地方機關ハ各行政廳ハ長官若クハ長官ノ指定シタル所屬官吏カ之ヲ可カラズ然ルニ三戸郡役所ハ各省所屬ハ特別地方機關ニアラサルハ勿論上告人ハ其監督長官ヨリ特ニ指定セラレタル所屬定吏ニモアラサレハ民事上國代表者トシテ訴訟ヲ爲スハ資格ヲ有セサルモノニ付被上告人カ之ニ對シテ本訴ヲ提起シタルハ其當ヲ失シタルモノトス而シテ代表資格ノ欠缺ニ付テハ裁判官カ職權ヲ以テ調査ス可キ責任ヲ有スルモノナレハ原裁

判旨第三點

判所ハ抗辯ハ有無ニ拘ハラズ上告人ヲ以テ訴訟ヲ爲スハ資格ナキモノトシ本案ニ對スル第一審判決ヲ廢棄シ直チニ訴ノ却下ヲ命ス可キハ當然ナルニ事爰ニ出テ第一審判決ヲ認可シ控訴ヲ棄却シタルハ不法ハ裁判ニシテ本點上告ハ其理由アルモノトス既ニ本點ニ於テ上告人ノ代表資格ノ欠缺ヲ認メタル以上ハ他ノ論點ニ付テハ説明ヲ爲スノ要ナシ

右ノ理由ナルヲ以テ民事訴訟法第四百四十七條第一項ニ據リ原判決ノ全部ヲ破毀シ尙ホ同法第四百五十一條第一號ニ依リ當裁判所ニ於テ第一審裁判ヲ廢棄シタル上訴ヲ却下シ訴訟費用ハ全部被上告人ニ於テ負擔ス可キ旨ノ判決ヲ爲スヲ相當トス是レ主文ノ如ク判決スル所以ナリ

〇永續講掛金請求ノ件

明治三十年第四百四十八號  
明治三十一年二月十七日第一民事部判決

〇判決要旨

一 保證人カ其擔保ヲ確實ナラシムル爲メ特ニ主タル債務者ト連帶シテ債務ヲ負擔スルハ條理上妨ケナク且ツ裁判例ニ於テ是認スル所ナリ(判旨第四點)

第一審 東京地方裁判所

第二審 東京控訴院

上告人 福地フサ

外二名

訴訟代理人 岡本 宏

帶連保證



被上告人 武藤春吉 訴訟代理人 堀江榮次郎

右當事者間ノ永續掛金請求事件ニ付キ東京控訴院カ明治二十九年十一月二十九日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決

原判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ東京控訴院ニ差戻ス

理由

上告論旨第一點ハ原裁判所ハ控訴人ハ本件ノ請求金ハ毎日開會ノ際支拂フヘキモノナルニ付開會セサレハ義務ノ履行ヲナスニ由ナシ然ルニ被上告人久シク開會セサルノミナラス控訴人ニハ其開會ノ通知ヲモナサリシモノナリト主張スルモ其開會若クハ通知ヲ爲サリシトノコトハ専モ之ヲ認ムヘキ立證ナキ云々ト判定サレタリト雖トモ開會ノ事實ナケレハ義務ノ履行ヲナスヲ要セサル態様ノ義務ナル場合ニ在テ其義務履行ノ期タル間會ノ事實既ニ到來セリトシテ支拂ヲ求ムルモノハ相手人カ開會ノ事實ノ到來ヲ抗爭スル限リハ其到來ヲ立證ナサレハカラス即チ此場合ニハ開會若クハ通知ノ事實アリタリトノ舉證ノ責任ハ義務履行請求者ナル被上告人ニ屬シテ義務履行ヲ求メラルル所ノ上告人ニ存セサルナリ故ニ上告人ニ於テ開會若クハ通知ノ立證ヲササレハトテ以テ開會通知ノ事實ナシトスルヲ得スシテ從テ履行スヘキモノナリトスルヲ得ス被上告人ニ於テ立證ヲサスルハ開會通知ノ事實ナシトシテ從テ履行ノ期到來セサルモノトナサレハカラス然レニ之レカ立證ヲ上告人ノ責ニ歸シテ以テ

支拂義務履行ヲナスヘシト判決セラルニ至リタルハ即チ舉證ノ責任ヲ顛倒シタル違法ノ判決ナリト云フニ在リ○依リテ一件記録ヲ按スルニ本訴ノ請求金ハ毎月八日開會ノ際支拂フヘクシテ開會ナケレハ未タ支拂フニ及ハサルモノナルコトハ被上告人ノ爭ハサル事實ナリ而シテ被上告人ハ毎月八日開會シ來レリト主張シテ本訴ノ請求ヲ爲シ上告人ハ未タ曾テ開會アラサリシト抗辯シテ本訴ノ請求ヲ拒ムニ方リ開會ノ有無ニ付キ舉證ノ責任ニ任スヘキモノハ上告人ニ非スシテ被上告人タラサルヘカラス何トナレハ被上告人ハ開會アリシトノ事實ニヨリテ以テ本訴ノ請求ヲ爲シ得ヘキモノナレハナリ然ルニ原院ハ舉證ノ責任ヲ上告人ニ歸シ開會ヲ爲ササリシトノコトハ専モ之ヲ認ムヘキ立證ナキ云々ト判定シタルハ上告論旨ノ如ク證據法ニ違背シタル不法ノ判決タルヲ免カレサルニヨリ之ヲ破毀スヘキモノトス

上告論旨第四點ハ長谷川留五郎久代兼次郎福地フサト連帯シテ甲一號證ノ債務ヲ負擔シタルハ其證書ノ本文ニ照ラシ明白ナレハ右留五郎兼次郎ノ兩名ハ右連帯債務者タルコトノ特別保證ヲ爲シタルモノト認ムレト判定セラル然ルニ連帯債務ト保證トハ同一ノモニアラサルハ勿論又特別ノ保證ナルモノモ通常保證ノ質ヲ失ハサルヘク純然タル連帯債務トハ同一ノモノニアラサルナリ原裁判所ハ之ヲ同一視セフレ連帯債務者ナリトシ是レ連帯債務者ト保證者トヲ混同シタル違法ノ判決ナリト云フニ在リ○依テ按スルニ連帯債務ト保證債務トハ固ヨリ同一ノモノニ非ス然レモ保證人ニシテ一層其擔保ヲ確實ナラシムル爲メ特ニ主タル債務者ト連帯シテ債務ヲ負擔スルモ條理ニ於テ専モ妨ケナキハミナラス裁判例ニ於テモ夙ニ之ヲ認メリ故ニ

判旨第四點



原院カ甲第一號證ニ依據シテ上告人留五郎兼次郎兩人ハ主タル債務者フサト連帶シテ該證ノ債務ヲ負擔シタル特別保證人ナリト判定シタルモ決シテ違法ニアラス  
 上告人尙ホ第二第三第五點トシテ論告スル所アルモ既ニ第一點ニ於テ原判決ヲ破毀スヘキモノト爲シタル以上ハ他ノ論點ニ付一々説明ヲ付スルノ必要ナシ  
 右ノ理由ニ基キ民事訴訟法第四百四十七條第四百四十八條ノ規定ニ從ヒ主文ノ如ク判決スルモノナリ

○貸米請求ノ件

明治三十年第四百四十號  
明治三十一年二月十七日第一民事部判決

○判決要旨

一 利息制限法ハ金銀貸借上ノ外適用スヘキモノニアラス(判旨第三點)

第一審 神戸地方裁判所 第二審 大阪控訴院

上告人 〔武村重助 白瀧途藏〕 訴訟代理人 若林成昭

被上告人 高尾三郎(見入) 小林源藏

右當事者間ノ貸米請求事件ニ付大阪控訴院カ明治三十年六月三十日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告第一點被上告人ハ上告人ニ係リ本訴ヲ提起スルノ前第一債務者タル山田龜太郎ニ對シ請求シタリシカ其際ハ現ニ正米ノ貸借ナルニ拘ラス自ラ之ヲ金錢ニ換算シテ二百三十七圓二十錢ヲ請求シ其支拂ヲ得サル爲メ有體動産ノ差押ヲ爲シタルモ之ヲ以テ支拂ニ充ツ可ラサルヨリ第二ノ債務者タル上告人ニ對シ請求スルモノナリトハ被上告人ノ主張スル所ナリトス此事實ニ依レハ當初第一債務者ニ對シ請求スル際正米ヲ金錢ニ變シタルコトハ明白ナリ然ラハ則チ上告人タル保證人ニ對スル請求モ亦金錢ナラサル可ラサルハ對人擔保ニ於ケル當然ノ原則ナリトス加之ナラス被上告人カ第一債務者ニ對スル請求願ハ一石ニ付八圓八十錢ノ割合ナル上告人ニ對シテハ見積額一石代九圓八十錢ヲ請求スルモノナルコトハ一件書類ニ明カサル所ナリ然ルニ原院カ保證人タル上告人ニ對シ主タル債務者ノ義務ト異ナリタル義務履行ヲ命シ且主タル債務者ノ履行スヘキ金額ヨリ多額ノ金圓(見積金)ヲ支拂フヘキ旨判決シタルハ對人擔保ニ違背セル不法ノ裁判ナリト云フニ在レトモ○契約ハ當事者雙方ノ合意アルニアラサレハ之ヲ變更スルヲ得サルハ普通ノ原則ナレハ被上告人カ先キニ甲第一號證ナル米ノ貸借證書ニ



由リ主タル債務者ニ對シ米ノ代リニ其時價ニ相當スル金額ヲ請求シタリトスルモ之レカ爲メ該證ノ契約ハ當然變更セラルヘキニアラス然レハ被告人カ本訴ニ於テ米ノ返還ヲ請求スルハ當然ニシテ金額ノ辨償ヲ求ムルコト却テ甲第一號證ノ約旨ニ反スルモノト云フヘシ又原院ニ於テ被告人ニ對シ代價辨償ヲ命シタルコトナキモノナレハ原判決ハ上告論旨ノ如キ擔保法ニ違背シタル不法アルコトナシ

上告第二點現今ノ規則ニ於テハ主タル債務者ニ於テ辨償ノ資力ナキコトヲ證明スルニ非レハ保證人ニ對シ請求スルコト能ハサルモノナレハ本件ニ於テモ被告上告人ハ先ツ主タル債務者タル山田龜太郎カ無資力ナルコトヲ證セサルヘカラサルニ被告上告人ハ原院ニ於テ之カ證トシテ甲第四號證即チ執達吏ノ有體動産差押調査ヲ提出セルノミニシテ他ニ資産ナシトノ證左一モ之ナキニモ拘ラス原院カ主タル債務者ハ無資力ナリト認定シタルハ有體動産ノミニテ支拂ヲ爲シ得サルモノハ無資力者ナリト云フニ歸スルモノニシテ法律ニ誤リテ事實ヲ確定シタル不法ノ裁判ナリト云フニ在レトモ

○甲第二三號證ニ基キ主タル債務者ノ總テノ財産ニ對シ強制執行ヲ爲スヘキ場合ニ於テ其結果甲第四號證ノ如クナリシテ以テ原院ハ主タル債務者ノ全ク無資力ナルコトヲ認定シタルモノナレハ上告論旨ノ如ク原判決ハ有體動産ノミニテ支拂ヲ爲シ得サルモノハ無資力者ナリト云フニ歸スルカ如キ不法ノ點ナシ

上告第三點被告上告人ハ其請求米一石ニ付正米二升五合チ一ヶ月分ノ利息トシ即チ年三割ノ利息ヲ請求スルハ明カニ利息制限法ニ違背シタルモノトス依テ上告人ハ一審以來之ヲ抗爭シタ

判例第三點

ルニ拘ラス原院ハ何等ノ理由ヲモ付セス之ヲ排斥シ被告上告人ノ請求ヲ全然認許シタルハ利息制限法ニ違背シタル裁判ナルノミナラス必要ナル爭點ニ向テ判斷セサル不法ノ裁判ナリト云フニ在レトモ

○利息制限法ハ金錢ノ外適用スヘキモノニアラサルナリ故ニ原院ハ其旨ヲ説明シ以テ被告上告人ハ抗辯ヲ排斥シタルモノハナレハ利息制限法ニ背反セサルハ勿論必用ナル爭點ニ向テ判斷セサルカ如キ不法ノ判決ニアラス

以上說明セシ如ク上告論旨ハ總テ適法ノ理由ナキヲ以テ民事訴訟法第四百三十九條第一項ニ照シ之ヲ棄却スル所以ナリ

○相續權回復並ニ遺産相續登記取消請求ノ件

明治三十年第二二六三六號  
明治三十一年二月二十二日第一民事部判決

○判決要旨

- 一 法定ノ推定家督相續人タル長女ノ養子トナリタル者カ養嗣子ノ身分ヲ取得スルハ本邦習慣ノ認ムル所ナリ
- 一 家督相續權ハ戶主ノ最近卑屬親ナル其子ニ屬スヘシ直チニ其孫ニ屬スヘキモノニアラス故ニ長女ノ養子カ離縁トナリ其家ヲ去リタルトキハ假令其婚姻

養嗣子ノ身分取得○家督相續權ノ歸屬○家督相續權アル長女ノ養子



中ニ生マレタル子女アリト雖トモ家督相續權ハ其配偶者ニ復歸シテ其子女ニ移轉セズ

一家督相續權アル長女ノ婿養子トナリタル者ハ戸籍ノ名稱ハ婿養子タルト養嗣子タルトニ論ナク其家ノ法定家督相續人タルヘキモノトス(以上判旨第四點)

第一審 千葉地方裁判所木更津支部 第二審 東京控訴院

上告人 堀江竹松 訴訟代理人 石山彌平

被上告人 堀江ミチ 訴訟代理人 岸本辰雄 中村福太郎

右當事者間ノ相續權回復並ニ遺産相續登記取消請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十年四月二十九日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

立會檢事岩野新平ハ意見ヲ陳述シタリ

判決

原判決ヲ破毀シ當院ニ於テ判決スルコト左ノ如シ

被上告人ハ上告人カ亡堀江長右衛門ノ家督相續人タルコトヲ確認シ明治二十九年五月二日被上告人カ爲シタル相續ハ之ヲ取消スヘシ  
遺産相續登記取消ノ請求ニ付テハ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ東京控訴院ニ差

戻ス

理由

上告論旨第四點ハ上告人ハ二十五年一月亡長右衛門ノ唯一長女ハルノ婿養子トナリタルモノニテハルハ先夫伊勢松ト同二十三年十一月離別シ上告人トノ結婚迄テ三月間獨棲セルモノタリ勿論此際被上告人ハ既ニ出生シ居リタルモハルカ伊勢松ニ別レ上告人ト結婚スル迄ノ間若シ戸主死亡スルカ如キ場合アラハ其相續ハ何人カ之ヲ爲スヘキヤ當然ハルカ之ヲ爲ス可ク被上告人ニ於テ相續ス可キモノニアラサルヤ論テ俟タス然ラハ即チハルハ父ヨリハ養子自己ヨリハ婿タル上告人チ實ヒ受ケタルカ爲メニ元來享有ノ相續權ヲ被上告人ニ剝奪セラル可キモノニ非ラス然レトモ婿ヲ迎ヒタル相續權アル女子ハ毎ニ其婿ニ相續權ヲ移付スルヲ以テ本邦ノ法理慣行トスルカ故ニ上告人ハ此法則ニ依リ當然亡長右衛門ノ相續人タル權利アルモノトス若夫此法則チ度外ニ措キ得ルモノトセハ相續權アルノ女子ハ婿ヲ迎ヘスシテ終身獨棲スルニアラサレハ相續スルヲ得ス且相續權アル婦ハ婚姻スルモ其夫カ養嗣子ニ非スト云フチ辭柄トシ常ニ之ヲ其配下ニ置クノ不都合ヲ免レヌ豈斯ル不法不理アルヘケンヤ故チ以テ相續權アル女子ノ婿ニテ戸主ノ養子タル男子ハ其資格ニ於テ當ニ養嗣子(法定ノ推定家督相續人タルコト)タリ養嗣子乃チ法定ノ推定家督相續人タルカ故ニ特ニ之ヲ標記セサルモ相續ノ權利ヲ享有スルヤ論テ俟タス二十年千葉縣令達第二十四號ノ如キ此法則ノ宣明ニ外ナラス本件上告人ハ即チ此位地ニ立テタルモノタルニ拘ハラヌ原院カ前記ノ法則ヲ適用セサルハ不法ナリト云フニ

養嗣子ノ身分取得○家督相續權ノ歸屬○家督相續權アル長女ノ婿養子



判旨第四點

依リテ審按スルニ一家ノ法定ノ推定家督相續人タル長女ノ婚養子ト爲リタル者ハ養嗣子ノ身分ヲ取得スルハ本邦習慣ハ認ムル所ナリ而シテ其婚養子ニシテ離縁シテ其家ヲ去リタルトキハ假令其婚姻中ニ生マレタル子女アリト雖トモ其配偶者ナル家ノ長女ニシテ相續開始前ニ死亡シ又ハ相續權ヲ失ハカル以上ハ其家ノ相續權ハ其配偶者ニ復歸シテ其子女ニ移轉セサルナリ何トナレハ家督相續權ハ月主ノ最近卑屬親ナル其子ニ屬スハカシテ直チニ其孫ニ屬スヘキモノニ非ラス且ツ孫ハ父カ離縁トナレハトテ祖父ノ最近親屬ナル母ヲ越ヘテ相續スヘカヲサレハナリ故ニ月主ニ於テ再ヒ婚養子ヲ迎ヘタルトキハ其婚養子ハ又前顯ノ習慣ニ依リ嗣子ノ身分ヲ取得スルハ論ナシ去レハ後ハ養子ハ月籍上ノ名稱婚養子タルト養嗣子タルトニ論ナカ法定家督相續人タルニ於テ區別アルコトナシ然ルニ原院ハ法律上婚養子ト養嗣子ノ間ニ區別アリト爲シ上告人ハ婚養子ニシテ養嗣子ニ非サルガ故ニ照江家ノ相續權ハ上告人ニアラスシテ被上告人ニアル旨裁判シタルハ確定シタル事實ニ對シ法律ノ適用ヲ誤マリタルモノナルニヨリ上告論旨ハ其理由アリ依リテ原判決ハ之ヲ破毀スヘキモノトス既ニ此點ニ付キ原判決ヲ破毀スヘキモノト爲ス以上ハ自餘ノ上告論旨ニ付キ一々説明ヲ與フルノ必要ナシ右ノ理由ニ基キ相續權回復ノ請求ニ付テハ民事訴訟法第四百五十一條ニ從ヒ遺產相續登記取消請求ニ付テハ同法第四百四十八條ニ從ヒ主文ノ如ク判決スルモノナリ

○質地受戻並ニ抵當登記請求ノ件

明治三十年第百九十一號  
明治三十一年二月二十三日第二民事部判決

○判決要旨

一 民事訴訟法ニ所謂數個ノ獨立ナル攻撃又ハ防禦ノ方法トハ孰レモ相互ニ相對的無關係ナル法律上ノ判斷ヲ爲サシムルモノナ云フ故ニ辯論中ハ訴訟ノ如何ナル程度ニアルヲ問ハス民事訴訟法第百十九條ノ規定ニ從ヒ何時ニテモ之ヲ制限シ得ヘシ又辯論ノ終結後ハ同法第二百三十條第二項ノ規定ニ依リ其間適切ナリト思料スル一個ニ對シテノミ判斷ヲ與フルコトヲ得ヘシ(判旨第二點)

(參照) 同一ノ請求ニ關シ數箇ノ獨立ナル攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ提出シタルトキハ裁判所ハ先ツ辯論ヲ其一ニ制限ス可キヲ命スルコトヲ得(民事訴訟法第百十九條)

然レトモ數箇ノ獨立ナル攻撃又ハ防禦ノ方法中其一箇ヲ適切ナリトスルトキハ裁判所ハ他ノ方法ニ付キ判斷スル義務ナシ(民事訴訟法第二百三十條第二項)

第一審 千葉地方裁判所八日市場支部 第二審 東京控訴院

上告人 香取新之助 訴訟代理人 中村六郎

數箇ノ獨立ナル攻撃又ハ防禦ノ方法ノ意義○其制限